女鑑



第十七年第五號

女鑑　第十七年第五號目次

東京高等師範學校教授 文學士 松本孝次郎著

家庭に於ける兒童教育

總クロース 菊版二百頁
定價五拾五錢
郵税八錢

本書は**兒童教育專攻家**として教育界に名聲隱なき著者が多年研究せられたる**學説**と**實驗**とに基き**實地家庭**に行ひ得らるゝやう極めて**平易且切實**に談話體を以て**兒童教育法**を説述せられたる者にして世にありふれたる家庭教育書類と全く其の**選**を**異**にせり而も何人にも解り易く容易に**育兒**の**妙訣**を了得するを得べしされば世の父母たる人は子女將來の爲**是非熟讀**せざる可らざるものなり

此書は亦**兒童教育**の任にある**學校教師等**には必缺く可らざる**良參考書**なり

重要目次——◉第一家庭に於ける德育 ◉第二家庭に於て起り易き弊害 ◉第三兒童の賞罰 ◉第四遊戲の價値 ◉第五兒童文學 ◉第六兒童と自立心 ◉第七感情教育 ◉第八家庭と園藝 ◉第九兒童と言語 ◉第十兒童と圖書 ◉第十一青年教育の注意 ◉第十二男女の兒童 ◉第十三小兒室の構造及設備

發行所 東京市京橋區築地二丁目 電話新橋八八、二六九三 株式會社 **國光社**＝關西大賣捌 大阪市南本町 **積文社**



纖手報國

(1)大塚　虎子　(2)前田むら子　(3)加藤ふみ子　(4)松村　幸惠



(5)和田みつ子　(6)土屋つき子　(7)中田すや子

(8)畑江たか子　(9)大熊よし子　(10)一柳つか子　(11)影山名世子

(本誌第百二十七頁参看)

女子風俗





慈心殉難

(12)知野やす子　(13)鱸　けい子　(14)栗原きん子　(15)堀　せい子



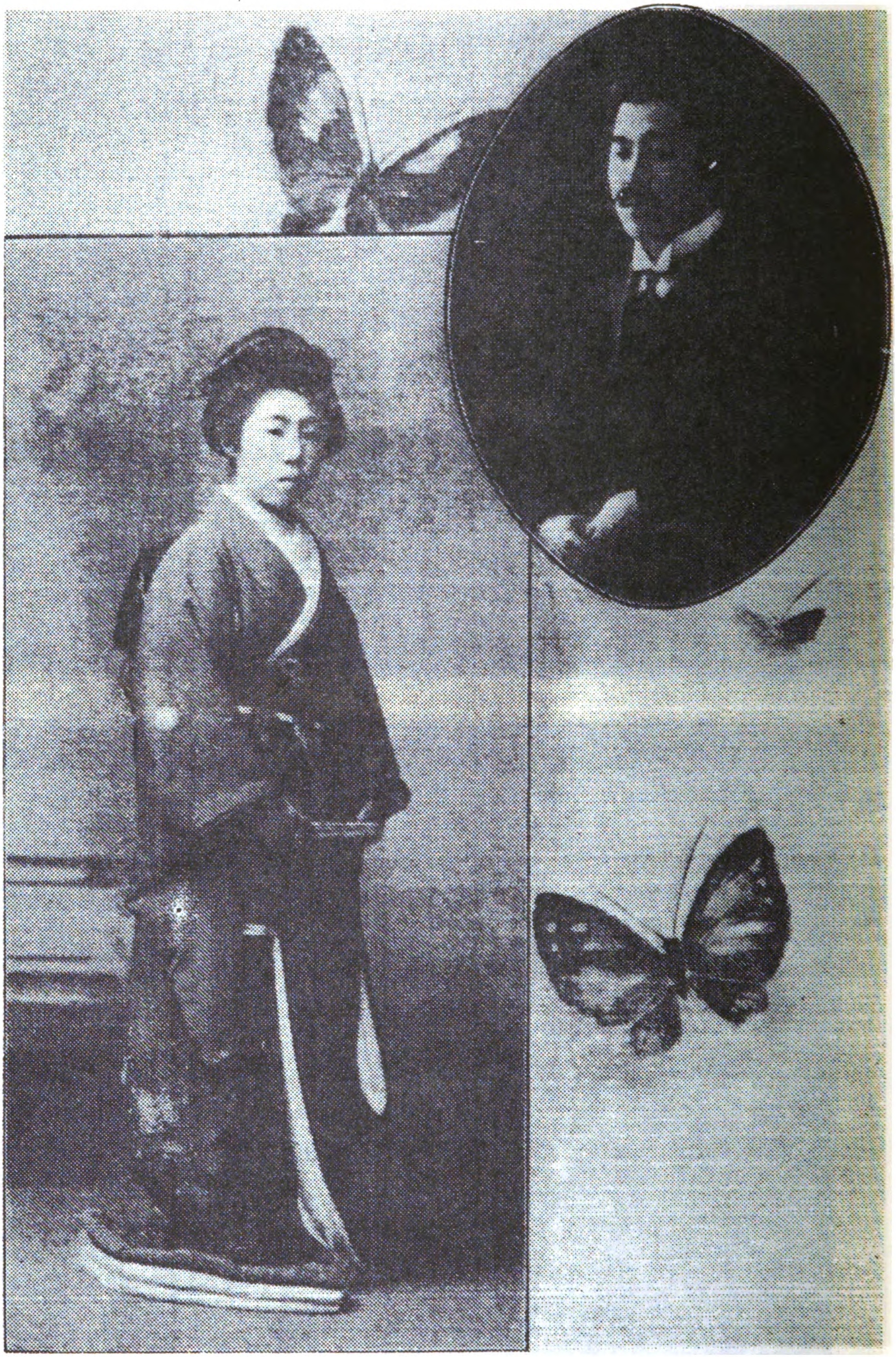
(16)堀江とよ子　(17)大貫つめ子　(18)大島さと子

(19)若山みと子　(20)岩本さみ子　(21)三宅けい子　(22)河崎　延子

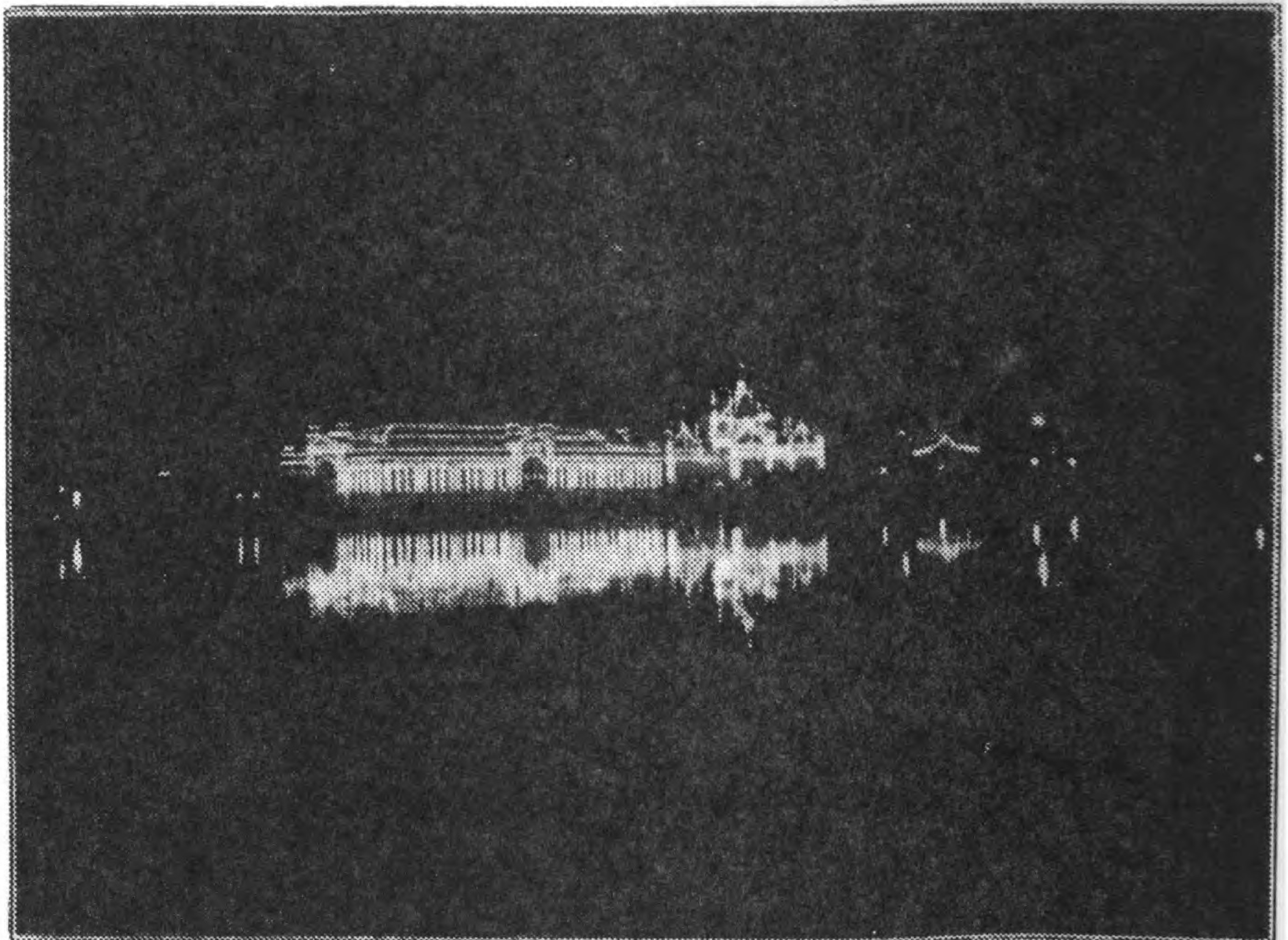
(本誌第百二十七頁參看)


美術造花
附属品材料
装飾一式

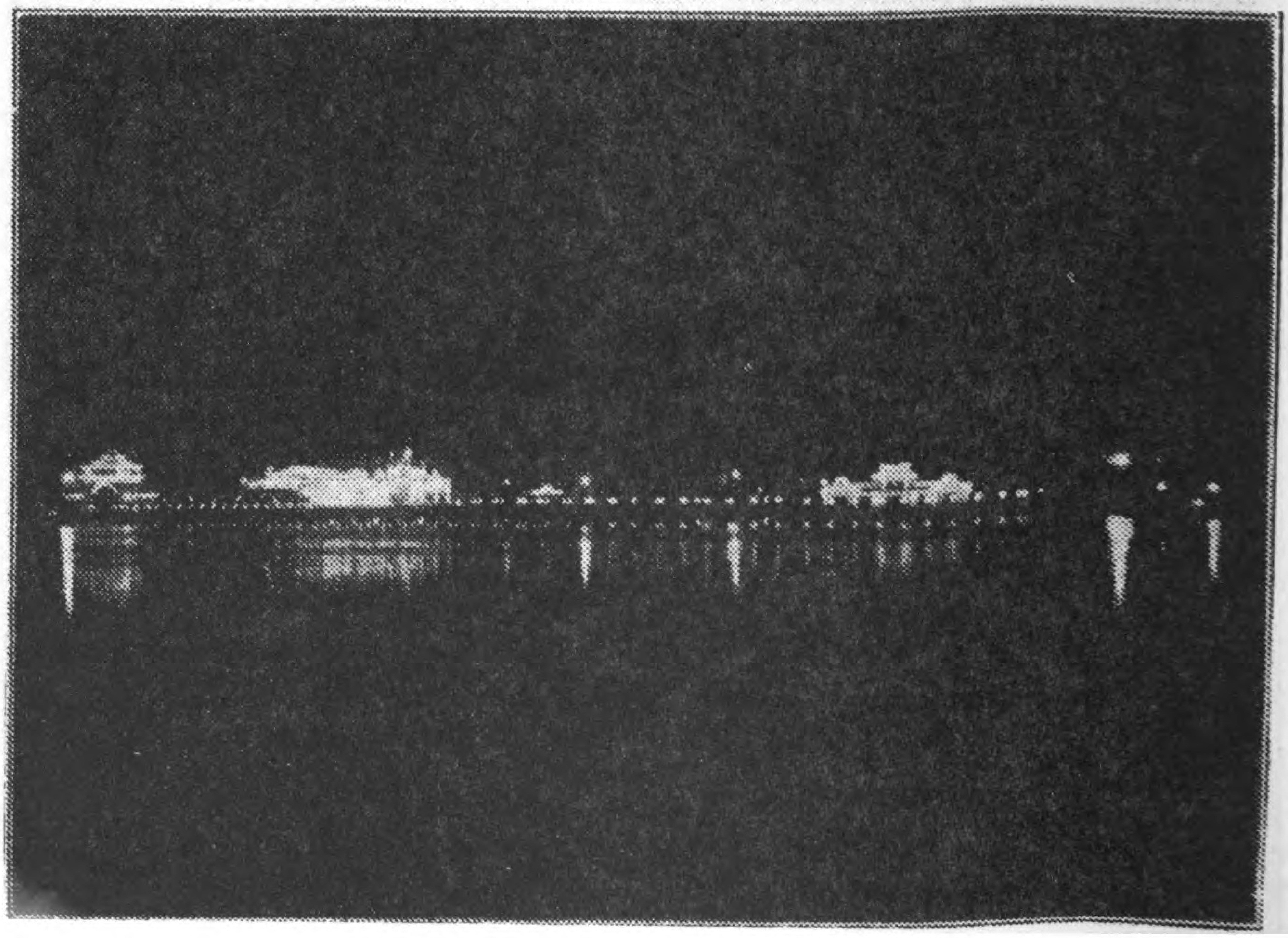
南部伯と令夫人



夜の博覧會

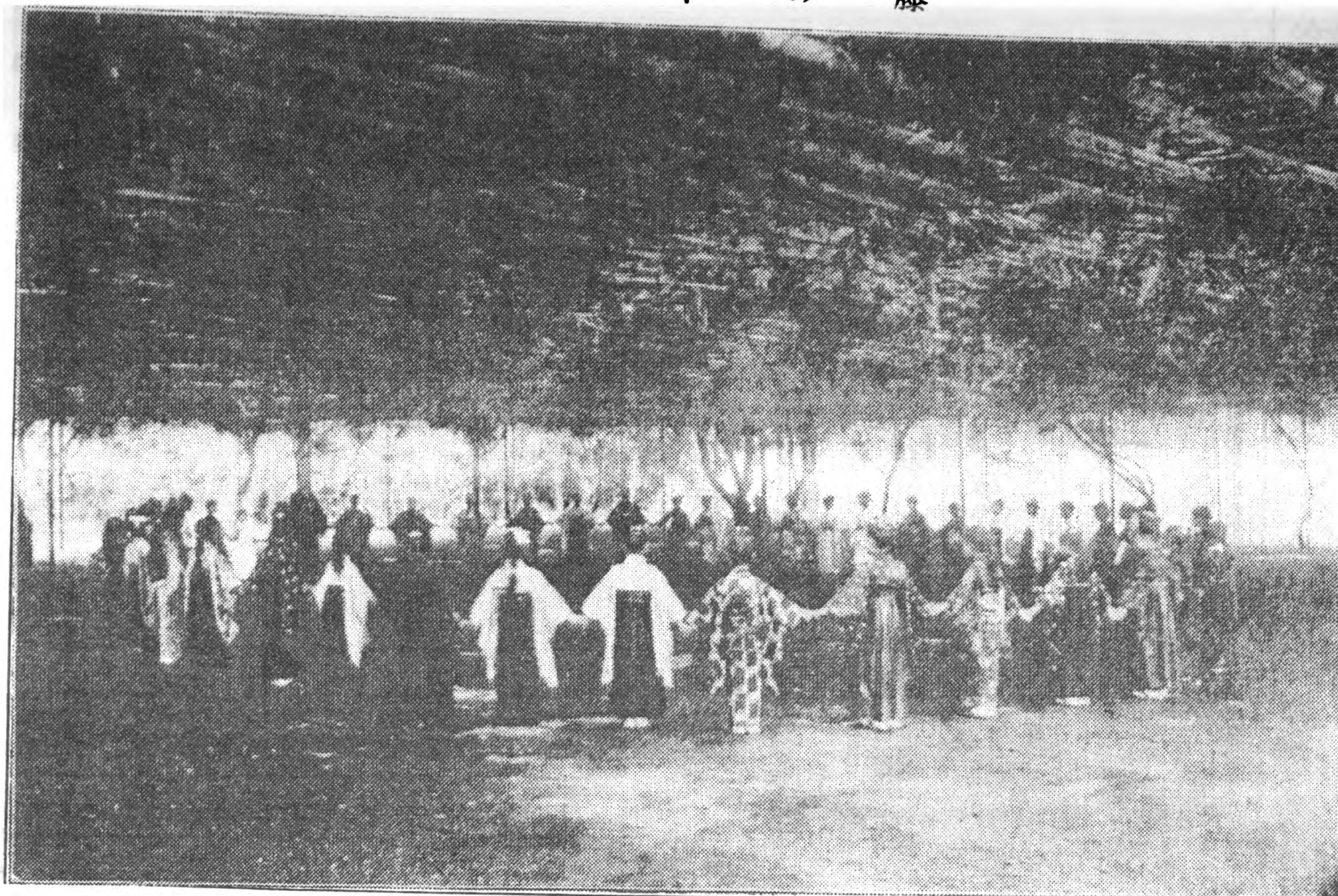


外國館



觀月橋

藤の下かげ



お茶の水高等女學校生徒の遊戲



女鑑

第十七年第五號

藤の花

すがた優しく蔓垂れて　さけるを庭のなしへ草
かゝれと人に仰がれて　めではやさるゝ藤の花
たのめるかげも大松の　ひだりの枝に春を送り
みぎりの枝に夏を迎へ　やがて褪なん色もなし
其むらさきの由縁さへ　いと懐かしき往し世の
文に名を得しその人の　操のほどもしのばれて
池の底にも咲きかゝる　花を嬉しみこゝろなき
魚さへ影にあつまりて　愛づる態にも見ゆるかな

((中川愛氷作))



家政上の注意

文學博士　男爵　細川潤次郎

家政と曰ふことは、一家の政であつて、國の政事と相並びたる語である、固より漢語で、六朝の痩信と曰へる人の文章にこの熟字がある、我國では近來用ゐなれて、家政と曰うて誰にも能く分る語となつた、一體家を治むとか、家を齊ふとか曰へば、誰も男子の職分と解すべきを、家政と曰へば、女子の職分と解しない者はあるまい、一家の雜事を家政と稱すること、家政を女子の職分とする事は當然である、國政の國に取つて大切なることは明白であつて、國政の當不當に山つて、其國の治亂興廢、貧富強弱の分かる丶如く、家政の當不當に由つて、其家を盛衰貧富幸不幸の分る丶ことであるから、一家に取つては頗る大切の事である、余は嘗て家政の栞と曰へる書の序文に、一家の主婦は一國の大藏大臣なり、更に之を總理大臣に比擬するも不當に非ずと論じた、此の如く重大の責任を有する者であるから、其責任を全くするには緻密なる注意と、精細なる研究を要する者である、古の婦人は父母舅姑に事へ、良人に事へ、子女を有する外は、女工を事とし、飲食を辨ずる位にて事が足つたが近來に至つては、男子の事務頻繁になつたと同時に、女子の事務も之に伴うて、益々複雜となり、家政の範圍展開して、男子のすべき事迄立入るべき樣になつたので從前の婦人と違ひ、その執務が簡單でない、大に家政に緻密なる注意と、精細なる研究を要

するやうになつて來た、

由來家政には大低瑣末の事が多く、金錢出納の事にても、大凡定まつた者で、若し建築をなすとか、大勢の客をするとか曰ふが如きことは、一家の人々で相談して、後施行する者で、定まつた金額の支拂は、矢張瑣末の事の如く思はれる、併し瑣末の事とは云へ、日々の事であるから塵積りて山を成す譬の如く、決して瑣末の事ではない、且又日常の事は、誰にでも習慣となつて、不都合な事があつても餘り怪む者もない、此れ所謂習うて察せずと云へる者であらう、此等の事情に由つて、家政に輕々看過するの虞なきにあらずである、

家政の事は躬行實踐すべき者で、智識にのみ關することもあれど、其の多分は躬行實踐すべき者である且又衣服の裁縫、飲食の調理などを始として、一二度之を試みて足れる者でない、幾回となく反複して、後始めて熟達する者である、

身分のある人は、其體面を損せざる爲には、相當の家屋に任し、相當の衣服を著し、相當の贈答をなさゝるを得ない、得る所の者には制限があつて、支出すべき者は甚だ多い、平生戒愼して、節儉の慣習を養成し、常に餘裕を存しないときは、不時の支出ある毎に、必負債を生じ、家政の紊亂を來すことになる、官吏などになると、一時の僥倖の爲に、意外の利を得る者ではない、又貸借自由なる融通の路ある者でもない、是故に財産の少額なる家に在つては、尤も注意することを怠らないやうにするのみならず、多額の財産を有する家に在つても亦出入の權衡宜きを得るやう、平生の注意が肝要である、此等の注意をなすは一家の主人たる者の責任なることは勿論であるが、一家の主婦たる者、已に家政を執る以上は、其責任の大部分を擔當せねばならぬ、而して主婦の家政を執るは、何事も節儉にして經濟的でなければならぬ、

一體男女に拘らず、學問を爲す者は、其思想の高尙になるは當然の事で、嘉すべきことではあるが、徒に高尙に傚せて、日常の事務に迂濶なることは、此亦利に伴へる害であつて、戒めねばならぬ、いかに高尙なる學問をしても、日常の事務に迂濶なるが如きは取らぬところである、家政は即ち日常の事務で、其取扱方の善惡は、家の貧富幸不幸の由つて分かるゝ所であるから、尤迂濶なるべからざる者である

余は家政の女子に必要なることを感じたること、前述の如くである、外國家政學校の狀態を聞いて、一層此感を深うした譯である、蓋外國にても、略同一なる事情に由るや否やは知らないが、兎も角も、普通教育の設備の外に於て、家政に關する一種特別の學校の設立の必要を認めたるには相違ない、其一は普國『サクセン』の『ネプラ』と曰へる處に在る者で、農業團體の創設せる者である、此外に二個の同種の學校があり、此外南獨逸『バーデン』侯國にも、同種の學校があり、而して『チプラ』の學校は、好模範なるを以て之に傚ふて設立せる學校『サクサン』州のみにて、已に三個あるに至つた、又此『チプラ』の學校は千八百九十一年の創設に係り、最初は生徒の定員二十名に過ぎざつた、十周年間に、卒業生五百十名を出したと云ふ、家政を重ずる一方より觀察するときは、此の如き學校は極めて必要である、普通教育を主とする所の學校に在つては、如何に其設備をして完全ならしめんことを欲すとも、必修科目に要する時間さへ、不足を感ずる上に、家政にのみ更に時間を增して、各般の實修等に至る迄、悉く遺漏なからしむことは出來ない、譬へば裁縫は十分に教授すれども、洗張洗濯を教授することは出來ぬ、割烹をも教授すれど、漬物罐詰の如き食料の貯藏法を教授するに遑なしといふ有樣である、家庭に於ては、その洗張洗濯、又食料貯藏法の如きが、最も必要な事である、

それから家事を處理すること、即ち散亂したる物を取集めて、之を各其貯藏すべき所に置き、其ゝ用

に立たざる者は之を棄てるといふことである、これ等のことは尋常普通の事で、簡易明白なるが如くなれど、實際は重要且複雜なる事柄で、研究を要する尤緊要の事である、これを粗漏にすると、萬事不都合を來し事務澁滯し、一家の人常に不愉快を感ずる、假令へば米穀には米穀を置く所あり、薪炭には薪炭を置く所あり、衣服には衣服を置く所あり、金錢には金錢を置く所あり、米穀を米穀を置くべき所に置かざれば、雨露に濡ほされ、雀鼠に食はるべく、薪炭を薪炭を置くべき所に置かざれは、或は厨房に遠くして不便なるべく、或は厨房に接近して發火の虞あるべく、衣服を衣服を置くべき所に置かざれば塵埃に埋沒せらるゝことあり、金錢を金錢を置くべき所に置かざれば、竊盜に奪はるゝことあり、此等は必しも說明を要せずして明白なることである、室內の裝飾に至つては、全く物を置くことにして、其の宜きを得しむることに外ならぬので、掛物は掛物、香爐は香爐、生花は生花、各其の所に在るべく、料紙硯箱卷物其他の玩具も、又.各其の所に在るべくして、書院居間茶席等の別あるに從ひ各、其の宜き所がある、然れども此等は猶未だ複雜なる者ではない、一家の家具若くは書籍の如きに至つては、其數夥多にして、位置複雜であつて、之を各其所を得しむること尤困難である、此等の物品は時々有用の際取出だすべき者であるから、米俵を積むが如く、刺身を並べたるが如くしてはよくない、一見して其物の何物たるを辯識し、直に取出だすべき樣、兼て其便利を計り、夫々適當に之を置かねばならぬ、然らずして亂雜に之を置くときは、入用の時間に合はずして、其物を所有する甲斐なく、有れども無きが如くである、今一層適切に其例を云へば、何れの家にも婦人ある家には、絹布木綿類の切々があつて、多くは之を一つの箱に納め或は一つの風呂敷に包み置く者である、扨入用の時には、一つの切を求むる爲に、一箱一風呂敷に在る、あらゆる切々を點檢せねばならぬ、百枚あれば百枚、二百枚あれば二百枚を、一々點檢しない時は、入用なる一つ

の切を尋出すことがむつかしい、之を區別して大中小に分け、或は絹と木綿とを分け、或は其色を分ち、之を各種の紙袋に入れなどして、之を一つの器に納め置く時は、入用の時、入用の切を容易に尋出すことを得られる、何品に付ても豫め能く類を分ちて、之を適當の位置に置くときは、入用の時迅速に用立つ者である、

百般の事柄に付ても矢張右の道理で、苟も能く百事を適當の位置に在らしむること肝要である、古人事を處すと云ふ、此處と曰へる字は、置くと曰へる義で皆物を置くの義より出たる者である、蓋人の萬事を整理するは、猶人の萬物を整理するが如く、又人の萬事をして適當の度に中らしむること、猶人の萬物を適當の地に在らしむるが如く、萬事適當の度に中り、萬物適當の地位に在るときは、之を善く萬物を整理すと謂ふことを得べく、又善く萬事を整理すと謂ふことが得られる、原來人の萬物萬事を整理することは智力の働で、人生の最貴重すべき點である、此の智力の働の大部分は、萬事を整理して適當の度に中らしむるに在るので、萬事を整理して、適當の度に中らしむることは、人の萬物を適當の地位に置くに異ならぬのである、萬事を處置するの才ありと曰ひ、處理する力ありと曰ひ、處分若くは處辯する器量ありと曰はゞ、其人の智にして愚ならざること知られる、人の能く此の如くなるは、偏に人の善く考へて物を適當の地位に置くことである、但物を置く地位は、有形的で其の適當か適當ならざるかは見易きことであるが萬事を處する適當の地位は無形的で見易き者ではない、猶適例を擧ぐれば、碁將棊の如きは、其上手と稱する者は、全く碁石と將棊の駒とを適當の地位に置くことを習ひ得たる者である、書畫などの如きも、筆墨を適當の地位に置くことを習ひ得たる者である、家政に就ての注意も、要は此にあるのである

師弟の關係

文學士　小川銀次郎

みづから教員の位置にあつて、師弟の關係を說き種々注文ヶ間敷きことを云ふは、如何はしき樣に思ふが、近頃いさゝか感じたことがあるから、一言申述べやう、

父母に代りて子女教養の責任を負ひ、つとめて智德高き立派なる人物を養成することを以て目的とし、職務として居る、これを爲すには、まづ子女の性情智能を悉知し、家庭の模樣を熟知し、數多の子女に對して、適當なる訓誨授業を施して、苟も誤ることなきを期するものなれば、その苦心は實に至大にして、筆紙に盡すことは出來ない、さればこれについて教へを受くる子女は、又この心を以てよく勉强し、惡をすてゝ善にすゝみ、學を勵み業を習ひて、その勞に酬ひ、その心に副ふの覺悟なければならぬ、父母が子女を學校に托し、澤山の學費を支出し、家の不便を忍びて學校に通學せしめらるゝ何の爲か、必ずやその子女を立派なる人に成さんとするの希望を以てせらるゝは、今更云ふまでもないことで、師はこの心を察し父母に代りて善く導くものなれば、子女は、またこの心をおもひ、その教を守り、その命に從ひ、謹愼にして柔順でなければならぬ、また每に相當の敬禮をなして、苟も放漫に流るゝ樣のことなきやう注意したものである、予は屢々これの行はれざつた實例に接し、多年家に同居して學んだり、或は教授を受けた人が、道に相遇ふも知らざる風をして通り去つたり、或は年始にも年始狀一本も贈らないのがある、子弟たるの徳義としては、如何はしく思ふが、併しこれもおのれが不德の致す所と思へば、深く咎めないので唯自身に耻ぢて居るのである、

余が最も注意するのは、その行はれ過ぎる方の點である、道路說を爲すものを聞くに某校は贈遺物が盛

に行はれて、家庭に於てはこれにこまるといひ、某先生は贈物をもてくる樣にすゝめ、贈り物をせざるものを惡しく取扱ふといふ評判がある、かくの如き評判が、眞實の事柄なるか、然らざるかはもとより余の知らざる所で、またその事實を研究するの必要もないと信じて居る、子女が先生より訓育を受け日々世話に遇ふを喜び、その禮をいはんが爲に、時々贈物をする、又は贈物をせずとも、何か承りたきことあるときは家に行く、家に行くにはたゞで行くは都合あしとて、何か手みやげをもて行くなどは、隨分ありがちの樣に思はれる、併しこの贈物といふは如何なものであらうか、

いかなる學校でも服務規律と云ふがあつて、敎職員が濫りに贈物を取ることは出來ない樣になつて居る筈である、殊に何か請托依賴を目的とする賄賂的の贈物に至りては、もとより受取ることが出來ない筈であつて、贈物をもてくる樣にすゝめるなどに至つては、殆ど論外である樣に思ふ、嘗て學生の父母から、余の處へ何かもて來た人も若干あつたが、皆受取らずに返した、無理において歸つた人には、翌日早速使を以てかへさした、

おもふにかくの如き事は、事實とは思はれぬ、必ず何か間違であらうと思はれる、ことに余が最も有がちの事と思ふのは、子女はとかく嫉妬心と邪推とに犯されやすい、成績のよい人を見ては、彼人は贔負である、何か贈物を爲したに相違ないといひ己が戒められたことあらば、己が惡しき事は棚に上げ、先生は己をにくめり、贈物を爲さゞるによるといふ樣ないひ草である、もしかりにも斯くの如き念慮が起つたならば、深く戒めねばならぬとおもふ、

敎師は前述の如く、父母に代つて訓誨善道するのである、極めて淸淨無垢の考で子女に臨むのであつて多數の子女生徒に對して、公平無私なのである、場合によりて子女を叱ることもある、褒めることもある

悪しき事ありし時には、嚴粛に叱責訓誨して憚る所なく、怠慢業を忽にする時には、大聲怒號して將來を戒むることもある、善き事を爲したる時は、これを褒めて同情を寄することもある、かくの如きは何の爲か、叱責するも警戒するも、皆その女子を疾みて爲すにあらずして、希くばこれによりて將來をよくせんことを祈るのである、これを褒むるはこれによつて益〻奮發して善に進まんことを欲するのでありまして教師たるものゝ心中には、何人に對しても一視平等の心、無限の愛を以てこれに臨むこと、父母が子女に對せらるゝと毫も異ならないのである、教育の大任を双肩に荷ふ所の責任あるものは、些少の贈物などに左右せらるゝものでないといふことは明言して憚らぬ、

子女が教師に恩義を受くるとの理由を以て贈物を爲すと云ふは、一應尤の樣であるが、此贈物が果してその恩義に酬ゆるものであらうか、人或は授業料を以て恩義に對する報酬なりとし、金錢の支拂を以て已に恩義を差引せりといふものがある、これは余の見を以てすれば大なる誤なりと信ずる、授業料の納付は教育を受くるに必要なる時間の報酬で、その受けたる恩義に對する報酬と考へられぬ、勸工場で金一圓の品を一圓出して買ふてくると譯が違はねばならぬ、さすれば教師のむしろ迷惑におもひ、また心配する贈物をなしたとて、これによつて恩義に報じ了りたりと信ずることが出來ぬ、またこれによりて特別の恩誼を促すものとも考へられぬのである、若しも世間の一隅にだにかくの如きものがあつたとすれば、余は物價騰貴の結果、學費漸次增加する今日、むしろこれを廢せんことを主張するものである、

然らば子女が師に對する恩義に對して、如何にしてこれを報いんとするか、時勢場合によりて、或は特殊の場合はある、されど余の見る所によれば、師長より受けたる恩義は、直接これに酬ゆること能はざるものと信ずる、何となれば師長はわが先輩にして、學識に富み、經驗を重ねらるれば、己がいくらこれに

酬いんとしても、能はざる所である、師長に對する恩義を酬ゆる唯一の道は、よく師長の訓誨を奉じ、その心を體して、師長をして安心滿足せしむるにあるので、師長は子女の立派なる人物にならんことを望む外、他に顧みる所なきものなれば、よくその敎を服膺し、學を修め、業を習ひ、德を磨き、その望に副ふこそ、實に師長をして最大滿足を與ふるものなれ、と考へらるゝのである、余は幾多の師長の高誼により、限りなき恩惠に浴し、僅に今日の五體を有するに止まり、物質上又は形式上に於て、何等報恩を期すること能はず唯深く心に期する所は、つとめて自己の爲すべき義務天職をつくして、以てこれに報ぜんとするにあつて日夜孜々つとめて止まぬ覺悟である、

婦人の操行

法學士　坂田樂石

婦人の道德、即女として守るべき道に於て、日本の婦人は極高い貞操と云ふ點に於て、勝れて居ることは明で、貞女兩夫に見えずと云ふ美德もある、而してかゝる艱難辛苦に堪へて、貞操を磨く性は充分備はつて居る樣である、それは場合に當つて孰れもしかあるべき道理である、然るに之を一方より考へたならば烈婦とか貞女とか云はるゝ場合に當つたのは、實に不幸なるので、是等の人が世の中に現はれるのは或は亂世であるとか、或は貧困であるとか、或は良人の父母、即舅姑が非道な人であるとか云ふ樣な場合であつて、貞女と云はるゝ其人に取つては、此上もなき不幸な事であるから、私は烈婦や貞女は跡を收め、其代りに良妻や賢母の輩出せんことを望むのである、

日本の婦人は前述の如く高い道德は備はつて居るが、平常の心得に於て、或は缺げた所がありは仕まい

かと思ふ、

扨日本の舊い敎では、男女七歳にして席を同うせずと云ふことがあつて、子供が少しく大きくなると、判然男女の區別を立てゝ居るのである、所が新奇の敎にすると、男女は幼少の時から一緒に育てゝ行くので、是は西洋から來た敎で、即ち男女手を携へて樂しむ如き主義を執る人も、何事もゴチヤ〳〵になつて仕舞つたのである、若し貴婦人方でも、田舍から出て來た叔母さん抔に遇つて、學校に往つて男女一緒になつて交際するなどゝいふ話をすれば、必ず驚いて、小言を云ふに相違ない、其れから又西洋から歸りたての兄さんとか、或は從兄とかに遇へば、男女が交際せぬ抔と云ふ樣なぐづ〳〵した事では仕方がない女と云ふ者は飛んで跳ねて、角力位取つても宜しいと云ふに違ひない、所が此の兩方の者は反對だから其間に居る人にはドウして宜しいか解らない、そこで婦人社會の禮儀作法は崩れて、今日の樣になつたので、即ち兩主義が衝突して居るから、其間に居る婦人はどちらに從つて宜しいか解らないのみならず、社會の人にも解らないかもしれないと云ふ樣な有樣になつて居る、私共の友達の中にも非常に舊主義を守る人もあり、又新主義を好む人もあり、亦新舊の間を執つて居る人もあり、時には其奥樣達に賤業婦女子の風をさせて喜ぶ人もあつて、どれが正當に日本の奥さんの風であるか、殆んど解らない、斯の如く今日の婦人の風習作法が紊れて來たのは國の變革に伴ふて居る事で、亦已むを得ざる譯である、

今日の婦人は斯る風習の混雜せる社會に居るから、餘程自分を顧る所がなければならぬ、即ち新奇を好む人にも、舊を守る人にも、氣に入る樣に中間を取つて行き、世の中に良妻賢母と謂はるゝ樣にしなければならぬ、即ち只一筋の道を踏んで行かずして、二筋の道を歩んで行くのだから、實に六つケ敷のである、然らば詰りどうして行つたならば宜しいかと云ふに、中々是は一朝一夕に決せらるゝ事ではないが新舊何

れの主義にもせよ、是丈のことは守らねばならぬと考へて遣つたら宜しからうと思ふ、それは別でもない正しき事をやつて行くので、大學の敎にも、國家を治め、家を齊ふるは誠意より始まるとあるが、さて婦人の行には第一に言語を愼むのが肝要である、之に就いては、從來種々の敎があるから、今更事新しく云ふまでもないが述べたいと考へて居る所と、從來の敎に云ふ所とは少し違つて居るのである、素より私も從來の敎に在ることも贊成であるが、其外に此頃婦人が用ゐる言葉の中には賤しい詞があると思ふ、自分は左程賤しい言だと思はないでも、私共が聞くと大變に聞苦しい事がある、併しずつと高貴の人になると幼少から言語を愼ましてあるから宜しいが、中等以下の處へ行くと之を愼まぬ樣である、例へば物を食べたから腹が痛むとか、足だとか、尻だとか、甚敷に至つては、私は子宮病で困ります、抔と立派な婦人が平氣で謂はれるが、それを聞く男の方が却て赤面する樣な事がある、行が惡いとは云はぬけれども、斯る言葉を使ふと、私共がベランメー抔と云へば、人が笑ふ如く、子宮とか、腹とか、股とか、足とか云ふ樣な詞は、人の前で婦人の用ゐるべき詞でない、のみならず人の笑ひを招く、然るに現時の婦人は之を怪まない樣であるが、是等は主として注意仕なければならぬ、若し已むを得ぬ塲合は即ち醫者抔に向ふて云ふ樣な事があれば、至極低聲で云ふ考を持たなければならぬ、是則君子は微を愼むと云ふ所以であつて、幼少の時からよく愼むべきである、此他是に類する詞は、自分で考へたら解ることであると思ふ、

次に賤しき新聞とか、小說とか落語とかは聞いたり見たりせぬ樣に愼まねばならぬ、此種のことは兎角婦人が好んで讀む樣であるが、從來の小說には、彼の有名なる馬琴の作の如きすら、往々高い聲では讀ぬ樣な事が書いてある、是等の事は必ず避けて讀まぬ樣にせねばならぬ、若し之を讀み、亦平氣で人の語る

を聞くならば、自分が猥褻を喜ぶ事になる、其他浄瑠璃抔の中には、聴くに堪へぬ言葉がある、併し祝宴抔に招かれた時、其家から餘興として落語や義太夫抔出す中に、不都合な話があるなどと怒る様なことがあれば座興が醒めるから、どうしても先方の主人に對し、我慢して聞かなければならぬ事があるが、殊更悦ばしさうにして聞くには及ばぬ、落語家杯は笑はせやうと思つて、賤しい事を話すのであるが、それはよくない事であるから、務めて之を避け、つまりあの人に對しては不敬であつたと云ふ事を感せしめる様にするが宜しい、又劇場に往つても、閨房の有様抔を演ずる時は、之を見ぬ様に仕ないと、非常に婦人の價値を落すやうになる、前述の如きことは、成るべく社會から遠ざけねばならぬ、若し此の婦人方が之を嫌ふやうになり貴婦人方が不敬だと感じる様になると、自づから斯る風は止む様になる、即ち婦人方が高尚な氣になれば、世の中の樂は自然に高尚になつて來るが、さうでないと社會の風儀は改らない、演劇や小説は人を樂ませる物であるから、其を讀む人見る人が、高尚になれば悪い事が止んで仕舞ふ、是則彼を咎めずして、自から止ましむる方である、斯る事が此の都會に存在して居る中は、婦人社會の道徳が高くないと謂はなければならぬ、故に貴婦人方が務めて之を斥くるのは、其の義務である、次に婦人たる者が夜遅く獨で出るとか、若しくば若い婦人が若い男と差向つて、一室で戸障子を閉して對話する如きは避けなければならぬ、即ち園遊會とか舞踏會とかに行くと、男と獨向ひになる事があるかもしれない、そんな時は必ず二人以上の人が居合さぬならば、避ける様に心掛けねばならぬ、又夜行く時は、必老年者を伴ふ様に心掛けねばならぬ、然るに此頃の婦人は、獨立獨行抔と云ふ考から、斯かる事に氣を附けず、人の嫌疑を構はない人が澤山ある様である、是は新主義の人は心に掛けぬが、舊主義の人は非常に悪しく感ずる、是は西洋の主義より云ふも、婦人が獨りで夜行したり、若い男と一室で對話する如きは、賤むべき行

の中に入れてある、
次に婦人の位置を高め、其考へを高尚にせんには、操を破つた婦人を賤まなければならぬ事である、是は言はずとも操を破つた者は、人の中に出られぬのは當然であるが、併しまだ日本人は此制裁が充分發達して居らない、所が高貴の仙臺公が高尾を愛したのを、是迄の人は少しも賤まぬ樣である、從つた今日になつても隨分高貴の人が賤業婦女子を近づけ、時には、貴婦人も之と席を同うして、少しも愧ぢる樣子がない、併し他家の宴會に呼ばれた時、賤業婦女子が酌を取つたからとて、腹を立てゝ歸る譯にも行くまいが、其者に向つてなれ〳〵しく談話をするのは、彼を自分と同等の位置として見る者である、甚敷に至つては、賤業婦女子から轉して立派な細君になつて居る人もあるが、是等も賤まねばならぬ、假令當時は如何程立派であつても、一度汚れに沈んだ者は、淸潔なる人とは謂はれない、一度節操を破つた者は其汚點が、再び淸くなる筈はない、然るに之と席を同うして、交際するとは何事である、必ず是等の人をば排斥仕なければならぬ、今日は現に賤業婦女子から出世した細君が澤山あると申すことで、是は從來吾邦の習慣上許したもの故に、實際俄に之を斥けることは出來まいが、後來左樣な人があつたならば、斷然斥けねばならぬ、又男子にても賤業婦女子と親しむ如き者とは、交際せぬ樣にするが宜しい、歐羅巴などでは、婦人の行は嚴重な習慣があつて、賤業者及び敗德者を斥くることは、社交上強き制裁となつて居る我が日本の婦人は、烈婦貞女と云ふ樣な高い道德は充分であるが、手近な行に於て缺げたる所があると云ふのは、右の次第で、是等の事は敎育の任にあるもの、若くは上流の人は之を直して行く樣にならねばならぬ、若しも私のかく云ふ事が間違うて居るとなれば、敎育などは廢めにした方が宜しからうと思ふ、私の言は、ドンナ新主義の人でも、舊主義の人でも、之に向つて異存はあるまいと思ふ、ソコデ上流婦人は

殊に私の説を賛成せられ、野鄙の風習を排斥して、高尚な風習となし、日本婦人の操行を世界に對して誇ることの出來るやうにしたいものである、

それから人間の生活上、家庭程樂しき處はない、然るに日本の家庭は、不愉快にして、極樂と云はれないから、これを改良して實際の成績を擧げたいと思ふ、それには第一に婦人の操行が高尚になり、清淨になつて、家庭に立てば、ドウしても一家が之に靡かぬ譯はない、今日の家庭は男子が我儘をして、それが爲紊亂して居るものも少くないが、其中心に立つ主婦が高尚なる道徳と品行とを備へて居つて、内助に力めたならば、自然と此の社會の空氣一洗し、從つて家庭が清淨になつて行く、凡そ家庭の治まるか治まらぬかは、何を以て見るかと云ふに、家内に囁く聲の起る如きは、治まらぬ家庭である、即ち大きな聲で言はれぬ事であるから、さゝやくのである、又非難がなければさゝやき聲の起る譯はない、ソコデ良き家庭を造るには、第一に婦人が主として行を愼み、身を以て家庭を率ゐて行くと云ふ考へを持たなければならぬ、私の述ぶることは、たゞこれ丈で、是等は當然斯くあるべきことで、不思議なことも珍らしいこともないが、併し之をよく守るのは六かしい、人間はあたりまへのことが容易でないので、それを守り得る人は、實にエライのである、ソコデ今日は、誰も知るほどの事を繰返す次第である、而して日本の婦人社會の品位を高め、名譽を世界萬國に輝かすやうに希望するのである、

處女教育の缺點

女子教育の益々盛ならんとするに、若し其方針だに誤らず又その方法にして宜きを得ば、遂に文運のために慶とすべきを疑がはず。されど方今の女子教育は、果して處女天眞の美德を育成せしむるに遺憾なしとすべきか。然り敎育の効果著しくして所謂賢母良婦たるの品格知識を兼ね得たりしも多からん。されど日本の女子はさなきだに早熟の傾きありとせらるゝに、近來學校に通學するの女子を見るときは、幼きながらに、早くも大人らしき推理を倚び、無邪氣にして愛すべきの點を認めざるが多し。舊時代にはもと家訓を尊びて父母の膝下にありて慈愛の薫化を受けぬ。隨ひて處女は何れも長く稚心を離れざるの弊もありしかど、その無邪氣にして愛らしかりし所は、確かに我邦處女の美點なりしなり。今之を寄宿の女生に徵するに概ね生理上の成熟を早からしめ、十四五歳にして既に大人とならざるなし。妙齡の處女をして家庭の訓育より分離せしむるの利害得失、隨ひて必ずしも多言を要せざるべし。

女子教育は益々盛んなり。諸種の學校多きに伴ひて女塾生寄宿生の類も今は頗ぶる多し。彼等は何れも家庭を離れて、規律ありとはいへ、父母ほどの目の屆かざる多少散漫なるべき監督の下に立つ。婦女に必要なる家庭の實際に遠かりて學藝の末枝にのみ馳るゝはいふまでもなく、さては空理空想に耽りて虛榮心に增長し、自負自尊徒らに高くして煩悶隨ひて多く生理上の早熟もまた其意馬心猿を狂はしめて、放縱安逸を好み、甚しきは其貞操を自棄するに至る。

方今の弊は家庭の諸人が甚しく學校女塾を重視するにあり。女學生益々多くして取締自から周到なるを得ざるべきに、家庭にありては全く之に依賴して多く一家の訓化を尊重せず。處女の美風漸次に衰へんとするは之がためなり。昔は女言女容女德女工を以て婦女の四德となせり。言語を優美にし容儀を修整ならしめて女德乃ち成り、然る後技藝を習ふ。前三者は殊に家訓家風の養ふ所なりき。今の家庭は之を無視して學校女塾亦之を敎へず。醇美なる處女の感情を薫化するの機會に乏し。女學生が毫も嫻靜の態溫雅の容なくして徒らに輕浮躁卒の風を成し、唱歌を歌ひて喧しく、小說に耽りて其心を耗し、雜誌を信條として不精熟の文字に動かされ、往々その學業を度外にして着實敦厚の素養を積むことなく、あたら天眞の美質を傷ふは固より其所なり。

斯て昔し家庭に四德を敎へしものも今は學校女塾につきて其一德たる女工を學ぶに止まり、家庭また他の三德を無視す。如何なる道德を敎ゆるも事柄と道理とを敎ゆるのみならば、そは空理にして學說の末たるに過ぎず。その他各種の學術技藝みな女工を習はしむるの不完全なるかな今の女子教育や。家庭の父母それ此に見る所あり、務めて處女をして家庭より分離せしめず家訓家風を和樂淸淑ならしめて四周に醇美の空氣を作り其の間に婦女の美德を薫化せしめんことを要す(每日電報子)

家事

衣食に就て（承前）

醫學博士男爵　高木兼寛

今日婦人が袖を小さくするのは、チョット見惡くいやうであるけれども、二十年前には束髪の事もいろ／＼形容して惡口を言ふた、それが今日では束髪でなければならぬやうになつたと同じことに、袖が小さくなつて見惡くいと云ふのは一時のことである袖を今のやうに吹拔にして置くと、寒い時は蒼い顔をして鼻液を垂して、歩かなければならぬ、袖を小さくすれば、暖かいから顔を眞赤にして歩るくとが出來る、それは着物の仕立方一つにある、袖が大きいと莫大小の襯衣を餘計に着なければならぬ、袖を小さくして腋の下の開かないやうに拵へれば、綿入一枚違ふ、果して日本の四千五百萬の人で、着物が一枚づゝ違へば、一枚一圓にして四千五百萬圓、綿入一枚一圓で出來る氣遣ひはない、綿入一枚に十圓宛掛けたら四億五千萬圓と云ふ非常な金になる、それを省くには袖を小さくして、風の容易く這入らぬやうにすれば宜いのである、着物の裁縫は一家の事ではない、國家全躰の上に非常な關係を持つことである、

近頃は改良服と云ふものが出來て居るが、是は洵に結構である、如何なる衣服でも、身躰の爲にならないやうなものは仕方が無い、角袖と云ふものは手を思ふやうに使ふことが出來ない、それであるから海軍にあれ陸軍にあれ、或は自分獨りでさつさと働

いて、腕の働きに依て飯を食ふやうな人で、角袖の着物を着て居る者があるか、決してない、それであるから、袖を小さくして經濟になるやうにしたい、其次に至つては足である、段々足元が暗くなる、人間の形と云ふものはどう云ふ形か、どうしても頭一つで腕が二本、それから足が二本である、併し日本の着物を着せて立たせて見た時には、其形から云ふと、どうしても足が二本あるやうには見えない、足の出て居る所を見れば二本ある樣な心持がするけれども、唯だ形から見た時には、どうしても一本しか無いやうである、腕の方も形から云ふと、腕の形に似て居らぬ、どうしても腕の形のやうに袖を筒にしなければ運動の邪魔になる、足の方も足の形に相應した形にして置けば、運動は充分であるけれども、一包に着るものであるから、それが爲に運動を妨げる

婦人が衣服を着る時は、前を合せて股の上の方に下締を締めて、それから帶を締める、是で足を踏み出さうとすると、うまく踏出せぬ、サア歩かなければならぬと云ふ時には、どう云ふ趣向をするかと云うと、先づ足を踏張りて、手で褄を取つて歩かねばならぬ、それから公園にでも出かける、どうも空模様が惡かつた、人力車は其邊に居らない、男は先づ用意と云ふので、裾の眞中を揚て、兵兒帶に挾む、之が餘計な手數である、婦人はどうであるかと云ふと裾全躰を褰げる、サア用意が出來たと云ふので歩くさうすると腰卷が出て了ふ、之が出ないやうにしやうと云ふ考の時には、内股小股に歩くと云ふことが起つてくる、それで日本の女の歩き方が變挺であるから、骨の形が數でも違ふのではないかと云ふ話もあるけれども、決してさうではない、着物の着方の爲である、先づ裁縫方を改めて、下の方は足と足とを別々に入れて置くといふ、大躰の仕組で無ければ第一に暑さは兎も角も、寒さ防ぎにはならぬ、今迄のやうな裁縫の仕方であると、上の方を暖かくして見た所が、足の先から股の所迄は、始終外來の風の

見舞を受けて居る、それでどうしても坐らなければならぬ、坐つた時には、自分のお臀のストーブで足が温まる、さうして外の風の當らぬやうに防ぎをする、それかち日本人は足は痛いけれど、坐ることが好きなのであるからして下の方をどうぞ改めて貰いたい、先づ帶を廢すれば、帶上や帶止は無くて濟むから、經濟になる、下の方は二本の足が別々に這入るやうにする、第一に寒さを防ぐ爲の着物であるから女も下穿きを穿くやうにしたいと思ふ、下穿を穿いて何の耻かしいことがある、寒さを防ぐ爲の衣服である、下穿を穿けば、裾を端折になつても見憎いこ



とも無い、殊に寒さを防ぐと云ふ非常な利益がある

それから食物に就いて一言したい、それは着物の裁縫をしても、羅紗と絹布と、また木綿の裁縫とは皆違ふ、同じ裁縫でも、絹は縫易いとか、木綿は縫悪いとか云ふことがある、食物も矢張其通りで、米の飯は色が白くてうまいやうであるが、身體には麥飯には及ばない、之が即ち絹が木綿より優つて居ると同じである、けれども場合によりて大變違ふ、絹は柔らかで宜いやうであるが、手荒い仕事をするには、木綿の方がまだよいやうなことがあらう、さう云ふ道理で、場合と時とによりて、

違ふのである、兎に角食物が良ければ、身體が丈夫であるといふのは慥である、惡ければ病人になる、即ち惡い水を飲めば腹が下る、或は吐く、食物も其通りで良い物を食へば腹の工合が好くて、氣分も宜い、惡い物を食へば氣分が惡くて吐く、又下痢をする、何とも言はれぬ厭な心地になつて了ふ、終には死んで了ふ故に良い物を食はなければならぬ、良い物はどう云ふのか、金の高いものは必ず良い物かと云ふと、決してさうでない、金の高い物で良い物もあり、安い物で良い物もある、例へば白い米の飯と黒い半麥の飯とどちらが宜いか、白い飯が善いやうであるが、半麥の飯の方が身體の爲には宜いと云ふやうなものである、金はどちらがかゝるかと云ふと、白い飯の方がかゝる、麥飯の方が金がかゝらぬ、斯う云ふやうに金がかゝらずに、身體の爲になるものがあるけれども、世間の人には能く分らない、色が白ければ身體の爲に宜からうと云ふけれど、嫁を貰ひたいと云ふ人があつて、多勢の中からどの人が宜しいかと言つて選び出す、色の白いのが宜からうと思つて、色の白いのを選ぶと、動もすると、大學病院なり、北里病院なりに入院する騷ぎが起る、又他の人は色が黒くても、何んでも丈夫な人が宜い、斯う云ふ考へで色の黒い、身體の逞ましい、誰も貰ひ人の無ささうな人を選ぶ、さう云ふ人が選ばれて嫁に行つたそれは選ぶ人がえらい、妻を持つても家が睦じくなければ可けない、食事をしても胃の治まりが善くなければ可けない、尙其上に身體の爲になる物を用ひなければならぬ、成程金が高くて良い物は牛肉、玉子である、魚も宜しい、それから割合に金が安い食物で、良い物は豆の類である、近頃諸新聞を見ると豆腐の類を用ゐることが書いてあるが、日本で一番良いのは麥飯に味噌汁、豆腐は實に良い食物である牛肉を食ふのと同じ事であるから、豆腐を食つて居れば牛肉を食つたと言つて一向差閊ない、鯛の刺身の代りに豆腐を食つて、矢張り鯛の刺身を食つたと思つて居ればそれで宜い、効力は同じことである、

それから豆腐の滓、豆腐の殻と云ふものは、人が輕蔑するけれども、あの位滋養の多いものはない、何故に世間の人は豆腐の殻を買ふて食はないか、牛肉と同じことである、唯違ふ所が、前 私が色の白い美人を貰ふと、病院騒ぎ、醫者騒ぎをするが、色の黒い逞しい人を貰ふと、何年經つても醫者は敵になるから、此方が宜いと言つたが、それと同じ様に豆腐の殻や麥飯の方は、見掛は惡いけれども、家内は安全で、子孫は繁昌する、色の白い米の飯の方は、見掛は宜いが、家内は不安で、子孫不繁昌と云ふ意味を持つて居る、又米の中でも玄米が一番良い、德川家康公三河在城の砌は、殊に玄米を用ゐられたと云ふ事は、記錄を見ると細かに分る、あの糠には滋養がなか〳〵澤山含んで居る、然るに多くの人は白い屑のみを食べて居る、外の良い所を棄てゝ、屑のみを食つて病氣になる、斯う云ふ談である、即ち今の世の中の人は、金を澤山掛けて身體の爲に惡いものを食つて好い心地だと、思つて居るが、其實は甚だ不愉快即ち病人、蒼い顔をして、前述の如き事柄を起すのである、それで麥にもいろ〳〵種類があるが、近頃出來たよまし麥と云ふのは、既に一遍蒸してあるから、米と一緒にして炊くのに簡便であるさう云ふ物を用ゐれば、手數は掛らず、金はかゝらず、さうして身體を丈夫にすることが出來るのであるから、どうぞ之を用ゐて貰らいたい、實を云ふと麥を用ゐると用ゐざるとは、日本國に大なる關係がある、海軍に於ては明治二十二年以來、十八年間麥飯を食はせた爲に、大變病氣と云ふものが減つた、元來強い兵であるから、二十七八年に支那と戰爭をして、日本が勝つた、其經驗があつたから、又露西亞と鬪つても勝つた、國が起るのも麥飯、味噌汁である、身體を丈夫にして思ふやうに樂まうと云ふ考であれば、麥飯に味噌汁を食ふが宜い、さうするには刺身や牛肉を食ふには及ばぬ、それは食べたいと思ふならばそれでよろしいが、併しそれを食べずに濟むならば、麥飯に味噌汁が宜い、それから小豆、

豌豆、總て豆の類は結構である、唯一時に之を澤山食ふと云ふことは出來ぬから、三度に分配して食するやうにするが宜い、朝は麥飯に味噌汁、晝は豆類を食べ、夕は何か外の物を食ふ、蕎麥抔は最も宜い温飩も宜しい、粟も稗も極結構、さう云ふ物と豆類を食へば、金も掛らねば牛肉、魚玉子を喰つて居ると同じやうに、身體を丈夫にして行くことが出來るさう云ふものがあるにも拘はらず、人が牛肉屋に行たり、西洋料理屋に行つたりすると、我もさうしなければと云ふやうに考へる人が多い、併し人間と云ふものは、自己の境遇、時と場合と地位を知ると云ふことが必要である、故に今日己は麥飯に味噌汁が適當すると云ふ地位なれば、宜しく麥飯に味噌汁を取つて、身體を丈夫にして働く、さうして稼ぎ溜めたならば、牛肉、玉子、西洋料理も食ふも宜からう住居も立派な西洋家屋にする、或は生活に餘裕があるならば、日本のみならず、亞米利加にも歐羅巴にも別莊を持つが宜しい、兎に角食物を注意して、年に十日も病氣をせぬと云ふことになつたならば、其利益たるや實に莫大なるものであらう

育兒に就て

醫學博士　加藤照麿

是は從來未だ餘り人の注意せざりし所なるが、嬰兒が始めて母體より出でたる時は、産湯に先ちて、其眼に消毒藥を點ずるを最も肝要とす、蓋し嬰兒が生れ出るには、産道より外部に通ずる腟内を通過しこの産道には種々の不潔物に併せて黴菌をも附着し居るを以て、右通過の際、其の黴菌が嬰兒の眼中に入り易きものなり、而して偶ま母體に痳病の黴菌等を有し、この黴菌が嬰兒の眼に入る時は、直に盲目となるなり、故にこの眼中に入りたる病毒を撲滅する爲に點眼するにて、獨逸のフレーデ博士が、始めて採用せし硝酸銀の點眼を行ふを最も良しとす、併し是は無論素人の漫りに行ふべきことにあらざれば

宜しく醫士に就て其の施術を受くべし、故に從來先天的の盲目と稱するもの丶內にて、この不注意に依りて、實は後天的に盲目となりたるものも少からざるなり、

嬰兒が未だ母體中に在るときは、羊水と稱する脂肪に富みたる液體中に浮み居るを以て、始めて母體より出でたる時は、殆んど右脂肪性の垢を以て覆はれ居るなり、故に之を清淨する爲、所謂産湯を使はせ、其湯は微温にて攝氏二十八度乃至三十八度を適當とし、純良なる石鹼にて十分に垢を洗ひ去るべし然れども此に最も注意すべきは、之に用ふる水にて是は極めて清淨にして、毫も黴菌等を含有するの虞なきものなるを要し、之が爲には一旦煮沸して殺菌したるものか、否らざれば水道の水を用ふべく、其故は人の知る如く、後産即ち胞を除く爲、臍帶を截るを以て、産湯中に黴菌等を含む時は、直ちにこの創面より病毒を吸收すること屢々なればなり、俗に酸漿虫（創面より泡を吹きて酸漿の狀をす）と稱するは、即ち此の創面より病氣を吸收したる結果にて一種の破傷風なり、

嬰兒が未だ母體內に在る時は、全く暗中に生棲するものなれば、母體を離るゝ際、直に強力なる日光に觸るゝは視神經を甚だしく刺戟し、隨つて腦を冒すものなれば、出生後二三日間は、成るべく室內を暗くして、漸次日光に慣れしむるを必要とす、隨つて直接に太陽の光線に曝すが如きは嚴禁なり、然れどもこゝに注意すべきは室內を暗くする爲、同時に空氣の流通を害することなき樣に心がくるの一事にて、殊に未だこの際には産婦の身體より、惡臭を發して、室內の空氣を汚濁し易きを以て、空氣の流通には最も意を用ひざるべからず、

嬰兒は往々にして外耳炎即ち外耳道（耳の孔の入口）に（熱をもつて腫れる）を起すことあり、是は全く養育者の不注意にて、浴湯の際耳に水が入るより起るものなれば、浴湯後は脱脂綿を以つて、能く耳の孔を拭ひて水分を去り、若し深く入りたりと思

ふ時は、醫師に就て治療を受くべし、又口と眼とは毎日清淨なる水にて拭ふことを怠るべからず、

嬰兒が出生の際『假死』と稱することあり、假死は其特徴として呼吸は絶え居るも、脈搏は之あるなり、是俗に難産と稱し、出生の際或る原因の爲、長時間産道に留まるが爲に起る現象にて、名の如く假に死亡の狀態に陷るなり、然れども脈搏あり、隨つて心臟の働きは繼續し居るものなれば、決して眞に死亡したるにあらず、この場合には、成るべく速かに醫師の治療を受くべし、又嬰兒には間々一晝夜位甚だしきは三十六時間以上も小便の出ぬことあり、

生後百日を經過したる時は、必ず種痘を行ふべし然れども此の日限は、小兒の體格が種痘に耐へ得る最小限を示したるものにて、種痘其のものは成るべく速かに行ふを良とするが故に、天然痘の甚だしく流行する等の場合には、出生の翌日直ちに種痘するを必要とすることあり、而して普通種痘を行ふに最も適當なる時期は、春秋二季にして、四月五月と十月十一月とを良とす、

種痘の種子即ち痘苗はいつかの女鑑に記せしが如く、傳染病研究所に於て製したるものを最上とし、兩腕に二三顆づゝ植うるを適度とす、是れより以上に植うるは、徒らに苦痛を與ふるに過ぎずして、其の効なきのみならず、顆數に比例して熱發甚だしき爲、反つて他の病氣を招き易きものなり、而して右の中一二顆だけ完全に感種ば、爾後二年間位は免疫と稱して、最早天然痘に罹る虞なきものなり、

世間には往々用心に過ぎて、種痘後は一切入湯せしめざる者多けれども、種痘後約一日を經過すれば其種痘の創口なる表皮は、再たび完全に融合して、此處より水等の侵入することは決して之あること無く、且つ局部に膿を持ちて發熱するは、七八日の後なれば、種痘の當日丈けは除き、翌日より此の七八日になるまでの間は、依然入湯を續けて支障なきものなり、然れども一たび膿を持ちて發熱するに至れば、直に入湯を停むべし、是れ種痘に限らず、發熱

中に入湯するは極めて危險なればなり
生後六ヶ月乃至一年にて、始めて齒を生ず、而して生齒の時代は、小兒の最も刺戟に感じ易き時期にて、この生齒の爲「生齒困難」なる一種の病的作用を起し、下痢、發熱、痙攣等ありて、往々腦膜炎の如き徵候を顯はし、甚だしきにありては之が爲に死に至ることもあり、

歐洲大家の說に依れば「小兒には生齒困難は之あることなし、生齒に際してこの異狀あるは、他に原因あるべし」と云へど、予は此の說に與みし難し、而して予の經驗に依るに、一家にて其の長子が生齒困難なる時は、次子、三子も必ず亦生齒困難に罹るものなり、

齒は通例下顎の內門齒が始めに生へ、次に上顎の內門齒を生じ、次に上顎の外門齒、次に下顎の外門齒と云ふが順序なるも、往々にして此の順序に依らざるものも少からず、又上記生齒困難は、小兒の體質に關係なきもの丶如く隨つて弱き小兒が生齒困難に罹るとは限らぬなり、

從來多くは生後一年間位は全然乳のみを飮ましむる習慣なるが、前記する如く生後六ヶ月齒を生ずる頃に至れば、乳と併せて粥汁の如き澱粉質のものを與ふるを宜しとし、生齒期遲くして六ヶ月後未だ齒を生せざるものにありても、粥汁なれば決して差支なし、又一年の終期に達すれば、消化し易き小魚等の肉類を交へ與ふべし、

この期間に於ける健康なる男兒にありては、重量は一貫匁位が普通にて輕きものも六百匁內外なり、而して營養十分なるものにありては、平均一日に十五匁、普通のものは十匁位づ丶增加し行くものにて五匁以下なれば營養に故障あるものと知るべし

口中には食物の殘渣等滯りて、其腐敗は有害なれば、哺乳後には稀薄にして、清淨なる殺菌水若くは重曹を溶解したる水にて、齒齦舌等を拭ふべし、而して口中の衞生は一生を通じて必要なることなるがこの哺乳時期にありては、其發育上特に緊切なり、

哺乳時期にありては、不消化物を與へざる爲、消化器病は少く隨つて夏期の病氣は少なし、然れども冬期に至れば呼吸器病多く、肺炎等はこの時期に罹り易し、

この期間にありては、往々一日に二十時間も睡眠を取るものあれど、普通は晝夜を通じて十四時間前後にて、且つ小兒は能く泣き能く眠るが、最も健康なるの徴なり。

病人と菜果

醫學士　久保杏林

野菜類の中で、病人が食して營養に成るものは、澱粉を含んで居るものである、例へば、甘藷、馬鈴藷、青芋、九面芋百合の類ひである、蓮根や大根、人參などは水分ばかりおほくて、營養になる澱粉質は少ないものであるから、餘り病人には益が無い、其他筋張つて居る午蒡、芋莖、獨活のやうなものはよろしくない、日本では昔から、干瓢を病人に食べさせる習慣があるが、あれは青瓢の外側の皮を剝ぎ去り、白い肉のところを、薄く切つて乾固めたものであるから、餘り消化の宜しいものではないから病人には食べさせない方が宜しからうと思ふ。

海藻類の中では、昆布、海帶のやうなものは、消化が惡いから病人にはよくない、淺草海苔は、一寸風味のよいところから、食物がうまく食べられるといふやうなこともあるから、少しは食べさせても差支は無からうと思ふ、

果物は、日本では今まで餘り食習つて居らぬが、あれは身躰の益に成るものであるから、平日成丈け食馴れて居る方が宜しい、殊に通じの遠い病人などには最も宜しい、尤も腸胃の惡い病人は果物を食べると下痢を起すから、而う云ふ人にはよくない、夫から果物を食べる時分には、皮を剝き取ること、種子を去ることは必要である、蓬菓の樣な極小さな種子は丸呑みにしても害は無いと云ふて居るが、病人

には出來得る限り、而う云ふものは呑ませない方が宜しい、

病人の食物に味を付けるには、其病氣に依つて種々調味の仕方はあるが、先づ何れの病人にも宜しくないのは餘り強い酢を使つた調理品である、夫から甘い物は、蜜飴の類が宜しい、尤も此蜜と云ふのは砂糖蜜のことでなく蜂蜜であつて、此品は至極上品な甘味を持つて居るもので、殊に消化も宜しいから病人に食べさせるには、最もよい品である。

又水飴も煮物に混ぜると砂糖の代用をいたし、又藥にも成るから至極宜しい調味品である

香氣のあるものや辛いものは、何の病人にも餘り宜しくありませんが、併しどうしても、食物が不味くて食べられないと云ふやうな場合には其香氣で惡い臭氣を消して食べさせる場合もあります。

家事雜聞

●養鶏と鶏卵　近時養鶏事業の進歩に伴ひ、種卵の需用が著しく増加し來りたるが、右に付下澁谷の鎌倉道に、千五百坪の地所を有し熱心養鶏に従事せる田中孫次郎の談を聞くに、養鶏は我國の氣候に適せる最も有望なる事業にて、食料はメンザイ、フスマ等、一日一羽に平均四厘の費を要し、其中鶏糞にて一厘を回收し得るにより、實際は三厘の費にて足るなり、而して之を飼養するに名古屋大阪邊にては、牝鶏廿五羽に對し、牡鶏一羽の割合を以て飼ひ居れども、牝三十羽に對し牡一羽の割合を取るを適當とす、又鶏卵は產出後二週日以内の新しきもの最も滋養ありて、且つ種卵となすを宜べし、而して鶏卵の新しきものは、之を割箸にて其黄味をちぎる時は、二つに分れキラ〳〵として光輝あり、眞に生氣ある如く見ゆれども二週日以上を經過したるものは、箸を當つれば、溶ける氣味ありて生氣なく、所詮種卵とならぬのみか、滋養も頗る尠きにより、需要者はこれに注意して購ふを良しとす云々と云ひき、

◎青物の早作り　府下南葛飾郡砂村にては、舊幕の頃より青物の早作りを名產として、年々四月下旬には苞入の胡瓜、茄子、隱元豆等を市場に出して、數寄者の口を歡ばせたるものなるが、近年汽船の便大に開け、伊豆、八丈、小笠原等の各島より輸入する野菜物多く、胡瓜の如きは昨今ハヤ大きさ五寸餘のもの一本十二三錢、茄子の如きも一個八錢より十錢位にて賣出されたる程なれば、砂村にては到底彼の地と拮抗し得ず、苦心の割には一向面白き利を見るを得ざるより、次第に作家の數を減じ、昨年迄は卅餘軒ありし者、本年は十六軒に減じたり、

齒の養生

石原久

日本では小兒に生母の乳を飮ませるが、西洋では餘り飮ませぬ習慣になつて居るから、小供が腸胃を惡くして死ぬ事が多い、而して同時に齒の惡い小兒が多くある、勿論營養不良より起るのもあるが、兎に角、生母の乳を飮んで育つ小兒よりも、牛乳で育つものに、此等の病患が多いので、今日では專門大家は皆、小兒には是非母親の乳を飮ませねば宜くないと云つて居る、日本でも近來西洋の眞似をして、牛乳を飮ませる人の增加する傾がある、これは甚だ嘆ずべきことであらう、西洋には小兒の脚部の彎曲する病氣があるが、尤も此病氣は空氣の善い所に連れて行くか（營養物を與へるかすると全治る）此病氣に罹つた小兒は何れも齒が惡い、齒が惡いと自然食物も充分咀嚼しないで丸呑みにし從つて腸胃を損するのである、それで食物は石灰水を混ぜて與へると石灰水は骨を固くするもので、齒の琺瑯質は、骨と同じ物であるから、骨が丈夫になれば自然と齒も善く成る、小兒が學校に行くやうになると、何の學校にも齒醫者があつて、時々齒の檢査をするが、學校醫の統計に依ると、齒の惡い爲に腺病質に成るものが尠くない、畢竟惡い齒に種々の物が入り化膿して非常に小兒を苦める事がある、夫で學校衞生でも殊に齒に付て注意するやうになつて、少くとも半年に一度は檢査をして、夫々療治をさせる樣に致した結果、齲齒に罹るものが少く成つた、

齲齒は傳染するものなり

今迄學校の敎師或は醫師が、單に營養不良であると思つて居つた小兒が、齒の療治をした爲に健康になることがあるが、此は齒の惡いために、食物を丸呑にするから營養が充分に取れないのである、此等の小兒は齒の惡いのが習慣に成つて、丸呑みを普通と思つて居る、それで自然腸胃が惡く成るのであるが、齒が丈夫になると自ら能く嚙む樣に成る、嚙

で見ると、美味を感じるから益々嚙み、營養充分にして益々健康に成ると云ふ譯である、元來齒は、一本齲齒が出來ると、直に隣りに傳染して、果ては皆同患に罹るやうに成るのみならず物を嚙まねば、顎骨を用ゆること尠く、自然顎骨が萎縮するからして大きく成つて齒が生へ揃ふ時に場所が無く、これが爲に齒の列が惡く成り容貌を害する樣にもなる、世間では小兒が齲齒に罹つても、直きに新らしい齒が生へ替るのだからと云つて、其儘打捨てゝ置く事があるが、これは甚だ宜しくない、前申す通り、齲齒に成つたり、扱けたりして働かずに居ると、顎骨が自然收縮して新たに齒の生へる場所が無くなつて仕舞ふから、縱令乳齒であるからと云つても、療治せねばならぬ、

大體から云へば齒の養生としては、食事後に含嗽をするが最も宜しい、西洋では口中水と云ふもの各室に備へ付け、食後には必ず含嗽をする。又夜分就眠る時には必ず含嗽をさせる、寢る時に含嗽することは頗る必要であつて、晝間は誰れでも食つたり談じたり、折々口を動かして居るから、齒の間に挾まつたものも脫れて仕舞ふが、寢てからは口が働ずに居るから、齒の間に挾つたものは取れる機會がなく、其儘酸化し齒を害して遂に齲齒に成るのであるから、含嗽は朝起きてするよりも、夜分寢る時にする方が寧ろ適當であらう、口中水と云ふものは廉價にして、且つ咽喉に入つても害に成るもので無いから用ひたら宜からうと思ふ、多くの人が齒を掃除する時は、磨いて白くするのを第一の目的として居るやうであるがこれは大いなる誤解で一體口中には、百以上の黴菌が附着して居るのであるから、夫を殺すと云ふ考へを以て、齒磨藥は出來て居るのであるから決して齒の質を減らすやうな事は無い故に西洋では煉藥のやうな物や、粉のやうなものでも、齒に直接に害の無い物を選んで用ひて居ります、日本でも多少同じ考へであるかも知れぬが、今日の所では主に奇麗にすると云ふ目的である樣に思はれる。

裁縫生徒卒業式に

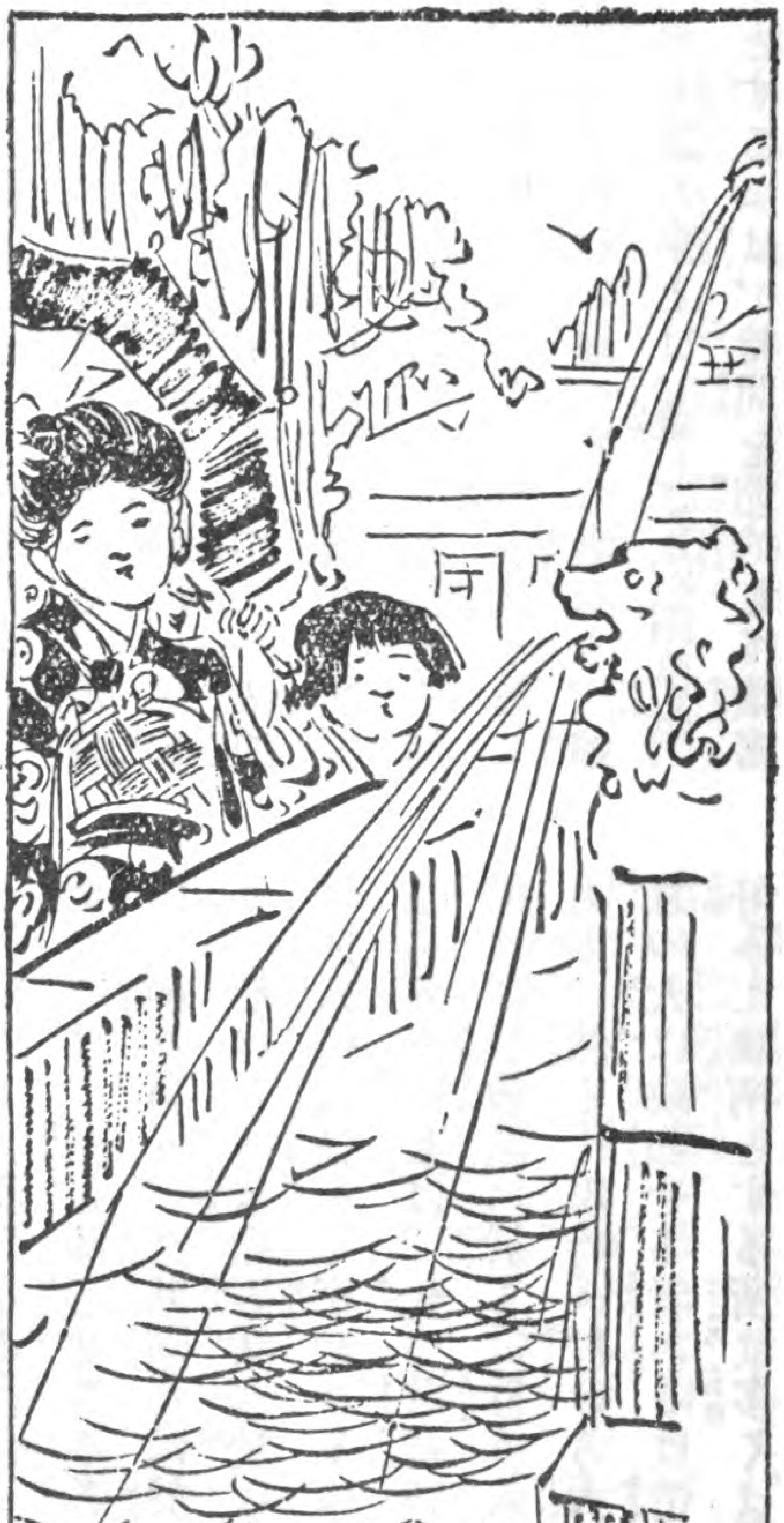
小川直子

けふしも裁縫科の卒業式を挙るに至りしは、めでたしといふも言の葉たるまじうこそ、此嬉の基はと考ふれば、教の親も教子も四とせが程の心しらび、朝に夕べに怠らず、堪へぬ暑さの夏の日の、庭の草葉もよられつゝ汗あゆるをも物かはとつとめ、又冬のころ雪さへ積る通路をふみ分つゝものぼり來て、こゞえ果たる指さきに、針はもてども覺えなき其苦しみにも能く堪へ忍びて、帯よ羽織よ重ねものよとさまざまの衣服ども數々たちかされられたるが、縫目どもの細やかなるを見れば、佐保姫が染いでたる大和錦をさらせるかともあやまたれて、いとうるはしうこそ、されば校長校主をはじめとして、おのれら皆に至るまで、これに過たるうれしさやあると、打ゑみつゝめづる也けり、これにつけても、猶一言聞えまほしき事こそあれ、今日此學業卒へ給ふ君たちは、明日よりそれぞれに父母の心に随ひ、いづれの家にか嫁ぎつゝ一家の主婦となり給ふべき君たちなれば、舅姑をうやまひ、夫に順ふべき道はいふもさらにて、たびたび聞え來つる事なればはぶきていはず、そもそも物は、萬に應用せではあるまじければ、けふ迄習ひ給へるわざどもを、彼是に及ぼして、不斷の衣服の洗濯より繕ひものに至るまで、甲斐々々しくつゞりさせてふ虫の音も、女のわざのいましめぞとおもひなし、ほころびたる物あるは汚づきたる物など、舅姑夫に着せ置かば主婦たる者の恥ぞかし、稀には心得違ひの人ありてあらたに調づる綾錦のうるはしき衣服をのみはたちぬふ事も樂しめども、其外は打捨置もなきにあらず、中には終日座りゐて、裁縫こそはいそしみつれ、厨房の料理如何を問はず、召使の者に任せ置くもありこれはた何の心ぞや、食物は衣食住と數ふる中のひとつなれば、細やかに心せでは叶ふまじきわざになむ、いかにとなれば、身體の素質をかもし、はた遊さに歩み、または手をうごかさむ力をまし、身のあたゝかみを生じ、心さはやかに壽を保つ基にしあれば、其食品どものあるやうあるは、嵩の多き尠きなどにも、心しらびして、味ひの濃き淡き、鳥の子の種々乳しるよ魚鳥の肉などよと、これらを旨として、これに添ふるに野山の畑つものゝ甘菜から菜をはじめとして、海より得たるも、紫海苔よ、青のりよと味ひのみか色どりをも能取あはせて調じいで、さまざまにあしらひよくして、供ふべし、きのふもけふも同じ物のみ供へぬやう深切に心をこめ、其もとつ品はかはらずとも、調じかたに心せばくさぐさめづらしくしなさるゝ物ぞかし、これ其食物は徒に腹中に入るればよしと云ふものにあらず、見る目うるはしう、心をよろこばしむを旨とせでは、神經に適ふ事あり神經にきらひては、いかほど美味たりとも、消化あしくて身の養ひとなりがたしまして舅姑の年老世を去り、靜に暮す身となりては、樂しみ尠き習ひなれば、主婦たる者は殊に心をそゝがずば、老の心は樂しまず、心たのしからでは、身もまた、からびゆく物ぞかし、能く能く心しらびして、主婦たる道をつくし給へや、（高知女學校卒業式の日）

言語と談話の注意

山田豊彦

女子は性來多辯なりと云ふ、多辯なる必ずしも害ならず、其多辯を言語と談話の惡方面に恣にして始めて其害あるを見る、言語と云ひ談話と云ひ、日常の些事たるに過ぎずと雖、其使用如何に依り或は人に不快の感を與へ、或は有益なる感化を致す、乃ち此事の日常の些事なるだけ何ほ大に注意を拂はざる可からざる者あり、蓋し人生の一大事に就ては何人も注意を怠らざる可きも、些微此のことの如きに於て、人は注意を怠ること大なるを以て也、



吾人を以て之を見れば、近者婦人社會の言語も談話も大に墮落せる者あり、殊に女學生社會に於て其甚しきを見る、其一例を擧げんか、彼等が今日好みて使用せる「いゝのよ」式文句は、其源を花柳社會に發したる者に外ならず、吾人は現時の女子教育者に對して注文する所は、其教育せる女學生をして、斯の如き藝者式言語の使用を禁止するにあり、言語は其人の品性を顯はす者なると同時に、又其人の品行を惡方面に誘ふことある者なるを記憶せざる可らず、不品行とは何ぞや、不シダ

ラとは何ぞや、是は亂雜不潔なる、不シダラなる言語や、談話の實行に過ぎざるに非ずや、既に言語に於て之に近くに於ては、之を實行に於て發顯するは、正に一歩なるに非ずや、是れ日常の言語及び談話に於て大に謹愼す可き所以也、

言語の形式以外に其內容に立至りて見るも、現時の婦人社會の談話は、あまりに單純無趣味にして且つ惡傾向を有せり、其單純無趣味なるは心田の瘠痩なるに依り、其惡傾向を有するは品性の高からず、修養の乏しきに坐す、見よ現時敎育ありと稱する婦人社會の談話すら、其範圍一定して其外に出づることなく、思想の貧寒なる憫むに堪へたる者なり、婦人は多く語りて何事も談さずとは、蓋しこの謂ひ歟、此缺點を除去せんとするには、時間を節約して讀書修養するの外あらず、又彼等の談話の惡傾向は、種々雜多にして、爰に一々枚擧すること能はずと雖、其大體を示して聊か警戒を加ふる所あらんとす、

現時婦人社會の言語談話の惡傾向は、之を總括して一言すれば、社交の禮の未だ達せざるに坐する也、日本婦人の客室、或は街頭に相遇ふや、彼一禮是れ一禮、其丁寧にして彼等の禮讓辭令や至れり盡せり、此の如く彼等は禮讓辭令に富めるに係らず、人と人と相交りて、圓滿なる會合を全うす可き社交の禮に至りては、殆ど關心せざる者の如く爾り、社交の禮には種々あり、又其國々に於て習慣を異にする者あり、然れども言語談話に於ける社交の禮は、要するに何人の感情をも害せざるにあり、人の感情を害せざらんと欲せば、先づ其言語を選擇し、不快の語を避け、其會話に於ては餘り人の內情に立入らざるにあり、然るに現時に於ける大抵の婦人は、此間の注意の大に缺如せる者あるは惜む可き也、蓋し彼等の好みて談柄とする所は多くは人の內情にして、加之も其缺點、過失、失敗の方面也、是れ一は彼等の好奇心の然らしむる所なりとは云へども、又一方に於ては人の過失。失敗を好み、其成効を媢嫉する一種の害惡心に基く者たるや疑ふ可らず、友を賣る者は、

男子よりも女子の内に多し、其惡心に基く也、然も此の如きに至るは、人の內情を知らんとする好奇心其緣を爲す者たるを記せざる可からず、ショーペンハウエルの語に言へるあり、曰く

我れ一日兇盜の襲來ることを慮る時は、我れ固より我家の牆垣に於て鐵釘を裝し、若くば垣下に於て渠答の屬を散布し、若しくば獒狗を庭に放ち、若くば鐵砲を裝し、自然に爆發す可らしめ、以て防備を爲すことを得、是に於て彼兇漢夜に乘じて至り、此等の備有るが爲めに重傷を蒙り、或は性命を亡ふに至るも畢竟其自ら取れる者にして、我れに於て少も罪あるの理なし、即ち彼れの陰事有るを知りて强て我れに訊問する者の如きも、我を害するの意有るを以て、我れ之に答ふるに遁辭を以てするも、畢竟自ら防ぐの手段たるに過ぎずして、秋毫も不可なる所有る無し、故に詩人アリヨスト云へる有り曰く、凡そ虛言を爲して人を欺く者は、人の譏議を免れず、且つ多く惡意を挾むと雖、時有りて亦虛言を用ゐざる可らざる有り、獨此れのみならず、古今虛言を爲して著明の功を奏せし者亦寡からず、或は此れを以て人を危に脫し、或は人の死を救ふことを得たる事歷々徵すべし、蓋し吾人の此世に處するや、常に朋友と事を倶にするに非ずして、動もすれば惡意を挾む者と交接游處すること有り、是時に在りて其勢淡泊眞摯なるを得ず嗚呼人事の紛擾なる其間往々詭秘朧昧の境に過することと幾度なることを知らず、常に明白直遂なるを求むるも固より得可らざるなりと是言誠に當れり

夫れ斯の如きは醜惡なる社交の極點にして、固より友誼を以て之を目す可きに非ずと雖も、詳に人事を觀察すれば、又弱き程度に於て此種の弊風あるは疑ふ可からず、吾人の日常愼まざる可からざる所ならずや、



洋食四五品

霞袖女史

豌豆スープ

豌豆『スープ』に、肉入『スープ』と、並『スープ』の二種あり

肉入豌豆『スープ』を製するには、先づ一斤の生豌豆、牛肉、又は鶏肉半斤を骨附のまゝ骨を砕き、能程に切り、スープ鍋に投れ、水一升二合を投じ、豆を能く洗ひ皮を去り、之に能き程の食鹽を加へ、火に掛け、沸騰を待ちてかすをすくひとり、珠葱二個、胡蘿蔔一本、蕪等一本を細かに刻み、之に大腿二十匁を加へ、三十分間程蓋せずに煮、かすの浮きたる毎に網杓子にてすくひとり、三十分經たる後鍋に蓋をなし、三時間文火にて煮るべし、但し豆は焦つき易きものなれば、時々蓋をとり焦附かぬやう注意すべし、斯くして煮ること三時間に至りたれば、一旦火よりおろし、水嚢にてこし、豆の中よりかす

を取り去り、後元の如く『スープ』と共に鍋に戻し、能程の胡椒、食鹽を加へ、更に五六分間煮たる後皿に盛り、焼麺包小量を骰子目にきりて、其中に入れ、成るべく冷へざる中に用ふべし、

鰈のフライ

鰈はフライにしてよし、フライは日本の天麩羅同様なれども、異う所はうどん粉の替りに、麺包を粉にして、先づ魚に玉子の白身を塗り、麺包粉を衣せ豚の油か牛酪にて煎る、豚の油は下等なり、味も劣る、上等の客には必ず牛酪を用うべし、鰈牛蒡巻はひらめと云ふ、鰈の皮にて新牛蒡を卷き、醤油付焼にて小口切り、

鶏卵カレー

玉子四個を能く煠で、冷し置き、同時七匁の牛酪小匙一杯の『カレー』を投れ、活火にかけて四五分間かきまはし、一個の玉葱、一個の林檎を細かく刻みて其中に投じ、軟かになるまで煎りつけ『スープ』を少しづゝ、混和物のとろ／＼になるまで、文火に

て煮たる後、大匙一杯の米利堅粉、能き程の食鹽を加へて、能くかきまはしながら、五六分間煮たる時前の煠で玉子を薄くきりて此中に入れ、尚三四分間火にかけおき、注意して玉子を皿に盛り、其上に『カレー』を注ぎ、冷えざるうちに飯と共に出すべし、

牡蠣カレー

先づ二三十個の牡蠣の殼を剝ぎて、其液汁を鉢にとり置き、玉葱一個『日本葱にても宜し』を細かに刻みて、之を大匙二杯の牛酪にて煎り付け、其褐色になりたる時、大匙一杯の『カレー』粉小量の鹽、細かく刻みたる一個の林檎に『クリーム』を加へて能くかきまぜ、鍋の蓋をなし、十四五分間文火にて煮たる後、牡蠣及び其液汁を投れ、木の匙にて能くかきまはし、小匙一杯の『レモン』汁を和し、尚十分間程煮て、飯と共に皿に盛りて出すべし、

馬鈴薯サラッド

馬鈴薯を、能く洗ひ、丸のまゝ湯煮し、冷めたる後皮をむぎ、薄く切り、皿にならべ、其上に燒肉、又は燒魚の肉を、細かにせるものをのせ、又其上に薯の薄片をならべ、交る〳〵に、肉と薯とをよき程に重ね、次に、サラド、ドレッシングをかけて用ゐるべし。

但しサラド、ドレッシングの製法は、玉子のきみ三個を鍋に入れ、砂糖、食鹽を能き程に加へ、かきまはし、更に牛乳一合五勺を入れ、火にかけて絶えずかきまはし、能き程になりたる時、温めたる酢五勺を加へたるものなり、これはすべてのサラドにかけて用ゐるものなり、

フーカデン

擣肉を蒲鉾形に固めて其面へ玉子の白蛋を塗り平鍋に牛酪を投れ、其沸騰を待ちて肉を投れ、鍋に蓋をなし、凡そ十分間程經たる頃くづさぬやうに、肉を反して、鍋の中に溜りたる汁を匙にてすくひとりてかけ、褐色になる迄むし燒になし、細き竹串を刺して、其熱否を試み、串障りなく通らば、鍋より出して、冷し置き、小口より二三分の厚さに切り、

一人前二三片程皿に盛り、洋芹の若芽を添へて出すべし、

大和シチウ

牛肉を能き程に切り、鍋にて燒き、色の變りたる時湯を入れ、じやが芋、人參、慈姑抔よき程に切り、ゆでたるものを入れ、能く煮たる後、醤油にて鹽梅し、葛粉を水にて溶き、汁の中にいれ、かきまはし、煮て、椀に盛るときは生姜を添へて出すべし、

食物と衛生

醫學士　太田庄三郎

衛生といふ語の意味は、云ふまでもなく、人の天然の生活機能を妨害して、生命を短くするもの丶原となるものは、何であるかといふ事柄を知り、是を防いで身心の健康を保つべき道である、病に罹つて後醫に見せ薬を服するは、旣に晩いのである、此法は東西いづれの國にても、自然に行はれしものである

が、それは只飢ゑて食を求め、渴して水を飲むと同じく、寒ければ衣類又は獸毛の類抔を重ね着る等の如き、只人の感情上の必用に迫られて、行ひしまでで、此者は斯る物質を含むが故に、食しては身に害を爲す、彼ものは斯る理由なるが故に、爲して効なく、健康を傷ふといふ如き、道理上の思想より出たる事ではなかつた、然るに近來衛生といふ事は、所謂裏屋住居の人でも心得るやうになつた、併し自分の事ながら事實はむつかしいものである、

此衛生法には種々の區別はあるが、一般に一人一家の力にて爲す事能はぬこと、他人とも協力し、政府の力をも假りて、初めて充分若くは幾分を、爲し遂ぐる事の出來るものとがある、例令ば上水下水の改良、傳染病一般の豫防法等の如きものである、他人に協らず、他力を假らず、充分思ふ通りに、自ら爲す事の出來るもの、例令ば自ら飲食起居を愼むが如きものである、此兩法共に人の衣食住の三に歸するものが最も多い、此衣食住の内には、婦人に親密

の關係あるものが少くない、特に衣食の二は、家政の一に屬すべきものである、

小兒の時、父母の衞生上の不注意に因りて、成長の後生涯病身と爲るものも少くない、此等は鳥渡見たる處では氣付かないが、能く注意して其病身と爲つた遠因を探ると、小兒の時、親の不注意に因つて、自然に來りしものである事を發見する事は少くない、身分の貴きも、億萬金の富も、身心が健康でなければ用を爲す事は少い、健康は富貴に優る寶で、人間萬福の礎である、で誰も其身が健かで、其命の長きを禱らぬものはあるまい、變に處して心身の强剛なるも、平日身心の健康を保つからである、近年衞生の道が著しく發達し流行病若しくは戰爭等がなければ、各國共に年々死亡の數が減少し、及び人の命の平均數の、年を追ひて長く爲つて居るのは事實である、尤も昔の文を見ると、今の世には有るべくもあらぬ程、命長き人があつたやうである、夫は心を勞する事が少く、身の運動が能つたからで、長命の人も多かつたであらうが、今日の如く衞生の法が充分開けて居らぬから、小兒の夭折するもの、其外不明の病抔に罹つて死るものは最も多かつた事であらう、後世人文の開けるに及んで、自然世の交際も繁多と爲り、次第に人々心を勞する世の有樣と爲り、精神上の病抔は、却て年を追うて、多きを加ふるの傾きはあるが、衣食住の有樣、其外總て病に克つべき事の、大に進歩したる爲に、此等のもの丶、病の原と爲りしものは、次第に減少して大分好き結果を呈して居る、

人は食に藉らねば、身を養ふこと、命を保つ事の出來ぬは、云ふ迄も無き事であるが、決して食の爲に生活して居るのではない、生活せんが爲に、食を探るのである、此の眞味を知る時は、食の苟もすべきものでない、人間の一大事であることが覺り得られる、昔支那の孟子が、飲食の人は人之を賤む、と言はれたのは、飲食に淫するの徒を刺つた名言で、今の世にも滋養と云ふ字を楯と爲して、食前方丈と

いふ如く、徒に山海の珍味に飽いて、飲食に淫するものがあれば、孟子の賤むべきものとした人で、身を知らぬ人である、食は徒に口腹の慾に飽く爲のものでない、是とは反對に貧賤の人は已むを得ぬことであるが、中等以上の生活の家でも、貪吝の人は一切肉を食はず、美味を嫌ひ、至極の粗食を爲して、一向に貯蓄を專と爲すものも無いてはない、萬金を懐にするとも、身健かでなければ、何の用をも爲さぬ、是は食の一大事なる事を忘れたるもので、これで身心の健康を希ふは、猶木によりて魚を求むるに等しい、故に食は單に胃に充て、饑を凌ぐが爲のみではない、

すべて身に採りたる食の養ひと爲り、運營の作用生活の機能が盛んに、健康無病、能く其目的を達せしむるには、其食中に一定の規則に從ふた物質を含んだものを要する、其必要の物質といふのは、第一蛋白質とて肉類の主なる養分、鷄卵の黄味、白味の如きもの、第二には澱粉とて米、麥、豆抔總ての植物により取りたる、食の主なる養分、第三には脂肪とて、油質のもの、第四には鹽、第五には水で、此蛋白、澱粉、脂肪の如き、滋養素の配合宜しきを得たるものが滋養物で、人間日常の食に缺ぐべからざるものである、此滋養素の中には、人の身内に入りて後、甲は乙より化生して、彼此流用の附くものと、全く流用のつき難きものとの二種がある、且一品で此種々の滋養素を、適宜に含むものは少く、味も亦美ではない、故に如何ほど結構な食物でも、一品を食して滋養にはなり難く、種々の物を併せ食する所以で、從つて亦調理法の必要なる譯である、

茲に又一種滋養物と異りたるもので、特嗜品と名くるものがある、是は滋養物の如く、人の生活に必要のものではない、只中に、適宜に用れば食慾を進め、食の消化を助くるものがある、されど用ひぬからとて少しも妨なく、中には濫用する時は、身の大害を醸し、爲に命をも短くすることもある、

食の大事なる事は、すべての人の身は、諸々の器

關より、皮膚血液などに至るまで、其分子常に新舊交代するもので、生理學者の說に據れば、凡そ滿三年にして、全く新陳交代し盡し、一身復た一點の舊分子を止めぬと云ふことである、其は委敷目には見えぬなれど、指趾の爪、若くは毛髮の絕へず延長脫落することでも、其一斑を知ることは出來る、

すべて食事をするに、急いではよくない、口中で能く咀嚼せねばならぬ、咀嚼が不充分であると、胃にて消化するに、長き時間を費し、胃膓を傷ふ原因になる、甚だしく勞働なしたる後、又入浴の後に直に食事をしてはならぬ、十四五分時間、身心を靜めて後に食すべきである、食後直に勞働し、若くは入浴することもよくない、暫時休んで後、十四五分時間適宜に運動又は散步なして、消化の機能を助け、劇しき業を採る時は、少くも食後一時間を隔て、食事の後直に臥床に入り、若くは横臥することはよくない、

三度の食事は、時刻を正しくして、過不及のないやうにし、晩餐は少くも横臥前三時に爲し、睡眠中は消化の機能休止するが故に、夜中食事して、胃に停滯せしむることのないやうにせねばならぬ、

精神不快なる時は、著く消化の力を鈍くするもので、長く續く時は、慢性の胃弱と爲り、身體羸弱の因となる、故に食事中は勿論、食後と雖も精神を爽快にし、勤めて鬱憂を散するやうにし、食後直に書籍又は新聞紙を讀み、或は沈思默坐する等は、皆消化の機能を妨げ、血の循りを惡くするものである、食事中は飲食に關する話などを爲して、自然に食物の味を進め、消化を扶くる工夫を爲すべきである、

食物を調理する目的は、第一其質を柔かにして、消化の機能を速かならしめ、兼て味を能くして、口に適せしむるにあるので、若し單に味を美にし、口腹に適するのみを以て、目的とする時は食を資るの本旨を誤り、滋養多き品も、其の益無きに至るものであるから、成るべく獸肉、鳥肉の如きも、二三時間ばかり煮て消化し易いやうに柔らかくするがよ

い、

食物に用ゐる器物の不注意よりして、病を釀す事がある、凡て食事の器物は用ゐて後のみならず、用ゐる始めにも、能く洗うて拭き、新らしき玻璃器、及陶器は用ゐる前に、少許の食鹽を混せたる清水の中に容れ、文火にて煮るやうにし、又垢の附いたものは、灰水にて煮、又鐵製の器物は、始めに其器中に蕎麥粉を容れ、水を混じて煮て後に用ゐるが良い、鑛屬の器具の鏽を生じたるものは、すべて此法にて去ることが出來る、

食器は陶器玻璃器の外、鐵器が最良なるもので、鐵は人の血液中にある、貴重なる成分の一なるが故に、適宜に用ゐる時は、人の身の健康を助くる効力があり、食器に用ゐるには、此右に出るものは無い、鐵器を鹽氣若くは水の附きたるまゝに爲し置く時は、鏽を生じ易いから、生ず乾きたる布で、常に能く拭ひ、又鐵瓶等の甚く湯垢の附きたるものは、水を容れて、其内に少許の炭酸曹達を加へて煮たまゝ、凡そ一日を經て後に洗ふやうにする、

銅、黄銅、眞鍮は有害で、飲食の器物に用ひてはならぬ、尤も錫を塗つたものは患は無いが、少しでも錫の剝落つる時は、直に塗り直して、地金と食物と觸れぬやうにし、銅錢若くは銅の鍋などを用ゐて、漬物の酸味を去らしむるものが有る、かういふ事をしてはならぬ、鉛にも毒があるから、飲食の器具に用ふべきものでない、

新女學生四千餘人

目下學年の初めとて、各地方より新に上京する女學生引きも切らず、其數既に四千餘人に上れりと算せらる、此等妙齢の女子が東京に於て求めんとする所は何、求めて而して實際に獲る所は何、數年來の男女學生界の實際に鑑みれば、寒心に堪へざる者少からざるが、其は兎に角何より生活問題が大事の世の中になりて女學生等の學問選擇も之に制せられ、從來の如く虛榮的の遊學を爲せる、父兄も段々に減少し、手取早く金に爲る方にと簿記、計算、タイプライター等の講習を爲す者多くなりて、國語、漢文、裁縫、英語、唱歌、體操科等の女學生は漸次減少に赴きつゝありといふ、

浴場淸潔法

鈴木萬次郎氏談

△湯屋、理髪店の衛生に關しては、其筋より周到なる注意を以て、淸潔法を勵行せしめられたれば、近來は大に面目を改めたるの觀ありと雖も、湯屋に至りては未だ吾人の滿足せざるもの多し、

△理髪店の淸潔法は、店員各自に於て注意すれば、以て實行し得らるべしと雖も、湯屋は營業者のみの注意にては、到底其全きを得べからず、即ち入浴者各自の公德心に訴ふるの外なきなり、

△文明國人は皮膚を露出するを以て耻とす、然らば入湯に於ける吾人の狀體は、居常の最も非文明の狀態に在るものと言ふべきなり、而も入浴は裸體たらざるべからざるを以て、餘儀なき次第なるも、其が中にも吾人は努めて、醜態に陷らざるを心掛けざるべからず、

△近來藥湯流行してより、却て不潔を招くの傾あり、栗本警視部長の注意にて、藥湯中には手拭を持入らざるを規定したるが、余は寧ろ藥湯に限らず、湯桶の中には一切手拭を持入らざるを規定せん事を望む、

△浴者は流場に於て洗滌し、湯桶に於ては決して汚穢を洗ひ落すべからざるものなるに、往々如此不潔行爲あるは各自公德觀念の乏しきに因る、而して手拭を持ち入るが爲め知らず識らずの間に身を洗ふに至る、即ち半日ならずして臭氣堪え難き濁湯となる所以なり、

△入浴者は入浴前必ず腰部を流すべきは、萬々心得たる事なるが、中には之を粗略にするものなきにあらず、余は是非とも全身を一流したる上にて湯桶に入り、成るべく動搖せずして溫暖を取り、靜に流場に出でゝ洗滌するの順序を立て、殊に職人、小年輩の喧騷は嚴禁すべきを望む、規則ありても之を勵行せずんば、無きに等し、

△入浴者は湯桶の中にて顔を洗ひ、甚しきは口を嗽ぐ者あり、吾人は此に至つて其無智に驚かずんばあらず、黴菌鼻口に入らば直に其毒に感染し、目に入らば必ず盲目とならざるを得ず、己れの汚穢を洗ひたる湯を以て再び顔を洗ひ、口に含むに至ては、殆んど禽獸と選ぶ處なきなり

△猶序に一言するは、市内の共同便所なり、是等も各自の公德觀念を以て不潔に陷らしめざるに努めん事を望むと共に、其筋に於ては便を汲み取るのみならず、斷えず掃除せしむるか、或は各所に於て申合せの上、相當の經費を支出して、一日數回の掃除を行ふ事としたし、

△吾人は最も不潔にして亦最も必要なる便所の如きは、特に各人の注意を促し、必ず勵行せん事を切望する者なり

小兒の遊嬉と玩具

紫關女史

遊嬉は、小兒の身心の發達する、自然の妙締にして、母親たるもの、常に注意して、抑壓に失せず、放逸に流れしめず、其道に從つて保護を加へ、訓導爲す時は德性を涵養し、智識を發達せしむる事、至大なるべし、人生幼時の遊嬉は、生涯の運命に關するもの有りと、古人は言ひき、小兒生れて四五ヶ月を經る時、注意して其擧動に氣附くる時は、早く既に遊嬉の意あるを認むべし、それより少しく成長して、玩具を與へて遊ばしむるに至るは、智惠を開發するの初にして、小兒はいつとなく、玩具の性質をも識別し得るの智惠を生ずるに至る也

遊嬉は最も小兒の身心を樂ましむるものにして、其玩具は身を傷ふべきもの、婬れたる音を發するもの、形の醜きもの、色合の惡しきもの、又複雜のものなどは與へず、成るべく形の正しきもの、又淸き音の發するもの色合正しきもの、形の變じ易くして毀れ易からぬもの等を撰びて與へ、又單純にして取はづして再び組立の出來得るものなどをよしとす、何にても、後來智惠を進めて、德性を養ふべき、助と爲る品を撰みて與ふべく、近頃は學問の道理によりて、作りたる玩具も少からず、品を撰みて與ふべし、されども、玩具の餘りに高尙に過ぎたるものは、宜しからず、何によらず、折々は取替へて與ふるを良しとす、さすれば、小兒遊嬉に倦まずして、心を喜ばしむべし、只餘りに屢取替へて與ふる時は小兒終に物に倦き易き性を涵養し、後來耐忍の力乏きに至る、宜しく注意して、其中庸を採るべし、總て無益有害と認むる玩具は一切與ふべからず、玩具は小兒の伴侶なり、朋友なり、有害の玩具を與ふるは惡しき友と交るに等しかるべし、

小兒二三歲以上になる時は、常に家外に出るを好むものなり、心任せに爲すべし、土を取りて丸と爲し、家を造り、車を製し、草を植ゑ、花を插し、摘

水を引きて川と爲し、石を疊みて池を湛へ、或は雪中に奔走して、雪球を擲つ等、之れ皆小兒の天禀にして、其間に心も強く、身も健かに、智惠も自然に増すものなり、然るに小兒が是等の遊嬉を爲すを見て日光に燒かるヽを氣遣ひ、衣服の汚るヽを厭ひて、一向に其の遊嬉を抑へ止めんとするは、大なる心得違ひにして、此くする時は自然に小兒の奮發心を減じ、進取の氣を挫くに至るべし、唯行有害と認めぬ限りは、自由に此等の遊嬉を爲さしむべし、小兒は前にも略述置し如く、又種々の物を造り見んとする念強きものなり、之には紙鋏、糸の類、若しくは木片などをば與へて、自由に任せ置き、時々指導すべし、是等は皆、後來物理を研究する働きの、本と爲るものなり、



繪本の類は、小兒の玩具に適當のものなり、されども能く其本を撰ぶ事肝要なり、蓋し屢々耳目に觸るヽものは、終に心底に透徹するものなりされば忠臣、孝子、勇將、義士、等の事蹟を繪きたるものを弄ばせ其繪を常に見て、其事柄を心に記憶させ、折節其事柄の大要を說き聞かす時は、小兒の心田に、いつしか忠孝節義の種子を生じて、年と共に次第に成長すべし、文字を知らざる嬰

兒と雖、常に目に見、耳に聽く處、忠孝、節義、仁愛、道德の事のみなる時は、成長の後は、敎へずして、自ら善事善行を爲すべし、古今一事業を爲して、名を後の世に遺したる偉人の、何によりて斯る志を興せしかを尋ねれば、小兒の時、古人の事蹟を顯はしたる繪を見、若くは其事柄の話を聞きて偶然に我れにも斯くこそあらまほしと思ひ起して、幼心一點の燈火、終に滅せずして後來に至り、大に光輝を發したるもの少からず、之に反して或は根もなき事共を書顯はし、或は卑猥に近きもの、或は俳優の繪などを、常に玩具に與ふる時は、其何たるを解する力なきも、いつしか此等不良の種子、小兒の心田に發芽して、後來德性上の大害を爲し、知識の發達をも亦傷ふべし、例へば今日の手段新聞に記する、小說の譚などの如きも、多くは、男女の間の事柄、又は遊妓の有樣などを顯はす、小兒之を見るに慣るゝ時は、德性を傷ひ、氣魄の發達を妨ぐる事少からす、又狐の婚嫁の繪の如きも、一寸の考へにては、

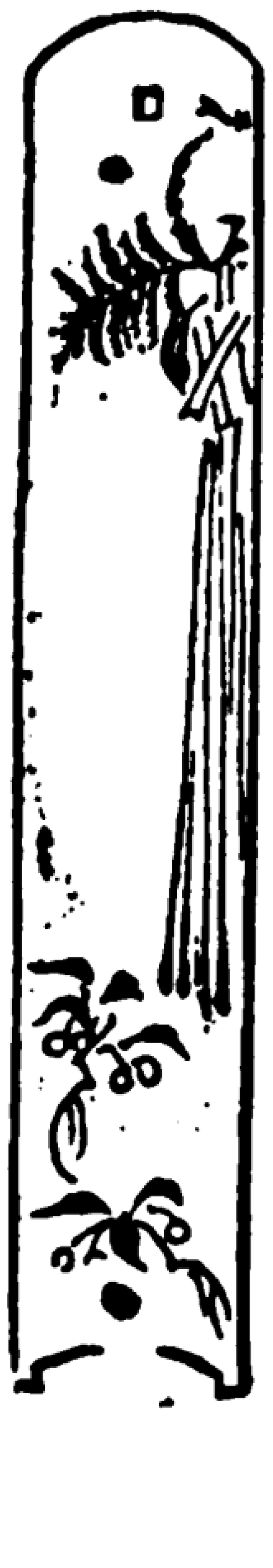
格別害なき樣なれども、狐は怪獸にして、人を魅するものとの感覺は、深く小兒の心に印識して、容易に拔取るべからず、終には怯懦の性と化すべし、世の小兒に豪膽のものあり、怯懦のものあるは、(大人に於けるも亦然り)、一瞥する時は、偏に其人の天稟なるが如きも、仔細に注意して、其原を觀察する時は、少くも其半ば以上は、生後家內の自然の敎化に依るを發見する事容易なるべし、常に玩具を容るべき箱、若しくば籃を小兒に與へ置きて、用ゐざる時は、其內に納置かしむべし、隨時隨所に散らし置く等の慣習を附べからず、此箱は小兒の自由に任せ置き、遊嬉の後は自分にて取片附しむべし、此の己の爲し、事と己が所持したるものとは、自分所置を爲さねばならぬもの、といふ事の慣習を爲すは肝要の事にして、何に附けても、此くの如くに養成する時は、成長するに從ひ、自然に人に倚らず、自助、自立、の性を涵養し、後、世に立て、事を處するに、規矩ありて、人に賴らず、十分に職任を盡すの素と

なるなり、高貴の家に生れたる人、奮發の氣象に乏しく、自分事物を處置するに慵きは、全く小兒の時、乳母、侍婢、などが事毎に世話を爲し、本人は何事をも、自分々々爲さゞりし結果にして、事毎に人に依賴し、成人の後、自分家事の取締のみならず、一身の始末も出來ざるに至るもの無きに非ず。此等は皆幼時より、涵養の素なきに依る事なり、玩具は適宜に數を限りて與ふべし、好むに任せて濫與爲べからず、

婦人の新職業

本年度の各女學校卒業生中、各種の技藝を習得したる人は、世の中の需要多く、大抵二十圓以上の月給にて地方の女學校に聘せられたりとのことなるが、近來各官廳、會社、銀行等に婦人の事務員を用うること多く、電話係り或は停車場の出札掛り等は男子よりも婦人の方餘程適當なりとて、これ等の職業は漸く婦人の獨占とならんとし其の他にも下級の事務員にして器械的に、併も細密の注意を要するものは追々婦人が男子を驅逐して之れに代はらんとしつゝあり、

蓋し婦人の職業の世に歡迎せらるゝは其の事務の成績の點よりも、給料の廉きと、男子に比して其の職務を粗末にせざるとに在り、されど我等は近着の西洋雜誌に於て『獨立心に富める某家の妻が諸方に職業を探し廻はり、種々運動したる末、漸く某所の事務員に住み込みたるに、其の事務員の椅子は前日まで自分の良人の占め居たるものなるを、給料の廉き競爭者に追ひ退けられて、免職となりたるものにして、競爭に勝ちたる給料の廉き者は即ち妻なりしと云ふ奇觀を呈し、其の夕、晩餐の卓上に夫妻相顧みて、其の日より一家の收入の減じたるを悲みたり』と云ふ諷刺的記事を見て、今更に婦人が男子の職業を奪ふの結果は、只賃銀の低下を致すと云ふことを感じたり、我等はこゝに婦人獨立の可否など云ふ陳腐の問題に就きて云はんと欲するものにあらざれども、近來我國にも此の諷刺的記事に似たるの傾向を生じ居らざるやを思ひ、獨立に熱慮して職業を求むる婦人方の參考までに一寸こんなことを記したるなり但し前に記したる各種の技藝即ち造花、編み物、乃至裁縫、ミシン等は格別男子の職業を奪ふこと無くして、婦人の爲めに職業を得べき便法ならんか、



料理及菓子製造の實驗

富田豊春

土筆の佃煮

土筆の穂ばかり（開きたるは駄目）醤油にて煮ると水氣が出る、其つゆをしたたみ、再び更に醤油を煮立て前の土筆を入れ煮つめ、助炭にかけて乾燥して、壜に詰めて貯へ置き、夏期に至り出し食すれば、めづらしくして、味尤もよろし、

鯛のおぼろ

鯛の皮を去り、正味ばかり薄くさしみの如く切りて茹で、引揚て冷水へ漬け、水中にてもみほごし、裏漉しに掛け、木綿布にて絞り、食鹽を少々入れ、水氣のなき樣に、能く煮上げ、壜詰又はブリキの罐に詰置けば、保貯請合なり、尤も寒製を良とす、

乾海苔の佃煮

これは一の廢物利用にて、乾海苔が變色して赤くなり、濕りてベトベトに成りたる時は、一度冷水に

したし、能くほごし、布に包みて絞り、醤油にて水氣のなき迄煮詰め、壜に入れ貯へ置くべし、色香とも原の如くなる、

茄子の芥子漬

普通漬物屋で販賣する、鹽漬茄子を適宜に切り、水に一日漬け鹽出をなし、引上げて絞り、水氣を去り、二日程干して麹五合、味淋二合、醤油猪口に一杯、右交せ合せ、四五日漬込み別に日本芥子を普通あく出しなし、ポンス（代々の生酢）にてゆるめ、前に漬置きたる、麹漬の茄子へ交せ合すべし、蓋のある器へ貯へ置けば二三ヶ月位は辛味存在する事請合、

牛乳茶碗むし

鶏肉のソップに鹽加減をなし、牛乳を等分に入れ、鶏肉、時期の野菜（現今なれば竹の子、みつば）秋期なれば松茸、くわゐ等何れも薄く切りて入れ、一碗に玉子一個、能くかきませてむすべし、注意簡易にするには、普通飯茶碗の大形の物へ調理し、土鍋にて湯煎にすべし、凡そ二十分間位で

出來る、

牛乳玉子むし

玉子の白味を平たき皿にてよく泡たゝせ、黄味を加へ、牛乳一合、白砂糖小量、レモン油小楊子の先へ付けて加へ、大形の咖啡碗に入れ、湯煎にすべし、滋養には最良品なり

ホイロプツク

最初、コンスターム、大匕に三匕・牛乳にて煉り置き、玉子三個、牛乳四カアド（凡六合）白砂糖適宜、食鹽少々、シヤム少々、淡白のチヤム良し、何れも良く煉りてのばし、鍋にて煮るべし、是にて出來上り、西洋皿に盛り、小匕を付けて客に出すべし、

但しコンスタームの代りに、葛粉又は山慈姑等代用するもよし、

めしのいろ〳〵（續）

◎菜めし　は、小松菜の莖を除き（眞葉が良し）極細かにたゝきて、白木綿の裂をすいのうに敷いて、其中へ入れ、熱湯を掛け、絞り、食鹽を少しく加へ、焚立の飯にまぜて食す（五十年前には觀櫻の時期菜飯にでんがく、王子飛鳥山山下料理店、亦淺草觀音前並木町邊の菜めし茶屋（料理店）に必ず鬻る、江戸名物の一なり、

◎拘杞めし　は、若芽を摘みて細かに叩き、以下前と同じ、併し田樂に添て食するにあらず、拘杞は根氣を増すと云ふ、則ち興奮劑なり、それ故昔は拘杞油は髮の毛の爲に良し抔と云ひしもの、

◎蓮めし　蓮の卷葉を細かに叩き、以下前と同じ是は香氣を貴ぶ、風流人韻士の嗜好するもの、

◎五もくめし　地方により製造を異にす、東京普通の製方は、飯は普通水加減少々こわき方よろし、味淋を少し加へれば上等、ぐは蓮、椎茸、干瓢、にんじん、靑味等にて、靑味は現今なれば三ツ葉、地方により魚類、或は油揚を入れるもあり、五もくすしと違ひ、淡白の方を良しとす、

◎烏賊めし（甲）　新鮮の烏賊、或はするめにて

もよし、頭足を除き、正味の處を細く切りて、味淋、醬油、等分に割り、三時間程漬け置き、米と交ぜ、尚水を入れ、水加減して焚く、是にて出來る、

◎同（乙）　烏賊の胴の中を能く洗ひ、糯米を詰め六分目入れ、口を麻糸にて縫ひ、鍋に入れてゆで、中の米が膨脹したら引揚げて、水氣を取り、更に味淋、醬油、砂糖を適宜に加減して煮るべし、冷めたる時庖丁す、但し最初縫ひ方がわるいと、中の飯に色が附着するから、注意を要す、

思付きたること

齋藤好糸

フランチルの洗ひ方

この月は、フランチルの着用さるゝ季節であるから、その汚れたるものゝ洗ひ方を述べやう、先づ誰でも沸騰した湯の中へ入れて振つたならば、垢の落がよかるべく思ふであらうが、それはいけない、丁度手を入れられる位の加減になして、手でそろ〳〵と揉むべしである、洗濯板でゴシ〳〵やることや、強く揉むと品が縮まる、それから乾かすには、強い日光にあてること、熱火に近づけるなどもまた縮まるから、成べく朝早く日光の強くならないうちか、木蔭の風通りのよい場所で乾くやうにすべきである

また洗濯湯の中には、マルセーユ石鹼を入れ、泡立つまでよく攪拌し、更に水五升毎にアンモニヤ水一匙の割合で加へるのである、でこれで洗つた後は、水水洗ひをして、よく石鹼分を取去るがよろしい、水洗ひが不十分であると、乾いてから硬ばるのである、それから水洗ひの後、手で絞るのも宜しくない、唯手で壓付けて水を切るがよろしい、また濕つて居るものを、長く其のまゝにしておくのも縮まることになる、尤も洗濯する前には、何れもブラシを以てよく塵埃を掃はねばならぬ、

い、しみの拔き方

すべて何のしみでも早く手を翳すべきもので、等

閑に過しては結果がよくない、汁の類のしみはよく汁を絞り、マルセーユ石鹼を毛楊枝にてつけて洗ひその上をよく水洗ひするのである、縮緬小紋類のしみは大分むつかしいが毛楊枝に水をつけて拔くのである、毛布セル類のしみは、洗ひて竿にかけると水の垂る丶通りに跡のつくものであるから、手早く水分を切つてしまひ、一度しみを除いたならば、布の端を持ちて何回となく振廻はす、斯くする時は、毛布はもと彈發力を有するが故に、水は散布して、漸次水分を無くすることが出來る、インキ等の附きたる塲合は、黑地よりも白地の方が却つて容易である最初其の個所に濕つた手拭を當て、熱き鏝をその下につけて、汚點の個所を輕く叩けば、石鹼は鏝の爲に熱せらる丶手拭の水と混合して、インキのしみを除去するのである。

魚肉の調理

魚類の調理はいろ〳〵ある、その仕方によつて旨くもなり、不味もなる、主婦はよく此點に注意せねばならぬ、魚類も獸肉同樣、滋養は蛋白質である、恰も鷄卵の白味と同じ質で、冷水にて溶けるが、高い熱度に逢へば凝固つてしまふ、であるから魚肉を冷水に浸して置くと、其滋養は全く水に溶けるから料理しても旨くはない、魚肉は鳥類獸肉ほど滋養にはならぬが味はよく、殊に白い魚肉は消化が早い、魚類を買ふには、腮が赤いか、眼が澄んで居るか、肉を指で押して、凹んだ處が直ぐ元へ返るかを吟味し、之に反對したのは腐敗して居る、魚類の滋養分を逃さぬやうにするには、海水と同じ位に鹽を交せた水をよく沸騰させて、その中へ入れるのである、さうして、五分ばかりして取上げると、それが悉く體中へしまつてしまふ、其のあとで好なやうに煮上げる、料理の中で一番旨いのは煮魚、燒魚、その次がフライであらう、俗諺には一生、二燒、捨てる程なら煮て食へ、といふともあるから、人々の好嫌で一樣には行かぬと見える、魚をフライにするには、十分濕氣を取り、麥粉をまぶせ、生卵を塗り、

それを麺白粉の中へころがし、煮立つた油の中へ入れ、煮上つた處で紙の上へ掬ひ出すのである、

季節の素人料理

店屋に注文すれば、手數かゝらずして、味も旨いには違ひないが、又自分の家で拵へるのも樂みの一なるのみならず、客にも其親切が屆いて宜しい、併し其材料と調理法とは、その時々で違ふが、今の季節であれば

△鰆のかけしたじ　鰆の切身へ一寸鹽をふりかけ、廿分ばかり置き、それより右の鹽を洗ひ、金串にさして燒き、これへ鰹節のだしを取り、味醂か砂糖を少し加へ、極さつぱりした汁をこしらへてかけ、尚藥味に、すり生姜を添へる、

△飛魚のセンバ鹽　飛魚の切身を一寸蒸し、是に鰹節のだしに椎茸を入れて茶碗にするのである、

△烏賊の木の芽和　烏賊をよき程に切り、生煮でない位にあげ、獨活を相手にし、味醂のだしにて味噌を煮、これに木の芽を少しまぜ、擂鉢にてよくすり、右の烏賊と獨活と一所に入れて和へる

△伊勢のむしり　三浦三崎本場の海老をザッと茹で、細かにむしり、これを山葵醬油にて食する、手輕で味なか〳〵美である、

△あいなめの醬油漬　品川灣にて取れるあいなめの二年子を二枚におろし、是を三十分ばかり醬油に漬け置き、燒いて食する時は、方頭魚も遠く及ばぬ味がある、

△松魚皮付蒲燒　鰹の皮へ身を少しつけて切り、焦げぬやうに燒き、別に醬油へ味醂を入れて煮つめ、靑唐辛子を絞つて汁を少しゝたしたるを、二三度つけて蒲燒とし、客に出す時に、靑竹の串を差かへて出すのである、



支那婦人の留學に就て

下田歌子氏談

内地の生徒ならば、委しく家庭の有様やなんぞを知ることが出來、從つて教育し監督して行く上に多大の便利がありますが、何しろ支那と日本といふ斯う隔つて居る地のことだから、その邊の便宜が缺けて居ます、一度間違つたら取返しの付かぬことだから、餘程嚴重にして、支那婦人留學生は殘らず寄宿舍に入れる、それに應ぜぬものは此方から絕謝ることにしてゐます、つまり此樣なことで、自然の選拔が出來てゐるのでもありませうが、兎に角此學校「女子工藝學校」に收容してあるものは、概して品行も成績も宜い方です、支那の教は嚴肅主義であるところから、必然支那婦人は屈從主義の意氣地なしであらうとは、誰も一寸思ふところでせうが、仲々そこどころではない、強い性質に富んで居る、決して女權な縮小されて居る樣なものではない。一般に怜悧で、物事に器用で、就中文學に於ては先天的とでも見らるゝ程に秀で、居ます、交際も巧で、氣轉はきく、人の氣色を察することは敏捷である、人の世話をするにも能く機先を制する樣に擧動ふ此等はその美點ですが、然し遺憾なことには、まだ日本人に競ぶれば全人格を支配して行く、牢乎たる武士道的精神といふ樣なものは無いのです。體格も丈は高く肉付きはよく、先づ立派な方であるが體育が欠けて居る故か見かけ程には頑丈ではなく、此點は日本婦人の方が優つて居りませう、纒足も此方へ來てからは殘らず止して居ます、まだ日が立ゝぬことでもあり步行は一寸可笑く見えます最も之は南部だけで北部は纒足をせない、蒙古からも三人來て居ますが此地方はさつぱり纒足の風習はありません、

昨年南部から速成師範科へ來て居たものは、德義の點に於ても、言行一致の點に於ても立派なもので學術なども好成績でありました、此樣な有樣ですから支那婦人の教育には七分望があること、思つて居ります、語學の力は色々で、彼方で覺えて來たものと、此方へ來て覺えるものとありますからそれ等の點や一般の學力の點やで、現在は級を三つに分けて置きます、速成師範科は通譯に支那人を雇ふて教授して居ります、今までは一ヶ年、月にすれば丸十二ヶ月を修業年限としたものですが、之を此度改正して、師範科を二ヶ年技藝科を二年としました、奉天から唯今來て居るのは三、四名ですが近々中に十八名來るつもり、更に南部からも參りますが、その人數は未だ分りません、此間雲南から參たのが二人あります、南部は重に湖北、湖南、安徽からで、身分は官吏、教育家、商人、農家と色々あります、年齡はさうです、昨年の速成師範には、三十八歲が最高齡で十八歲が一番年下でした

挿花の話

薪瓢庵宗水

生花は其人の氣象の顯はるゝものなり、故に相はかりに泥むべからず、草木の自然に因みて、氣象を生ずるを正意とす、五行各自然の徳有つて用をなす、中にも草木は天地の自然に任せて、花實時をたがへず、正直なるものなり、是を瓶に移して心志を顯し自己の得失を顧み、愼むを本意とする故に、有の儘を以て五行を兼備す、是を生花の本旨とするなり、生花は自己の心を顯すと、諸流のいふ所なり、心の邪正の自ら顯はるゝものなれば、客來などの時は、自ら心を花に顯して、隔心なき事を示し、賓主の禮を盡すものなり、都て生花は正直なる草木を心の友として、樂む如く心得て、必ず自他を論ずること勿れ、

座敷の生花を見物するには、扇をぬきておき、いかにも靜かに歩みより、一間程へだてゝ兩手を付て見るべし、近く寄て見る時は、疊をへだてゝ靜かに見るべし、三瓶あれば中位を見、その後客位を見、さて主位にて見をさむるなり、花入のそば近くより、水際を覗き、花の後へ首を回して見るべからず、又立ながら見るべからず、尤も不禮なり、床の前足音あらく、立居騒がしからぬやう心掛ること、肝要と心得べきものなり、

書院座敷の生花は、花の姿も少しは風情ありてよし、當時の如く、無理なることをなすべからず、其無理と云ふは、水草に岡に生ひ立ものをあしらひ、水仙の葉の直なるに、竹串或は針金を入て葉を狂はせ、杜若の葉の三枚も四枚も重りたるを、一枚宛に引はなし、小刀の胸にてしごき狂はせ、一枚づゝに己れが心の趣きを入るごときを、無理といふべきなり、又大書院廣座敷、五十疊も廣き處にて、立花又砂物を略して、輕く生花心に花を生る時は、櫻萬年青に限らず、松竹の葉南天梅もどき、紅葉の類をも生べし、此時は立花の心もなければ、花のすはりよ

からず、體用の心得専一なり、かやうの事は、日頃花も入れ、巧者の働きある處よりする業なり、聟嫁取の場合には、時節の目出度花を生てよし、散易き花は、最も用捨あるべきなり、直なる枝を撓め、曲ることは嫌ふなり、殊に殘花紅葉の類、歸り花、山梔、木槿、芦、薄、蔓珠、罌粟、芙蓉、未枯の物、雑花これ等の花は尤も忌むべきなり、生花の名目を固守して、いつとても時候をたがへず、古人の文徳ある人々、詩歌にも詠じ、賞翫ある花を一入に生て、見處ある木の實、花なき葉ばかり其外目馴ぬ花時ならぬ花は生べからず、いやしきことなり、



その他生花に嫌ふべき條々は、△一花一葉の事 △四花四葉の事 △六花六葉の事 △三花四木の事 △一草一木の事 △四草四木の事、△輪の大きなる花を短く入る事、△花のある葉ばかりを入る事 △葉のある花ばかりを入る事 △後より前へ廻る枝の事 △前よりうしろへまわる枝の事 △壁指の枝とてうしろへ長く出る事、△花と其葉と添たる間へ外の花を入る事、△花入の口を切る事、但し口より下る枝なり、併したれたるものは苦しからず △前長の枝とて、前へ長く出る事

△剃刀葉の事　△天蓋花の事　△友切れの事　△十文字切の事

三花とは三色の花の事なり、たとへば赤き花、白き花、黄花と三色を生ることを、嫌ふといふ事なり花三色も悪きなり、

花のある葉ばかりとは、花のあるものを葉ばかり生る事を嫌ふ、葉ばかり生る時は、何ぞ似よりたる花を取合せて、生る事と知るべきなり、

葉ある花ばかりとは、花はありて其葉なし、花ばかりを生るを嫌ふ事なり、花のある葉ばかり生るときは、花を取合せて生るなり、たとへば杜若の花ありて、葉なき時は、蝴蝶草の葉をかりて、生るといふ意味なり、

口より下る枝といふは、花器の口より下へさがる枝の事なり、花生の丈に下るは苦しからず、只花の丈より下へさがる事を嫌ふなり、併し枝垂ものは苦しからず、

天蓋花といふは花の下へ向たるをいふなり、

一花一葉、四花四葉、六花六葉、三花四木、一草一木、四草四木、十字字見切の枝葉くらべ、壁へ指枝花の後へ向花、正面へ鏡のやうに向ふ事、花を葉にて隠す事、天井又は壁などへ、枝葉の障る事、花と葉花と枝、又葉ばかりを生る事、草木とも一本を生る事、二花に二枝、四本に六本、香あしき花、毒のある花、はなの根を糸にて結ぶこと、廣口の花生などへ、石こづめなどする事、夜の花に黄色なるもの、すべて實の類を生ず、掛物などの讃、人物禽獣ともに影の隠れぬやうにすべし、墨跡讃人の落款等是も花にて隠れぬやうにすべし、又掛物にある花を生ず、其庭にある花を生ず、釣花生釣舟釣瓶の縄、籠の口手踊の手などへ、枝葉の障らぬやうに、又見切になる事、右何れも嫌ふべき事なり、但し水仙は葉重る事苦しからず葉も四枚になる事、出生なれば苦しからず、椿杜若は一花一葉の便あり。花桶の手は枝葉にて切る事。手の下二寸程は通り迄は切れても苦しからず、

園藝のはなし

◎園藝の秘訣　は申す迄もなく天に須ひて力を致すにあるので、天に戻れば如何に人力を竭すも到底充分の結果を見ることが出來ません、昨今は丁度春の央で草花木竹の培養に手を下すべき時なのです、時期を失しては悔ゆるとも是非がないでせう、今の間に聊かの手數を掛けて置けば日ならずして、可憐な嫩葉を出し追つては美麗な花卉や見事な子實を結び、最初の手數に對する幾層倍の報酬を捧げて呉れるのです、兎に角園藝と云ふものは此上もなく優美で、高尙な樂しみでありますから、澤山の庭園を持たるゝ方は申すも更なりたとへ掌許りの明地でもあれば、此際是非とも之を試むるが宜敷い、

◎草花の培養　は園藝の手始めと申す位、遣方次第では加何樣にも出來ます、その上に草花は他の木竹抔に比べると結果を見ることが早い、故に今は取敢ず草花の培養に就て二三の御話を試みませう、さて其播種は春秋の彼岸前後が丁度好い季節なので、春蒔の時は餘り早くすると寒氣や霜雪の害を受ける虞もあるから素人方が簡單に遣られるには何れかと申せば少々遲目に蒔き附けるのが安全です、つまり四月上旬が好く中旬になつても支障はありません

◎土地と苗床　と云ふと如何にも面倒な樣ですが、早く申せば濕地でない限り、大抵の土壤なれば宜敷い、併し能ふべくんば日當りの充分な南向の場所で土地の能く肥たのを選ぶべきです、種子を下すべき苗床は東西に長く巾を三尺位とする、これは灌水や除草などに便宜の爲でありよす、其土地は深く耕し之に堆肥を敷き込み四五寸位高くし其周圍へ瓦などを用ひて枠を立て、雨の爲に土の流さるゝのを防ぐ樣にした上、表土を一寸許り篩で成るべく細に篩ひ更に溝泥を乾したもの又は塵挨溜の土の腐敗したものと細かい砂を等分に混ぜて五六分位の厚さに篩ひかけ、表面を平坦にし輕く壓し付けるのです、

◎種子の播き方　も亦差して面倒なことはありません、前に申した苗床が出來上つた所へ播けば宜いのですが、種子の大小に應じて被土を加減しなくてはなりませぬ、大粒なのには細砂を三四分の厚さに篩ひかけ、極小さなものは單に板で輕く押へ、種子が土中に埋まる位とし、藁を三四分に刻み、或は乾いた馬糞の揉んだのを其上に被ひ置くのです、これは濕氣を保たせ且降雨や灌水に際して、種子の洗流さるゝを防ぐ必要から致すもので、苗床が乾き過ぎる時は如露を用ひて灌水しなければなりませぬ、

◎移植床と移植法　も亦別にむづかしいことはなく、床は大體苗床と同樣の作り方で宜しい、苗床で一二寸位に育つたものを[illegible]に移

植して培養するのですが、簡單に遣るには必ずしも別に之を設けず苗床の儘で適宜に間引をする許で支障はありませぬ、さて移植の際は午後又は曇天の折を選ぶのです、草花は根付きが早い代り枯るのも速いから苗床に充分の水を注ぎ置き鬚根が能く土壌を抱留する樣に掘り上る事が肝要、移植の距離は草花の種類によりて一樣に參りませんが密植すると空氣の流通が惡くなつて天候不須の際に蟲や黴の害に罹り易いことを忘れてはなりませぬ、

◎培養と肥料　にも亦大した心配を要しないのです、先づ移植後一週間以内は灌水を怠らない樣にし十日目位から時々稀薄の水肥を與へる、水肥中で人糞尿は最も手數が掛らず最も早く効能があるけれど、座敷に近い場所抔どは不潔だから、此場合には是非共他の肥料を用ひなければなりません、それには油滓又は鰊粕を細末にしたもの一合を水一升の割合に溶かし腐熟させた上で與へるのが宜敷い、但し花の艶美と莖の强壯を剳くる爲に燐酸肥料を補肥とすれば一層結構です、又花容を豐大にしやうとするには枝を節し且蕾をも節するのが肝要です、

◎外國の草花と日本の　とは自ら工合が違ひます、元來我國にも相當に澤山の草花がありますが近來外國から陸續輸入されて、今では數も限りもない程となつて居ります、併し日本人と外國人とは其趣味が一樣でありませんから、西洋で非常に珍重さるゝ花も日本では指して評判されないことがあり、或は日本へ輸入してから數年も經つ間に追々種類が變つて參り、又は一種の混合種の樣な花卉が出來る抔のこともあります、其上彼我氣候風土の相違からして最初は香氣馥郁として甚だ愛すべきものであつた、花卉も土地が變ると一向香氣を放たなくなるとか、それが薄くなつてしまふ樣なのもあります、兎に角外國輸入の花卉は多くは我國で培養を續くる間に色も香も順次變化するのが普通と申して善い位、併し斯く變化するのも草花を培養する人に取りては却つて趣味の多きを感じさせるものです、

◎草花の種子　は何れの種苗店にもあります、其種類は前にも申した通り幾百千の多きに上り到底之を列擧する譯には參りませぬが、種子を購求さるゝには確實にして信用ある店舗に依賴するに限るのです、近頃園藝の流行に連れて到る所に不正奸商が出來、如何はしい目錄などを發行して暴利を貪るものがあります、此等の商人は怪し氣な種子を販賣して平氣なもの、若し栽培の結果豫期に反したものが出來た爲に之を詰責すると、變化は花卉の特質とか培養の巧拙に由るとか申し、咎を左右に託して其責を免れやうとするのです、種子の確否は園藝上最も大切ですから此邊に注意することを忘れてはなりません(松亭)



人種と教育

理學博士　坪井正五郎

今諸人種に亘つて教育の事を話さうと思ふが、廣い世界の事であるから、僅かの時間では決してその要を盡せるものではない、併し今上野の博覧會内に十枚か十五枚の畫で、世界周遊館など、云ふものが出來て居る、十枚や十五枚で世界を周遊もすさまじいが、それと同じくジオラマ風に、其處此處の人種を抜出して見やう、

日本も段々世界の日本と云ふとになり、廣く世界の事を知らねばならぬやうになつた、そこで歴史も地理も、極程度の低い所から授けられて居るが、人類の事は、その初歩をも窺ふことが出來ぬ、實に人類の事に就ては無頓着であるが、日本のうちでも北海道のアイヌ、千島、新に樺太、小笠原島、臺灣の生番など、隨分變つた人類がある、昔は日本に唐、天竺位を世界と思うて居り、今でも多くは日本に歐羅巴と亞米利加を加へて世界と思うて、その他の國は眼中に置いて居ない、教育の事でも、開化の國はもとより、半開の國でも多少教育は施されて居るが、野蠻の國では教育はないものと賤んで、一向それを調べずに居るから、世間に知られずに居るが、實際その土地々々に就て調べて見ると、野蠻國もそれ相當に教育をして居る、無教育なれば、社會に生存することは出來ない譯である、そこで開化の國の事は誰でも知つて居るから、未開國の事のみを述べやう、

日本でも本州の事は云ふに及ばないが、臺灣も北

のアタイヤルは男子に髭がない、さうかと思ふと北海道のアイヌには鬚が多い、同じ日本でありながら、人種として珍らしく變つて居るのみでなく、風俗習慣も大に異つて居る、臺灣のアタイヤルは殺伐の氣風があつて、人の首を斬つて、勇氣のあるとを誇つて居る、何の爲に人の首を斬る、憎いからかと云ふとさうでない、首を多く斬つた者ほど、社會から重んせられるから、勢ひ首を多く斬らねばならぬ事になる、併し首ばかり斬つても食ふことが出來ないから、農事の忙がしい時には、どんなによい首があつても顧みない、暇になると出掛る、そこに一つの迷信があつて、鳥の泣聲、獣の走りやうで、人を斬ることを定める、惡い所で出逢はしたものこそ災難、もし本州であれば人を斬れば憎まれて、死刑にもなるが、蕃人の社會では、その亂暴なのが社會を維持するに必要であつて、男の子を育てるには、まづ首を斬る稽古をさせる、人の代りに芋の葉でも斬落して、意氣揚々として歸つてくると、留守番は之

を歡迎する、そんな事が教育の一つになつて居る、婦人は何うかと云ふと、一種の布を織る、料理をする、家に居つてする仕事を擔任して居る、いきなり物を噛んで食ふ譯でもない、

それから西南に移り比律賓地方、殊に馬來地方では、夫を定める時に、婦人の方で撰擇するのであるが、矢張多く人を斬つて、首を多く持つて居るものを望み、臆病で人を殺すことを知らぬものゝ跡は殘らないやうなことになつて居る、ジヤワ、ボルネヲの人も同じで、それが社會を繁昌させる策になつて居る、

段々西の方亞細亞大陸から、亞弗利加のサワラを世界として、北に向ふと人種は歐羅巴で、髮の毛はうねつて鼻は高く髭は多い、所が亞弗利加の中央のや、西へ入らんとして居るダホメと云ふ國があるがこの國では女子が兵隊になつて、男子は家庭に働く、もしこゝに高等女學校の如きものがあれば、この生徒は兵役の義務を免除されるかもしれないが、心掛

のない女子は、皆兵士になる稽古をし、今では鐵砲も、不完全ながら大砲も出來て居る、而して女子は專ら武張つた精神を修養して居る、こゝも人を殺すことは一向差支ない、のみならず、天窓のぐるりを切つて、髪を切上げると、苗代の如きものが出來る、その株を身體又は座敷の飾りとして、その株の多少が家門の名譽に關係するのである、

太西洋を越えて合衆國に行くと、また舊來の亞米利加インデアンが多く殘つて居る、それから北の方のダコタの種族になると、大分變つて居る、こゝでは男子が一人前になるには、村の協議を經て、一定の試驗がある、



その試驗には兎ても我々は及第することが出來ないそれは鳥居へ繩を吊し、一方に候補者の首の脊の方へ横に棒を刺し、その棒の兩端に繩を結び、一方にてそれを引上げる、その上バイソンといふ牛の頭を二つ足にくゝりつけてあるからたまらない、生きた人の首へ穴を明け、棒を通すさへ殘酷であるに、それへ繩をつけて引上げたり卸したりするのであるから、昔の刑罰でも容易ならぬ惡人にでなければ施すべき事ではないに、たゞ一人前の人と認められる丈の試驗として、而もこれが豫備試驗である、これに悲鳴を揚げるやうでは到底物に

ならぬ、さて本試驗はと云ふと、幾度も豫備試驗で吊上られ吊下げられして投出された所を、二人の試驗員が幾度もぐる／＼引張り廻し、その揚句ニッコリ笑つたものが及第となり、それに落第したものは、いつも小供扱をされて居る、この亂暴なる野蠻にも、それ／＼自衞上の敎育があり、婦人は料理をすること、衣類をつくることもして居るから、簡單ながらも、技藝の敎育があるのである、又これらの夫に仕へて、それ相當の心配がある、

墺地利に行くと、海岸には歐羅巴の人が住んで居るが、奧深く這入ると、クヰンスランド土人が住つて居る、この野蠻さ加減は南米の南端テラデルヒユーゴの土人と一對で、衣類などもなく、犬猫のごとく生れたまゝで、住居も木の根などに、宛で鳥の巣の如く、すべて自然の供給に任せて居る有樣であるそれでも一種の敎育はあつて、この土人の仲間に一人前と認められるには試驗がある、文明國では重寶な曆と云ふものがあるから、三年寢てゐても、自分

の年がいくつになつたかゞ解るが、そんな器用なものはもとよりないのであるから、大人には實力でなられる、實力と云ふのは、第一强情我慢の强いことで、その試驗の有樣を云へば、男の髭を一本づゝ拔く、日本でも毛拔などで根氣よく拔いて居る人もあるが、その樣な手ぬるいものではなく、不完全な道具でゴシ／＼拔く、それから石を手に握らせ、その手をたゝく、くすぐる、それでも放さないのでなければならぬ、次に或る時間無言で居らねばならぬのを、何うにか云はせやうとするのを我慢する等で、うつかり手の石を放したり、物を言はうものならすぐ落第である、そして及第したものには、紙墨がないから證書を渡す譯にも行かない、そこで胸にガリ／＼と徽章をつける、その疵が飾りになる、尋常に疵をつけた位では、色の黑い所へ目立たず、またすぐに消える、それでは折角の及第が何にもならぬから、ガリ／＼かいて蚯蚓腫れになつた所へ、泥をすりつけ、蟻にすはせ、盲目が探つても解るやうにして置

く、かゝる野蠻の種族でも、物を撰ぶ、又物が居ながら取れる譯でもないから、それ相當に教育がある、教育と云ふものは、開明國の獨占のやうに思ふて居るが、事柄は違うても、主義は種族の社會を進めその主義に向つて奬勵するといふに違ひはない、又體質から云つて、尾がないから人間であるといへば、尾のない猿もあり、毛の關係から云へば、北海道のアイヌは兎や豚よりは毛が多い、尾や毛で人間らしいと安心することは出來ぬ、他の動物はやけどをして始めて火の熱いこと、溺れて水の冷たいことが解る、人はそれを教へても解る、故に幾千年の經驗を三十分位に會得することが出來るが、他の動物は自分の經驗より外の事は解らぬ、野蠻人はそれに近い所もあるが、社會の供給に應じて、教育して居る事は同じである（文責在記者）



社會教育の一資料

鈴木其星

予は家庭の讀物の材料を得るが爲に、極やさしき二三のフエーリー、テールスや、佛文のフアブルなどを集めて、その中から面白さうなものを、予が獨特なる例の半譯を試みやうとせしが、フエーリー、テールスは、其名の示す如く、妖怪を以て主題として居ることゝて、何れも妖怪の話ならざるはなく、佛蘭西のフアブルもラフオンテンや、フロリアンは彼の有名なる伊蘇普物語などゝ同樣、極めて無邪氣な話で滿たされて居るも、其文體が韻文であるを以て、正直のところ、今日の予の力では少しこなしきれぬ所がある故、予は專らフエヌロンのフアブルを唯一の材料とし居れども、少し長くて面白きものは、大抵フエーとなん呼べる妖怪を重なる役者として使つて居るを以て、宗教文壇より、青年少女の讀物として供給するには、如何なものかと多少躊躇の氣味

合なきにあらず、否大に當惑しつゝあるは事實なり、されど退いて考ふれば、如何なる國にも、此種の妖怪談のなきはなく、歴史に小說に、口碑に、演劇に、妖怪を主題とせしもの頗る多く、巖谷小波子の編輯に成る世界お伽噺も、其中より妖怪を退治して仕舞つたら、殘る所は果して幾何なるべきか、要は取材の妖怪が讀者の神經を刺戟すること極めて輕く、靑年少女をして、この抑ゆべきを知つて、畏るべきを知らざらしむる程度を以てする時は、話の事柄を面白く、可笑く、多少不自然の事あるも、妖怪のすることゝ、別段氣に留めざるべく、普通の人間の出來ざる事も、何の雜作もなく遣れるの便あれば、お伽噺の役者としては、最も適當なるものなるべし、もしこれを宗教の文壇には不適當なり、信者が家庭の讀物としては不可なり、怪力亂神にまぎらはしきことは、靑年少女の眼に觸れしむべからずと、例のピーリタン思想を以て排斥する人も、多くの讀者の中にはあらんかなれども、既に訪問には澤山の書物も

あり、鄕黨の中にも樣々の傳說もあり、これを覩、これを聞く事に馴れたる彼等靑年少女の胸底には、却つて恐ろしき幽靈、化物、所謂魑魅魍魎の蠢々然たるを如何にせんや、これをこれ察せず、無邪氣なる妖怪談、特に頗る美化されたる西洋種のそれ迄、只管彼等の見るを恐れ、聞くを憚る人は、取も直さず耳を掩へて鈴を盜むの利口連ならまくのみ、

假に百步を讓りて恐怖すべき妖怪談、戰慄すべき幽靈談も之が說明の方法さへ宜しきを得れば、却つて智識開發の好資料とならざる筈なし、例へば羅生門の鬼の噺も、北條高時の天狗の噺も、これを借りて當時の社會心理の一般を說き、綱の勇武、高時の驕奢を褒貶して聞かしむべく、其他桃太郎、かち〳〵山、猿蟹合戰、舌切雀の話の如きも、多少新思想を加味して、成るべく今日の時代精神を以て解釋して聞かしむべく、桃太郎は以て無人島の探險に擬へ、かち〳〵山、猿蟹合戰の如きも惡の爲すべからず、義の尊ぶべく、若し此等動物の性質習慣等を知らし

むべく、舌切雀は改過遷善の好模範として聞かしむべく、成べくんば其結末の重い葛籠の中から、三ツ眼入道や一目小僧の出る所を改め、其葛籠には、結構なる寶物を入れて雀の好意を表し、惡に酬ゆるに美を以てし、流石の惡婆も我慢の角を折つて、既往の非行を改むることゝなさば、更に面白かるべし、

兎に角これ迄我邦に行はれて居る妖怪談も、成るべく新時代の精神に叶ふ樣に書替へ、話しかへると同時に、西洋諸國にあるフエーリー、テールスの如き無邪氣なるものを翻譯し、妖怪に對する恐怖心を取去る事を圖るは、社會教育の上に少からぬ效果を收むるものと謂ふべし、予は頃日新渡部博士の妖怪改良説を聞き、予が平素の持論に吻合するのみならず、又頗る啓發する所あり、左に其説を掲げて、同好の士に一讀を請ふことゝしたり、

何れの國にも妖怪の話は傳はつて居る、國民の氣風如何を知るには、其國の妖怪談を知るのが一法である、

快活を好む我民族の妖怪が幽靈的なのは、支那印度から輸入された隱鬱幽怪な思想に基いて、畫家が精密な思想に乏しい處から、一種畸形な物にして仕舞つたものと思はれる、

此畫家の想像畫が、日本のお化に恐怖の屬性を與へ、日本人の氣質に少からぬ感化を與へて、國民の發達を害して居る、

西洋のお化には、子供の友達となる樣な優しいのがあるが、日本には一つもさういふ優しいのはない、

西洋のお化は重に希臘から來たものらしい、其正體は矢張人間と同じやうに四肢を備へ、唯容貌擧動などが人間と違つて居る、

フエーリーと云ふのは、美を代表する化物で、森の中へ迷ひ込んだ子供に美しい花をくれたり、面白い歌を聞かしたりして子供を慰める、色の白いやさしいもの、またフオラニーといふのは滑稽を代表する色の黑い瓢輕な化物で、子供の前に滑稽な道化を演じて子供を喜ばすと云傳へられて居る、そこで西

洋の子供はお化を恐怖するやうなことはない、斯様な思想が段々發達すると、國民の冒險心を高め、殖民移住等を盛ならしむるやうになる、日本はと云ふと、森へ行くと天狗、河へ行くと河童が居る、天狗は人を引攫へ、河童は人の尻を拔く、其他一目小僧、大入道、鬼女又は比較的滑稽な酒買の豆狸でも、子供を恐怖せしむるものばかりで、子供の心は自ら萎縮して籠城退閉主義となり、其結果國力の發展を妨げる、お化の勢力もなか／＼侮ない、だから此日本の化物も段々改良を加へ、日本國民の固有性に近い、今少し快活なものにして、教育上に利用したならば、人文開發の上に稗益することが尠からぬと思ふ、

清國の二才媛

（共に數學が滿點）

今回實踐女學校の速成中學科を卒業せし清國人康同荷（十七）楊敬平（十八）の二嬢は、共に珍らしき才媛なるが、二嬢は去卅八年五月來朝し、同校に入學したり、同校の寄宿舍は日本支那の兩部に分れ、支那寄宿舍には現に三十餘名の支那人あれど、二嬢は總て日本風に教育されん志望なる爲、二年間日本寄宿舍に入り、日本服を着け、學校寄宿舍の掃除も他の日本人と同じく、日々不平も言はず行ひ居たり、康同荷は康有爲の姪にて、幼時香港に在り、歐人の許に宿し居りしかば、英語も出來交際も上手にて、性質は快活無邪氣なり、楊敬平は兩親今猶淸にて貿易商を營み居る爲日本語に巧なるが、性質は至つて溫順にて深窓の阿孃樣の如し、二嬢は數學が最も得意にて共に滿點にて卒業せり、二嬢に對し家庭的の世話をなせしは、日本部舍監時任竹子女史、學科の教師は修身が下田歌子女史、國語歴史地理が松本春子女史、數學理科が有村新六氏、水彩畫編物が田村糸子女史、唱歌が澤田孝一郎氏、體操が小野仙太郎氏、及び豐山千代子女史にて、此等の教師は二嬢の爲に親切に教授の勞を執り、一方が出來よくなりて、一方が劣る場合には、劣れる方に力を注ぐと云ふ方針なりしかば、二嬢の卒業成績は、全く優劣無きを得たり、又二嬢の體質は極めて健康にて、在學中一日も缺席無く、かの流行感冒の盛なりし際、校内に多數の患者を出だしゝにも拘はらず、二嬢は遂に罹らざりき、時任舍監の話に「二嬢は頭腦甚だ明晰にて成績頗る良好なり、支那の改良は婦人より起るものならんと思はる云々」と、今や二嬢は寄宿舍を退き叔父なる四谷區永住町二[illegible]の許へ行きしが、退舍の際に同窓の友と別を惜みて落涙せしは、優しき情の見えて可憐しかりき、

親戚の關係

橘　終　子

親戚は固より一家の爲に重んずべきものである、吾が尊敬すべき父祖兄弟の一つ幹より分たれたる枝其生液の循環するによりて、相助け、相守りつゝ、枝葉益々茂りて、花咲き果を結ぶ樂しき日を見るのであるから、之を疎略になすべきものではない。

併し一樣に親戚と云つても、其實色々である、兄弟ですら他人の始だといふ位であるから、况して親戚となれば段々緣が遠く、五代や六代も前に極近かつた親戚などは、モー全く他人同樣、否他人よりも劣つて居るのが澤山ある、木で云へば、己に連枝の枝ではなく、接木をして他へ往つてしまつた枝である、此の枝はもとあの木の枝であつたといへば、あゝ左樣であるかと思ふ丈で、殆ど初から根幹を異にして居る木と同樣になつてしまふ、

理窟よりいふも人情より云ふも、親戚は極大切である、然るに實際はさほど信賴するに足らないもののあるを見るのは甚慨かはしきことである、今左に親戚の行爲として、非難すべき條々を列記し、親戚として盡すべき義務、及び親戚に對して、如何にすべきかを說かんと思ふ、

* *

廣い世間には、强慾な親戚があつて、主人の死んだ枕上に集つて、愁傷らしい顏でもして居るかといへば、思ひの外で、遺產の爭ひ、形見分のいさかひなどして居るのもある、主人の生きて居つた時に、何故こんな親戚が近しくして居つたかと思へば、皆其財產のあるのに目をつけて、自分の益を謀らうとしたからである、

金持らしい親戚に慶び事でもあると、苦しい中から無理をしても、祝ひなどを持つて往くのは、大抵は小さい損をしても、大きい利が得られるであらふといふ目當のある爲である、

都合があつて荷物や衣服などを親戚に預けて置くと、いつの間にか減されたり、すつかり無くなつて

了つて、いくら談判をしても應ずるものでない、やたらに金を借りに來たり、家の迷惑を持ち込んで來たりしても、親戚だからと思つて大目に見て助けてやれば、益增長して、有難いとも何とも思はずあまりひどい時に少し意見がましい事をいつたり、願通りにしてやらぬと、モー反對に惡口讒謗をして其の家の害になる事をする樣になつて了ふ、

又薄情な親類になると、自分の家より少し貧乏らしいと思ふのは、なるべく寄せつけない樣にする、貧乏だからといつて金を借りに行くものとは限つては居らぬに、我利一方の自分の心から推し量つて、誰でも其樣であると邪推を廻すのと、又一つには貧乏らしい親類があると人に見られるのが厭だといふつまらない虛榮心から割出した考である、

事があつて往つても祿な待遇もせず、況して向ふから尋ねて來る事は皆無で、葬式などがあつてわざ〳〵送りに往つても、活版摺の葉書で禮を云つて來る位である、こんな親類などない方がよい、それでどこに親類の情義があるのかと腹だゝしくなる、

貧賤で輕蔑されて居つた蘇秦が、六國を說きつけて、王侯の富を得て歸つた時に、昆弟妻嫂が目を側てゝ仰ぎ視るものも無かつたといふのは、明に親戚の賴みにならぬ事をあらはして居る、決して蘇秦一人の事ではない、又支那ばかりの例ではない、人情の賴みにならぬ事は、どこの國でも同じで、こい樣な人が多いのは眞に嘆かはしい次第である、

然らば親戚なるものは如何にすべきであるか、良い加減にして置けばよいかといふに、決してさうではない、されど親戚は利害を以て交るものではない、貧賤を以て甲乙をつくるべきものではない、親戚間の情誼が自然に親密に、自然に圓滿にならねばならぬものである、互に厚情を以て交はれねばならぬものである、親戚などでは得べからざる深切を以て相交はらねばならぬものである、而して德義を以て相助けねばならぬものである、然るに世間如上の事多きは、この念の缺ける所あるからである、故に親戚

の事としては自分の事の樣に深く思ひ、たとひ親戚が金持であらうが貧乏であらうが、そんな事には頓着しないで、眞心から深く頼みあふやうにしたいものである、

然るに世間此情誼を捨て丶利害に趨り、それが親戚の交際よりして、却つて害を受け、折角自分のしやうと思うて居る事も掣肘されて、發展の出來ぬ樣な塲合が往々ある、殊に男親のない家などでは、何かにつけて親類をたよりに思ひ、善事と信ずることも、其同意がなければ出來ぬやうなのがあるのは、誠に不自由な次第である、

例へば娘を學校に入れるにつけても、當人が習ひたいといふものを、親族で彼是いつて止めにさせ、望みもしない學校にむりに入れて、つまらぬ人間にしてしまふ事もある、折角よい縁談があつて、當人が非常に望んで居るのを親戚に相談すると、色々干渉をして止めさせ、望みもしない人に世話をして生涯不愉快な生活をさせる事もある、斯の如くに親戚の勢力が跋扈するのは、あまり有難からぬことである自家の事を親戚の命のまゝに從うて居るのは、危險千萬な話である、

それ故人は常に獨立の精神を養うて、其生涯を人の干渉によらず、自由に送れる樣に幼少の時から習慣をつけ、且それ丈の智識を養成せねばならぬ、個人は他の保護を離れて、必自ら司るべきものである、一家は親戚の干渉を脱して、必ず自ら經營すべきもの、國は他國の助勢を辭して必自立すべきものである、勿論德義を以て相助け、相守る事は必要であるけれども、自分の事を自分で處るほど丁寧親切に處つてくれる親戚は決してないと思うて、其獨立心を堅くしなければならぬ、さうでないと、必他の輕侮を免れず、益々人々自由にせられ、いつになつても自ら己れを司る事が出來ず、親戚の言に支配されて事をしなければならぬ不都合の身の上となるのである、これ皆自分の招く咎で、仕方がないとは云ひながらも、實に憫むべきものである、然ら

ばどうして此の煩はしい關係を脱する事が出來るかといへば、女子の獨立心を堅固にすればよいのである、

多く親戚の干渉を受ける家庭は、必男子のない家、殊に主人のない寡婦ぐらしの家である、今また良人にのみ依賴して安心して居つた妻が、急に夫に死別れ、子供は皆小さいが、それを連れて他へ嫁に行くわけにもゆかないといふ場合には、必親戚にたよつて萬事を任せ、其言通りに世話になつて世を送るのである、誠に止むを得ない事で、自分で自分を司る事も出來ない人には自分の智惠で一家を經營せよとは云はれぬ次第であるけれども、若し其寡婦に今少し自重心があつたならば、決して自分の意見を蹂躙されるやうな事がなく、永く親戚の煩しい干渉を離れて其理想を追うて世を渡る事も出來、從つて子供の成長後も其望を多少行はせる事が出來るのであるけれども惜しい事にはそれ丈の意氣地のない爲に、遂に全く自分の家を經營する能力を失うてしまふのである、

けれども世間には母親の手で立派に一家を經營して居る人がある、金持の家なら勿論出來る筈であるが、中流以下にも此の例が澤山あつて、誰の世話も受けず、生氣凛々として働き、一家揃つて面白さうに見える家があるを以て見れば、婦人の手を以て、親戚の干渉を受けずに其家を成立させる事は、絕對に出來ぬ筈はない、之を其自分相應に立派に仕上げる人は即良妻賢母である、夫のある時ばかり良妻で、夫が死んだあとは其家を親戚の干渉によらずに經營して、其子女の爲めに他日發展の路を開くことの出來るやうに仕上げる人でなければならない、併しわなりに人言を斥けて、何でも自分の思ふ樣にばかりふるまふのは、女子の天性たる優しい所を失ふて自然人から惡まれて、相手にされぬ樣になつてしまふ、これでは折角自分の家ばかり人の世話にならずに獨立が出來ても淋しい世渡りをせねばならぬ、それではあまり偏狹で、親戚に對する義務を缺いで

居るから、其諧和を取てゆくのが六ケしいのである、

要する所は、自分の事は自分が司り、自家の事は自家で經營するといふ精神を失はぬ様にして、謀るべき事があれば親戚中の最も確實な人を擇んで、相談する丈けに留り、其取捨の權は自分で持つて居るべきである、即内政に一々煩はしい干渉をされぬ様に注意をしながら、或程度までは親戚の言をも容れて、重んずべき人はどこまでも尊敬し、保護すべき人は精神的に之を助け、利慾と傲慢とを離れて、眞誠の愛と親切を旨として、圓滿な交をつゞける事が出來たならば、煩はしき關係は無くて、眞に美くしい、樂しい世を送る事が出來るであらう、

尙侯の二令嬢と遊學婦人

尙侯爵の二令嬢、幷に今度始めて上京せる二名の婦人等の感想を聞くに、政子八重子の二嬢は、當主尙典侯の令妹にて、東京の邸に於て生れ、富士見小學校に通ひ居りしも姉妹が九、十歳の頃父君の薨去と共に其の遺骸を侍して郷里沖縄の邸に歸り、爾來同地に在りて、高等女學校に通ひ、互に競爭の學事に勵み合ひ居りしに、今度更に上京して勉學すること〻なりしにて、一旦東京女子高等師範附屬の高等女學校の入學試驗に應ぜしが、政子孃は此頃來眼病の爲め遂にその所志を遂ぐる能はず、目下河本博士の許に通ひて療養中にして、今回入學せしは八重子孃のみなりと、尙侯爵には毎年議會中は上京し居れども、常に多くは琉球に住し、富士見町の邸宅は、その令息達のみにて、長子は今度學習院小學を卒へ、續いて同中學校に進級し、次、三男皆それ〲修學中なり、今度來京の二孃の令姉も亦同邸に在り、二令孃の室にはピヤノあり、ピンポンあり、床には草書の一軸を掛け、姿見の鏡は心の色も見え透くばかり玲瓏と照り渡りぬ、玻璃戶を越して打向ふ南面の庭には數株丈低き椿の丹花こぼるゝばかりに咲き揃ひ、遅れて匂ふ薄紅梅の花瓣のひら〱と風に誘はるゝも風情あり、二孃は何れも姉妹とも別ち難く、やがて咲き出でん蕾の年頃なるが上に、やさしく淸かなる面には、自づから其有てる氣質も表はれ服裝は振長き飛白の着物羽織に海老茶の袴と云ふ、最も質素に粧はれしお裝にて、淑かに會釋し、にこやかに應答せらるゝ態は、流石に氣品高く、久しく都放れし遠き島住に起臥せられしとも見えざりき、二孃が代る〲徐かに語らるゝ處を聞くに、彼地に於ても教育の途は日を逐ふて發達し、現今にては小學校の外に尋常師範中學校高等女學校等ありて內地のものと異る者なく、目下三百名の生徒あり、教師は毎に生徒を戒めて、歸宅後と雖も琉球の服裝を爲すを禁じ、言語動作等も努めて國訛を改む可じ

と訓へらるゝより、従つて女學生のみならず、一般に古來の國風は漸次其影を減じ、女學生の束髪も海老茶の袴を穿つことも、東京の風と少しも變る處なしと、季候は三月二日彼の地出發の折、早く既に庭前に櫻花の匂へるを見たりとのこと故、今日今頃の陽氣は推して知らるべし、同邸内に住居せる米須トシ子、屋嘉マカド子の二令孃は八百里の長き旅を初めての上京のことなれば、胸に往き復ふ感も深く、自ら其風姿も鄙びて見ゆる節あらんと思ひきや、言語擧作靜かにて卑しからず、而かも愛嬌ありて、生意氣なる風なきは、偏に教育普及の賜と云ふべきか、着京以來の感は如何に、市内は何れをか見物せられしやと問ひし答は左の如し

雪の朝

屋嘉孃　郷里の國を出ます時は、東京は寒いから綿入を澤山造つて行けと申されて居りましたが、參つて見れば案外暖かで想つた程ではないと思つて居りましたら、着くと五六日して朝起きて戸を開けましたら、雪が白く積つて居りましたので、眞個に驚きました、

米須孃　大抵の事は國で想像をして來たと、爾う變つたことは御座いませぬが、雪だけは想像の外でした、

淺草と電車

米須孃　一度淺草へ參りました、電車は如何にも珍らしく見ました須田町邊の混雜には是れ〱驚きました、

屋嘉孃　それから仲見世の雜沓も、大へんで御座ました、けれども大抵は先生から伺つて居りましたからさう強くは感じません、

兩孃共入學すべき學校は未定なりと、

支那の婦人

大橋露子

支那婦人はまことに應接が巧で、人をそらさぬもてなしぶりは、實に感心なものであるが、何分時間の觀念とか、衞生思想とか云ふことが發達して居ないから、訪問しても、されましても、實に閉口することが多い、併し其間に面白味もある、

食事に招かれたとが二三度あつたが、大抵晩餐で、四時五時の案内である、何時も時間を計つて出かけ、正時間に先方に着す、まづ案内されて内に入り、奥の間の入口に參ると、案内者が大聲をあげて、來客のありし旨を通ずる、すると奥から妻君やら、娘やら召使の者などがぞろ〱迎ひに參る、時々に其入口に内から鍵のかゝつて居ることもある、これは多少上流の部に入る方で、普通の家庭では、これ程のことはない、奥にはいつて主客席が定まると、第一に紅茶を酌んで出る、そして西瓜の種子の熬つたの

や、其外支那の菓子を卓上一面に並べて、むやみに手摑で卓上にぢかに置てくれる、少々埃があつても一向無頓着のものである、寒さの時であると、小さな手爐及び足爐を持つてくる。支那は實に節儉の國柄であるから、冬季でも日本のやうに櫻炭のカン〜して居る火鉢もなければ、煖爐もない、西瓜の種子を喫み碎きながら話して居るうちに、漸々客が集つて來る、支那の食事の致し方は日本とは異うて、一つの卓上のものを、皆で一緒に食べるのであるから、人數の揃はない内は始めない、待つこと二三時間の後、愈々揃ふと食卓につくが、今度は席の讓りあひ



が一通りではない、少くとも十分や十五分の時間を費す、元來支那人は冷えたものを食べないから、御馳走はだん〜後から〜煖かいものを持つて來る、そして全く終る迄には又二三時間を費す、經驗のない人には解らないであらうが、皆自分の用ひた箸や匙で御馳走を取つてくれるには、少々閉口せざるを得ない、それから支那の婦人は飲めないと云うても猪口に五杯や十杯のお酒を飲まない人はない、私には此交際ばかりは出來ないから、何時も斷つて仲間のけにして貰ふ、かう云ふ風で歸りは大抵十時頃になるが、實にゆう〜した

ものである。

日本なれば何か手土産を持つて參る處に、彼方では大抵品物は持つて行かないで御馳走になつて、歸りがけに子供のある家ならば、子供へとして二三弗、婢僕へ一二弗位を紅紙に包み置てかへる、又召使等には二三十仙の包を各々一つづゝ與へることもある、金額は上下により差異はあらうが、右は普通の處である、尤もこれは正月は最も多いのであるが、平素一寸御茶に招かれても、必ず召使へとして三四十仙は置いてかへる、客の供へは主人より同額位を與へる、支那の婢僕は實に僅の給金でつとめて居るが、來客の折又他に使ひに參つた時に、殊に年首年末に於て多額の金錢を貰ふから、これが隨分大いものであらうと思ふ、

支那婦人のことはこれまで人から聞いて種々な想像を描いて居たが、實際參つて見ると、聞いたことゝは大層違つて居るのである、支那婦人は存外活潑で、人の中に出て少しも恐怖るゝ風がなく、人に對し情を包まずに、懷かしげに振舞ふ樣、殊に外國人に對して、ずん〳〵自國語を以て御世辭をふりまく處、又二つなり三つなり覺えた丈の外國語を使用して、其國の人をもてなす處などは、西洋婦人とよく似て居る、一例をあげて見ると、また日本語がほんの三ッ四ッしか解せない頃から、日本の人が訪ねると、嫣然に『おかけなさい』『今日は好い天氣で御座います』『どうぞまたおいでなさい』などゝ云うから、大層よく日本語が出來るやうに聞える、又私の使つて居た下女は今年二十八九で、大層體格のよい活潑な女子であつたが、往々運動に出かけ、日本人の奥さん方を訪ね、其時に必ず一つ二つの日本語を覺えて、日本人へのお世辭に其言葉を用ひる、上下通じてかう云ふ風であるから、教育が充分であつたならば、さぞ立派なことであらうと思ふが、惜しいことに今迄長い間女子の教育は全く捨てゝあつたのであるから、磨かない玉のやうで高尙な光が更にない、彼等の腦中には家の觀念などは少しもなく、只贅澤に氣

樂に我儘に日を送ると云ふことを以て滿されて居るのである、そして時々數多の伴をつれて出かけ、寫眞を採つたり食事をしたり、芝居でも見ることを此上ない樂みにして居るのである、聞く處によると、支那婦人は幼時から好んで小說を讀むさうであるが、それがため身を誤る人も往々あるさうで、まこと、氣毒なものである、到底一朝一夕のことには參るまいが、支那婦人は男子よりも望みのあるやうに思はれるから、今後其方針を誤らずに導いたなら、他日余程立派になることであらうと思ふ、

婦人の服裝に就て

下田歌子

風俗と云ふものは、段々人が進んで作爲した習慣から成つて來る者で、其習慣中經濟と便宜との抱合した者が發達して、遂に一種の風俗を成したのであらう、斯の風俗即ち服裝の事に衛生が大なる關係があると云ふ事になつたのは、最も近頃である、往昔の餘り害になることは除去せられたに相違ないが、先づ衛生などの開けぬ前には、經濟とか便利とか外見とかに注意して造り出された樣である、それから現今の社會になつて、衣食住の改良を要する氣運が來た樣であるが、

何れの國でも、往古は男女の衣服に別段差異がなかつたのであるが、段々男子は實益に適した衣服を用ゐ、女子は外飾に注意した物を着けたのである、それで日本の古代に於ても矢張其通り、男女共衣服に、左程區別がなかつたとは云へ、女子の方は、多少外貌の裝飾に關する衣服を用ゐて居るらしいが、古代の服を見れば、便利と云ふ方から來たのが主で、外見は之に附隨したのもかと思はれる、

其から少し容儀に注意する樣になつたのは、國が文明の步調に進んだ時で、神功皇后の三韓征伐以後は、支那の風俗（印度の風俗も多少加味した）が續々這入つて來たから、日本では多く之を抛つたので

ある、其頃支那は文明であつた、ソコで最初に支那即ち隋、唐の禮服を取つて吾が國の禮服に用ゐたので、奈良朝時代に衣冠を制せられた際に、日本の婦人が着て居つた服は、モウ悉皆支那の唐時代の婦人服と違つた所はなかつたのである、それで高貴の婦人服は、袴が指貫の様になつて居るから、多少便利な點があつた、併し袴の裾は長かつたが、下の方が括られて膨れて居たから、足の運びは宜しかつた、その以後に至り女子は閾を越えず、と云ふ、所謂漢學流の風俗が、漸々感染して來た者と見えて、一般に婦人は、餘り外に出ない風が行はれ、殊に貴婦人が外出する時は牛車に乘つたので、歩行することが少なかつたから、動いたり歩いたりする方には、衣服は不便極まる者となつて仕舞つた、日本の古語から云へば、現今俗に申す袖、アレは當時の腕から袖口の邊迄を云ふたもので、其より下の方の長くなつて居る所を、袂と稱したのである、ソとは衣のことを言ひ、テとは手を被ふ意味で、それを二つ續けてソテと云ふのが、濁つてソデとなつたのである、萬葉集の歌に

茜さす紫野のゆきしめ野ゆき
野守は見ずや君がそでふる

と詠んだものがある、之が古い所の袖である、袂ではなくて袖口の所が長いので、即ち今の支那服のやうなもの、袴は現今のヅボン下或は股引のやうなもので幅の廣いのか、また漢文や、佛教の渡らなかつた前の婦人服であつたので、如何にも可笑しいが、歩行には至極便利であらうと思ふ、

隋、唐の文明を輸入してから、日本の婦人服は袂の長いものに變つたが、其以前は肩の所からヒレとカオスヒとか云ふ長い布片を懸けて居たので、是は装飾にもなり、前の方はハンケチの様な實用に使はれて居たが、奈良朝に至つては、全く飾ばかりになつて、後には比禮裙帶と申すものになつた、

上古の婦人服は袴の下が括られて、袖が短かゝつたが、桓武天皇の頃に至つて、貴婦人は殆ど外に出

ない、若し出れば、牛車で除々と行く樣になつたから、衣服は寒暑を防ぐ目的も多少あつたであらうが、裝飾の方が、唯一の主點になつて來たので、斯う變つてからの衣服を着ては迚も歩けるものではない、其故往昔から傳はつて居る國文の書を見れば、膝行寄とか辷り出るとか云ふ事のあるが、アレは全く衣服の爲に身躰を自由に動かせないから、辷つたり膝行つたりしたかつたのであらう、現今五ッ衣と云ふのは裾だけ綿が這入つて、襟のみ五ッ重ねるのであるから宜いが、往昔は本統に衣を五枚重ねたのである、先づ白絹の內衣を着て、打袴を穿き、其上に打衣を着たので、其は平絹に糊をつけ、コワ〳〵する樣にして着るのである、而して打衣の上に單衣を着又其上に五ッ衣を着た上に、袿衣を着し、又上其に唐衣を着て、背部から裳をかける、乃ち七重八重も重ねると云ふのは、此事である（近代は單衣の上に打衣を着る）、

これは大禮服であるが、衣服が斯う大變であるに、所謂俗に十二單の長い物を曳いて居る、宮中抔では平生が斯樣であるから、何うしても動くことは出來ない、其で最も女子の體格が惡くなつたのは、桓武朝以後である、其證據を擧ぐれば、高貴の方には早世の人が多かつた事と、モウ一つは女子が人に逢はない風が行はれた爲に、家屋の構造が違つた事である、ソレはどんな構造かと云ふと、高貴の婦人が居る所は室の外と入側の間、即ち椽座敷と云ふ樣なものがあつて、其向ふに障子を立て、障子のさきに格子が嵌めてある、勿論格子は晝はあけてある、けれども其外に簾が掛つて、又其內に几帳が立てゝあるから、貴婦人の身體には太陽があたらないのである、斯く几帳を垂れ簾を掛け、障子を嵌め、而して廂の奧深い、空氣の流通が惡く、太陽の映射が不完全な所に、高貴の婦人は這入つた上に衣服は一人の力で上げられない樣なものを着、裳には珊瑚、瑪瑙等を縫入れ、金線小銀錢で飾つてあつたから、重くして動けなかつた事は分るが、（勿論かやうな盛裝は

大禮服なので）是で身體が弱くならなければ不思議である、故に和文を見ると、當時の婦人は嬉しくても泣き、悲しくても泣くと云ふやうに、哀れッぽい涙脆い、始終泣いて居る樣なものであつた、斯く申せば非常に貴婦人の學者が出たと、國文學者の尊んで居る桓武帝の朝や、一條帝の時代は、惡い事ばかりの樣であるけれども、私は重に衞生が不完全だと云つたのである、

右の樣な風で、身體が弱いから、從て勇氣のない精神の弱い者を造つたに相違ないが、是と同時に發達したのは慈悲心です、即ち事物に感じ易い、優しい憐れな婦人が出來たので、其で文學が發達したから、此の頃の書は哀れな物が多かつたのである、無論活潑でなければ强健なことは出來ないが、之と同時に注意すべきは粗暴を戒める事である、人間が粗暴になると殘酷になり易い、當時の婦人には然樣の風などが毫もなかつたので、極めて優美可憐掬すべき人々であつたやうである、

斯樣に衣服は精神に伴ふものであるから、注意しなければならない、其から其當時に於ける中より以下々等の人は、如何なる有樣であるかと云へば、君主專制の封建時代には、何れの國もこの弊があつた、所が日本は固よりその昔は、かの專制主義であつたから、上より出た事は無論何んでも行ひ得るのみならず、下等な者は、殆ど人類として扱はれないから、中以下の人民の風俗は、一向書物にも載つて居らない、其故僅かに畫卷物を探つたり、僅の證據をとらへて、其當時の樣子を見るに、實に野蠻極まる哀れな有樣をして居たのである、太古未開で、上下の別がなかつた時には、衣服も左程等差なく、一般に筒袖を着袴を穿いて居た樣であるが、一條天皇の頃より、高貴の婦人の衣服は、美を競うて文明の風になつた、所が之に反して下等の人は屢々戰ひなどの起りし爲に之を征伐する度每に、衣食住の程度が進まぬ者共より租税を取つたので次第々々に疲弊を來し全く衣食住の程度は、當時の上流社會とは、同國同

時代とは思はれぬ程相違して居つたやうである、女子股引に似た下袴を穿き、極下等の者は男女共跣足で居つたのである、

斯う云ふ風で、武家時代に遷つたが、其頃に至つては、公家は只體形を存して居ると云ふに止まり、實權實力は全く武士の手に歸した、併し、其武士も先づ禮服は公家に倣つて居たのである、所が鎌倉、足利、德川と段々時代が遷る間に、一種の衣服を制定したから、女子の衣服も亦違つて來た、其れで裳唐衣、五ッ衣等は、唯將軍の御臺所のみ着られたが、其他は着る事がなくなつて、別に一種の風が起つたと云ふのは、彼の裲襠です、矢張是れも外には着られない服装で、五ッ衣や、唐衣や裳よりは少し便利である、裾に澤山綿を入れ、長い物を引きづッて居るから、

其から袖も元祿時分迄は、先づ衛生に適した物で、九寸乃至一尺一寸位な短い袖口から丸く殺ぐので、即ち殺袖でしたから、現今の筒袖と餘り違ひはない、其頃でも若い女子は振袖を着たが、其れとても普通の物が一尺八寸、長いのが二尺でした、是振袖は德川家が開けて以來六七十年若くは百年程を經てから興つたものである、けれども斯様なかいどりは矢張室内で用ゐるので、外出に着る物ではない、一體日本に於ける女子の衣服は、屋内に居る爲め製した物ですから、外出には極めて不便です、故に裲襠抔も歩行く時には引上げてからげをしたのである、

前述の如く、日本女子の服装は屋内に居る目的にて製した物であるから、往昔より幾回變遷するも、外出に便利な様にはなつて居らない、西洋服は外を歩くが目的であるから、多少形状が變化しても、外出には便利である、而して室内に居る時も決して坐らない、腰を掛けるのであるから、自然と立つた姿が宜い樣に出來て居る、所が日本の衣服は室内で着るのが目的だから、坐つた容態が宜いのである、

一體衣服は如何なる目的を以て造らねばならんかと云へば、第一衛生、即ち身體を保護する事と、第

二經濟、即ち個人々々の會計に困難を來たさない樣に注意する事であるが、併しまた外見や容儀に關係しなければ、どんなに醫者が話さうが、經濟家が說かうが、決して行はれるものではない、是は單り日本ばかりではない、世界孰れの國でも皆然うである、西洋の如く衞生をやかましく云ふ社會でさへ、婦人の腹部を少さくする邦のコルセットをかける事は、衞生家や醫者や、教育家が廢めろと云つても行はれないので、或る一部分の見識ある婦人の中には實行されても、決して社會全體はコルセットを廢めないのである、

右の如く衞生の事を引いて文明を誇る歐羅巴の社會ですら、婦人の姿が美く見えない事は行はれない、して見れば日本の服裝は、從來室內の坐居に便利なのを旨としてあつたが、今後は步行に便利な樣にしなければならん事は無論である、けれども外見も美くなければならぬ、兎に角袖を長くして、澤山綿を入れる事は衞生と反對で、餘り可笑いから廢めなければならない、衞生などをば毫も知らなかつた昔ならばイザ知らず、衞生を知つて居る今日も、猶袖の先まで綿を入れて立つと、只僅に重みを附けるばかりである、不經濟不衞生の袂に綿を澤山入れる事抔を、斯く開けた日本の婦人がする筈でないのに、何故斯く筒袖にならぬかと云ふと、是は容儀が宜くないから行はれないのである、

一體人間は萬善萬能の神佛でも何でも無いから、存外馬鹿けた事をもして居るが、然し自分の容貌が美く見えさへすれば構はないと云つて、衞生も經濟もかまはぬ服裝をするといふは、實に馬鹿氣切つて居る樣である、また此處に一つの理屈がある、衣服は固より身體を被ふ爲に出來た物である、けれども他の動物は皆劣等であるから、乃で造物主が夏冬着更へずとも宜い樣に毛とか羽とか云ふ樣な着物を被せて居る、然るに人間は上等な生物であるから、其時期々々に從つて好みの衣服を着る事が出來る樣に造つてある、して見れば容儀も亦捨つる譯には行か

ない、之を禮容とでも云はうか、鳥の中でも那の孔雀杯は美麗な羽を有つて居るが、大層其を大切にして、之が換更る時には悲み、猫は毛の生え更つた時には、一生懸命毛並を舐めて美くする、人間に比すれば非常に劣等なる鳥獸でさへ斯樣であるから、况して人間の容儀は大切で無い事はない、人物さへ賢く間に合へばよいと云つた所で、眞逆寐衣や温袍の廣袖に兵兒帶を締めた儘で、兩國相對する條約の談判等に行けば輕蔑を受けない譯には行かない、文官とか武官とかの大禮服を着、容儀を正しくして出掛けると、人間の價値が上る樣に見える、男子ですら斯くの如くである、况して女子は人間中の花であるから、其美はしい氣高い者に向つては、荒くれた人も手を下す能はず、剛情なる者も心が和ぐのは勿論である、即ち容儀の美しくして天女の如きものは、多少女子の精神に存する德の光を助くる事になる、されど同じ事で國も強くして兵隊も多く軍艦も澤山あつたから、それで宜さゝうなものであるが、道路もよくし、公園も造り、種々の道具だてをするのは即ち國を飾つて立派にするのである、それで餘り容儀に缺點のある婦人服は、單り吾等婦人の恐なるが故に之を用ゐないばかりでない、衣服の原則から云ふても行はれるものではない、けれども教育を受けた婦人は、衣服の目的の順序を謬つてはならぬ、即ち第一衞生、第二は經濟、其次には容儀にもなるべく缺點のない樣にと心掛けねばならない、無論衣服も從來の物を廢め、上は筒袖下はヅボン下に肉繻袢で居れば、改良も何も要らないが、其では容儀に於て缺點がある、それも學校の生徒だけには行はれるであらう、何故と云へば、學校は心の錦を織り出す爲に通ふので、容貌の飾りをする所でないから、餘り野鄙ならぬ以上は、ドンナ服でも行はれるが、社會に立つ人になると、國に飾りが入るのと同じく、相應な禮容が要るから、看護婦や製紙場の女工見た樣な風な宜いとは云へない、然うすると、筒袖袴で多少裝飾を附加へる位なら、寧ろ西洋服と云ふ事にな

つて來る、それで一も二もなく平生は筒袖袴で禮服には西洋服を用ゐれば、理屈の上から云ふと宜しいが、併しさうなると、また同じ洋服を採るなら、成る可く外形の一番宜い物を撰ばうとの慾望が出る、然うなるとまだ〳〵貪乏だからたまらない、其寶玉丈は日本婦人に限つて附けないと云ふやうな見識がある位なら、矢張學校で着る改良服でも公會席で用ゐられる筈であるが、中々然うは行かない、と云つて新規に流行する西洋服に加へて先祖代々の持傳へもあり、金も澤山ある西洋婦人の樣に立派な飾りを仕樣とすると、何んなよいお孃さんでも奥さんでも、身代限りをしなければならぬ、爰に於て走馬燈籠の樣な話であるが、兎に角、日本服の改良をしなければならんと云ふなれば、私には西洋服よりも便利で經濟で、且つ裝飾のある樣な改良服の考はない、それでは仕方がないから、改良服の妙案が出る迄の所、不完全ながら、先づ袂の綿をモット薄くして、從前の衣服を用ひ、袴を穿く丈でも餘程わるきよくなるから、從來所持して居る衣服の縫更をする時に、今よりも袂を薄くして、帶を拵へる代りに袴を造つたならば、衞生や經濟の方に進む一端であらうと思ふが、容儀に至つては、何うも私には解らない、人は兎に角眼に慣れた風がよく見えるものである、私は毎日袴を穿いた人を見て居るので、其方がキリ〳〵として帶よりも品の宜い樣に思はれるのは、即ち私の眼の標準がさうなつてるのであるから、正しいとは云へない、何うか從來の衣服は坐る樣、又そろそろ歩く樣に拵へた物であるから、成るべく不經濟でなく歩行に便利な服にしたなら、先づ一方の改良であらうと思ふ、




S.A TRADE MARK
ANDO-SHOTEN
No.5 Urajimbo-cho. KANDA. TOKYO
Manufacturer of Various Appliances for Gymnastic & Other Out-door Games.
S.A
東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四八四番
ピンポン室内テニス
一號一箱 一、二二〇
二號同 一、五〇〇
三號同 一、六八〇
四號同 一、八三〇
號外同 〇、九六〇
其他各種御注文に應じ製造可仕候
御用 體操器械
體育用品
東京神田裏神保町五
S.A 安藤商店
電本 484
確實 製造販賣
ピンポン改良室内テニス（旅行用）
一號一箱 二、〇三〇
二號同 二、二三〇
三號同 二、三五〇
四號同 二、五一〇
同用テーブル 上等拾參圓四拾錢 並等一圓
テニス用ラケット一組四本
一號大人用 一二、五〇〇
二號同 一一、〇〇〇
三號同 八、八〇〇
四號同 七、四〇〇
五號同 六、七〇〇
六號同 五、七〇〇
七號同（小學用） 四、七〇〇
婦人(一號) 七圓
同二號 六圓
改良櫻二重枠ラケット一組
一號 拾參圓參拾錢
二號 拾壹圓七拾錢
三號 九圓五拾錢
四號 八圓貳拾錢
五號 七圓貳拾錢
六號 六圓貳拾錢
七號 五圓貳拾錢
テニス組一張 一、八八〇ヨリ三、一一五〇迄各種あり升
東京市神田裏神保町五
安藤商店
電話本局四百八十四



女子の美術に就て

農學博士
法學博士　新渡戸稲造

日本は戰に強い國である、世界の最強國の露西亞でさへも、兵力によつて屈伏せしめたほどであるから、武士國であると威張るものもあり、又昔から日本は美術上の大製作があり、國民一般美術思想に富んで居るから、美術國であると云ふて居るものもある、成程武士國であり、又美術國でもあるが、國民の數から云へば、五千萬の八九分通りは、農を以て身を立てゝ居るのであるから、百姓國であるといふのが一番當つて居るやうに思ふ、私はその百姓の一人で、美術などと云ふのは、柄にないと云ふてもよいのであるが、百姓といへども、美術に就て希望を述ぶる資格位はあるやうに思ふ、

美術、例へば繪畫をつくるにしても、他が見て呉れやうがくれまいが、自分獨りで四疊半で樂んで居ればよいと云ふやうに、獨りですねて居るのならば兎も角も、繪畫を描けば見せやう、刺繍をすれば買つて貰はう、しかも高い價で買はれるやうなものを造りたい、そして衆と共に樂まうと云ふには、自分獨りで喜んで居るやうなものばかりでなく、我國五千萬の八九分は百姓であるから、百姓にもよく解るものを作つて貰ひたい、百姓が見ても感心せられるやうなのでなければ、實は餘り感心したものとは云ない、

百姓と雖も、一通りは美術思想を有つて居る、先年ラインといふ人がプロシヤの政府の爲に、日本へ

派遣されたことがあつたが、このライン氏は、地理學者で、立派な著述が澤山ある、地學研究の爲に、世界中に足跡をのこさない所はないほどで、日本へ來ても其處此處を跋渉せられた、而して氏が最も感せられたと云ことを聞くに、日本の百姓は美術心に富んで居る、獨逸人など、比較して、大に畫ごゝろがある、その一例は、ある田舍で百姓に道を尋ねた、百姓はそこで擔いだ荷を卸して圖を引きはじめたので、持つて居た紙と鉛筆を渡すと、かう行けば木あり、こゝを曲れば小屋あり、と云ふ風に細かに圖解をして呉れた、歐羅巴の百姓は鉛筆をねぶらないすべは知つて居るが、かういふ器用なことは出來ない、と云はれた、これは岡目八目評で、まづ動かぬ所であらう、實に日本人は天然に美術思想に富んで居るのである、

それから日本人で、美術的に出來て居るのは、手である、亞米利加に居た時、或宴會に招かれ、前の方の椅子に腰をかけて居ると、後の方の婦人が、まつ黒の毛じやないかと批評をはじめた、さあ身の上になりにけり、自分の天窓の批評などは恐入る、惡く云ふて居るのか、よく云ふて居るのか解らないから、大に氣にして居ると、今度はある婆アさんが、まんと奇麗な手じやないか、と云ひ出した、これはよい鹽梅じや、と云ふので、痒くもないのに手を見せる爲に髮をかいた、ます／＼評判がよい、そこで考へた、自分の如き上等でない手ですら、米國人に見せると、なか／＼價値があるから、婦人の手でも見せたら、定めて吃驚するであらうと思ふと、果してその通りで、デバモア夫人が、禁酒會の遊説の爲に日本に來て、日本の婦人會で或決議をするに手を擧げさせた、すると赤い襦袢の中から、白い手が出た、デバモア夫人は、こんな美しいものは見たことがないと云ふので、同じ決議を二度して、再び手を擧げさせて、つく／＼それに見とれたと云ふことである、手そのものは美術に出來て居るが、さて婦人が手に對するほどの美術が出來るかと云ふと、これはなか

〳〵むづかしい、
有名なる獨逸の學者レッシング氏は、高尙な思想は、腦より筋肉を傳うて手の先に現はれる、すべての考が手に來て、演說をしても、手で表情さるゝことが多い、即ち手は頭腦の眞似をして居るものであるが、思想の速度に筋肉い働きは作はないから、眠て居て、もたせた足がドンと落ちる間に思想の方は何丈といふ高い所から落ちるやうな氣がする、であるから頭腦を怪我した時などは、眠りから起きた所で聞くと、三年も五年も經て來たやうな夢を見て居る、實に思想の働きは電氣よりも早い、その命令を筋肉が傳へるのであるから、手へ來て頭腦の働きの幾分も出來ない、日本人は手が短いので、早く頭腦の命令を傳へるから機敏で、西洋人の鈍いのは手の長いのに基因するかも知れない、



ラーウスといふ亞米利加の婦人は、二十五ヶ國の學生に交つて、幾度となく、あちらこちらで演說をしたが、或時の演說に、瑞典諾威の婦人は、暇さへあれば哲學抔を考る、又英國の婦人は遊散好で、バスケットホールとか、テニスとかを行て居る、日本の婦人は何かと云と、美術的の手仕事をして居と云れた、私は暇さへあれば化粧でもして

居るかと思つて居つたが、これも岡目八目の噂を聞いて、成程と首肯いたのである、

日本は前述の如く美術國で、婦人はその形とゝもに美術的に出來て居る、繪畫を學ぶには尤も適當して居る、そこで繪畫を學ぶ人に注文したいのは、國民の大多數は百姓であるから、今少し解り易いやうに而して精神を入れて貰ひたいのである、繪畫と寫眞と一つに見ては困る、寫眞はその時の實狀がうつればよいので、例へば新渡戸稻造が、餘所行の顔を氣取つて寫眞屋へ撮影に行く、その寫眞を見てこれを平素のに比べると大違ひで、稻造の平生の心掛は少しも現はれて居ない、たゞ實物と同じやうな形ばかりでよいならば、繪畫を學ぶより寫眞を學ぶ方がよい、

博覧會などで澤山ある畫を見たが、子供が犬と遊んで居る圖がある、その小供が、犬に對して喜んで居るのか、犬を不憫と思ふて居るのか、いぢめて居るのか、情が少しも表はれて居ない、またその子供一人離して見ると、葬式に行く小供か、學校へ行く小供か解らぬ、たゞ小さい顔に目口鼻があるから小供である位では心細い、

喜怒哀樂を色に現はさぬを、東洋人の氣象として喜んで居るやうであるが、表情のないのは喜ばしいことではない、また日本には支那美術思想が輸入されて居るので、支那の美術といへば、その美といふ字からして、羊の大きいと云ふので、日本では羊を多く食はないが、支那では盛んに食ふ、その大きなのが美であるから、西洋の光明とか善とか云ふ思想より割出した美とは大に違つて居る、

さて畫に情を表はすには、情を汲まねばならぬ、即ち同情心が厚くなければならぬ、故に美術家は同情心に富まねばならぬのである、然るに此同情心が薄い爲に、多くの畫に情が表はれないのである、そんな事では行かない、美術家は何處までも心を磨き精神を鍛うて、それが氣韻高く表情されるやうにならねばならぬ、不道徳な美術家に氣の利いた作品は

斷じて出來ないのである、

それとなき所々を染めてこそ
墨畫の駑はあらはれにけり

よくこの歌の意を味ふて貰いたいものである、

潮來曲

雨山居士

潮來ぶしの由來に就ては、記るすべきこと多きも、今之を略きぬ、其の曲、もと單調なれど、自らなる古風の偲ばれて、聽く者坐ろに烟水の郷に遊ぶの思あり、されど近頃は唱ふる人なし、なきにあらず、唱ひ崩して、本調を失ひしなり、從つて聽く客なし、なきにあらず、解するの風雅男なきなり、斯くして、曲は次第に衰へ行く、惜みても、尙餘りあり、

せめてもの名殘は、笛家の腔に留まりて、僅かに百年の遺音を傳ふ、横管雜曲の一ながら、また拾て難き趣を存す、伊勢音頭の劇中、他は既に數人を倒せり、月色黑く、蟲聲絕ゆ、冷かに笑つて、刄血を拭はんとする時、忽ち起る悲哀の音、斷又續、嫋嫋として縷の如し、是れ潮來節の竹枝に入るものなり、淒愴の氣塲に滿ちて、聽く者、涙自ら落つ、

潮來出嶋の、まこもの中に、あやめ咲くとは、しほらしい、なる一闋は、廣く人口に膾炙する所なり、昔は「あやめ咲くとはつゆ知らず」と唱ひたるを、いつ頃よりか、今の如く改まりぬ、「つゆ知らず」のかた、餘韻ありて、調の高きを覺ゆ、古來寄調の作頗る多し、

戀にこがれて、鳴く蟬よりも、なかぬ螢の、身をこがす、

潮來出じまの、十二のはしを、行きつ戻りつ、思案橋、の如き聲調絕佳、いとひなびたる中に、限りなき情緒の含まれて、若し紅欄に凭る、美人の嬌喉より聽く時は、心なき舟子にも棹歌を止めて、物の哀れを催すならん、

詩佛老人もいたく、此の曲を愛せられたりと云ふ。南郊文集に載する所は、人皆之を知る、先人の詩歌に入るは「あやめ咲くとは」一節に限るが如し、嘯歌一曲など、同巧異曲なり、潮來郷の舊繁華、紙醉金迷の狀は、蓼太が「鶺鴒や潮來をしいて岩傳ひ」の十七字に盡されぬ、五逹の「をいらんに聲かけらるゝ田植かな」を吟して、劉郎前渡の跡、想ふに堪へたり「心ありて、問ふにやわらん寐ざむれは、山に千鳥のまれに鳴く聲」に至りては、風韻楚々人に迫りて、吾亦瘦せんとする多情多恨の筆の痕は、長へに朽ちざるも、聲調歌曲は、もと口傳を主とす、傳ふる者いつしか失せて、曲も亦共にうせんとせり、地は旣に舊時の面影なし、せめて歌ばかりは、殘しをきたきものを、

潮來の一夜

鷄曉館の一室に、觀潮の興盡きて、轉た倦遊の情に堪へず、まして夕べの濱庇に、秋風のそよと音づれて、藻に鳴く蟲の聲々に、遊子の歸心を催すめり、徒然の折、簾を隔つる絃索は、名にし負ふ潮來の一曲なり、主は知らず、水調幽婉の韻、聽き了つて、出島見んとの遊意、乍ち動く、其の夜は微醺を求めて、寢に就く、枕に通ふ、颯々たる音は、松風か、濤聲か、明る日、茲處を辭して、大刀根を遡る、兩岸の風光一幅の畫面を披く、篙師が懇ろに、指點して敎ゆるも、旣に畫中の人たる身は、絶勝にあてがれて、耳にも留めず、午點四時、船大船津に着しければ、直に鹿島神社に賽す、森肅の氣自ら襟を正さしむ、一絶を得

老樹千章護古詞、霞潮一碧漾明漪、階前稽首心先肅、恍覺神靈降在斯、

泊舟を艤うて、潮來に向ふ、潮來の字、もと板來とかく、甚だ俗なり、西山侯、鹿島に潮宮ありて、常陸の方言、潮をいたと云けるを興ある事に思はれ、爾來斯くは改められたりと云ふ、又和名抄を見るに、淨見原天皇の御世、建借間命をして、兇賊共

を擊亡さるゝ所に、種屬一時焚滅、此時痛殺所、言今謂伊多之郷、云々とあり、以て字義の變遷を知るべし、舟行くに從ひ、眼界更に開け、日は漸く十六島のかげに沈んで、十二橋の邊、芦荻秋風に搖ぐ潮往き潮來り、櫓聲漁歌に和し、水光暮色を分つ、富士は紫に、筑波は靑し、舟を棄てゝ岸に上る、微雨絲々として來る、

日沒烟波十六洲、潮來潮去送漁舟、沙鷗飛盡棹歌遠、微雨瀟々舊酒樓、

寂莫たる水市の光景、家破れ樓傾き、風烟徒に愁人の腸を斷つ、繁華の跡證し難く、前渡の風流、何處に尋ねん、

一曲消魂杜若歌、行人何處問嫦娥、秋風芦白蘋紅外、十二橋寒夕照多、

あやめ音頭な觀る、娼婦の一隊、白地に菖蒲花を染めたるものを着て、踊り舞ふ、俗惡目を掩はしむ、こゝの小傾城達、嫖客なき時は、能く田を鋤き、畑を耕すと云ふ、さもありなん、

去つて柳陰の一亭に酌む、聖賢何んぞ論せん、陶然として醉ふ、偶々懷にせる潮來圖志を繙くに、當年繁華の情、想ふに堪へたり、即ち潮來の里は東都五町街にならひし廓なり、朝夕の出船入船、落込む家のせんせいは、花のあした雪の夕べ、十六島は言ふもさらなり、香取かしま、息栖銚子の浦々までも、一もうにうかみ、富士筑波の兩峰は西南につらなり、數十里てうまうの影鏡なり、近き頃まで、銚子口より親船ひきもきらず、入津せし所なり、諸侯の藏屋敷廷つゞきし、云々とあり、榮枯今昔の感、端なく、詩愁を繚亂す、夜はいつしか深けゝる、舟子を促して舟に歸り、水枕蓬底に吟夢を結ばんとす、夜氣水風冷々として、乍ち醒め乍ち醉ふ、

滿江風露水漫々、客夢還尋澤國寬、漁火在烟天正白、荻花吹雪曉蓬寒、

舟行くか、留るか、醒むれば、水烟一散して、千家萬家忽如として、眼前に現出せり、舟は佐原に着せるなり、

昨夜一枕蓬底眠、夢中十里遡長川、孤舟所住水烟散、驚見千家眼前生、

若葉かげ

侯爵　鍋島直大

青葉

いつしかに夏のけしきに成ぬらん
見なれし村も青葉しげりて

幽居山吹

世はなれて野中の庵は山吹の
花ばかりにぞ友にはありけん

待郭公

わが宿のそともの森にほとゝぎす
こゑせぬほどは淋しかりけり

竹風

しげりあふ庭の竹むら吹く風の
音もすゞしき夏は來にけり

五月雨

あかつきのねざめにきけば五月雨は
きのふの音にかはらざりけり

梅雨晴

蟬のなく聲きこゆなりなごりなく
はれ渡りけんさみだれのそら

多摩川

佐々木信綱

眞玉なす小石の上をさみどりの
水流れくだる春の多摩川

山ふかみ桃ちる風に雪ちりて
猪つるしたる狩人の家

わづらはし世は煩はし多摩川の
いかだの床に若鮎つらむ哉

山ふかみ流いよ〳〵せばまりて
みどりの淵に桃ちりうかぶ

世の旅にわゆみ疲れてゆく我を
なぐさめ顔の山水のおと

その昔男ありけりひんがしの
五條のわたりおぼろ夜の月

くらけれど淋しけれども君とゆく
二人の道の物おもひなき

夏の日のもゆる砂原こゝに生ひし
すぐせいとほし撫子の花

雨さむき春くれ方をやぶれたる
渚琴いだきて我一人泣く

紅のさんごのさ枝とりもちて
少女月にまふ渡つみの宮

人の世の夏野の春のひと時を
こてふとゝもに我も舞はゞや

天もせに翅をはれる荒鷲の
羽かせにゆらぐ千どせ老松

あまりにも事なき山の二年に
すてたりし世の更に戀しき

よそひたる馬のりなべて桃の春を
花嫁とつぐ越ヶ谷のさと

ふと見えてふと消去りしうき人の
面影かなし雨さむき夜を

手なそこに煙草はたきて老人が
道を敎うる菜の花の道

おもひ出の川添堤夕ぐれの
月ほの白うわふち花ちる

あまりにも我畫見まうし畫筆とる
我手さながら折れもはてなん

心の友

阿部優子

四月十五日、さるべき催にて、小石川なる後樂園にまゐる、いにしへ水戸殿その道の内匠に仰せて造らしめ給へりしと聞ゆる園のさま、きらびやかにて目も綾などいふかたにはあらで、年ふりし木立のさ

まよりなべてならず物々しう、さすがに昔覺えて、いひしらずめでたし、老松のおほひかゝれる池のおもに、花のうつりたるもたゞならぬに、浮草に水をさへ隔てられ、よるべ渚に小舟の棹さへそひて、たゞよへるも、いとしのび難う、めしつれたる外には聞く人もあらねば、

むかしたが子の日にひきし松ならむ
　枝葉しげりてかげぞふりぬる

さくら花匂ふさかりは池水に
　猶いにしへの影も見えつゝ

うき草に池のかゞみは曇れども
　さすがむかしの影はうつれり

水をさへ隔つる草にかゝりけり
　かぢをたえたる棚なし小ぶね

午の時過ぐる頃ほひより參りつどへる人々、六十人あまりにもや、三輪田刀自、平尾ぬし、何くれと取まかなひ給へり、やがて人々おのがじゝ園めぐりにとて、手を引つれて立いづるに、少し後れて七八

人先に行きつる人の跡をとめつゝあゆめど、いつしかいたう後れ果たり、松平の内君も初めてとのたまふやうなりしを、いかにせましと見かへるかたへに、藤の君花の梢を打あふぎ、去年にもましてなどいひもらし給ふに、頼もしくて道しるべに立給ひ、五十路あまり三つの驛路のあとさへありと聞けば、見まほしきをとて、思ふとち分入り、みちのほどいとたのし、ゆくまゝに木立いとふかうしげりて、さばかりならぬ風の音も身にしむに、かなたにさや〳〵と水の流るゝ音聞ゆれば、誰も〳〵歩みを早めつゝ、やがて明月橋と彫られたる石橋のほとりに來ぬ、いつの間にかゝる山ふところには入りけむと、心もとなげにうしろ手をふりかへりみるもあれど、中々にかゝるところなむ、もとめても分け入らまほしきをとて、藤の君去がてに橋の袂にたゝづみ給へり、此わたりの春秋の夜のさまのあはれにもをかしからんを、かうむげに落積みし木の葉に、あたら月の光もいかゞはなど、人の打歎きいふに答ふるとしもな

く、

落ちつみし木の葉にむせぶ山河に
　たゞよふ月の影も見まほし
庵しめて見る人もなき山河に
　ひさしき月の影やさすらむ
おのづからつもる木の葉の柵に
　かけて見るべき月ぞまたるゝ

藤の君

かくてのみあらば老せじ限りある
　玉の緒さへにつなぎとゞめて

されどかくてのみあるべきならねば、石橋をゆく、ひと渡りぐるしきを辛うじて過ぐとて、

峰たかみ雲のかけたるそれならで
　わたりわづらふ石のまろばし

折まがり登り果たる山のいたゞきに、ふりたる御堂あり、いかなる神のまつられたまふにかと、さしのぞくに、中の廣らかなるには似ず、蜘蛛の糸のあやしうかゝりひろごりて、をぐらき奥の方に、丈二三尺ばかりなる人がた二つあり、藤の君に問へば、これなん首陽山に入りしと語り出で給ふに、胸さへさわがれて、また更に見やれば、まことに左手に立たる人の手に、さゝやかなる籠をもちたり、是が中に物ある樣なるは、早蕨にぞあらんと、すゞろにもの思ひつゞけらるゝもいはむかたなし、

はらからの高きこゝろは山ふかく
　いりても後の世々にかくれし
さわらびを折しむかしをまのあたり
　見るこゝちしてぬるゝそでかな

かくあれ果てしを、藤の君とひそみなげきて

さわらびを折にし山にわけ入りて
　むかしをしのぶ人もなき世か

御堂のかたに、乾☰巽☴など易の卦を彫りてしるされたる八角堂あり、此わたりは明の人朱舜水が心得てかくしたるとか、こゝより少しへだゝりて、蕨生ふる山も侍り、行給ふかなど、猶細かに語り聞かせ給へりしを、いたうつかれたる樣なれば、下りゆ

く、こゝはいと廣らに松あまたあり、こなたはすべて田の面のさまにしなして、菖蒲のまだうら若う、靑みわたるもいとよきながめなり、

　色も香もまだうらわかきあやめ草
　　たれにひかるゝ根ざしなるらむ

藤棚かゝれるほとりの、芝生の上にいこひ給へるもあり、いとひなびてつくられし東家の內につどひ遊び給へるも、かたみに語りかはし、誠におもふこともなげなり、藤の君、

　けふのみはうき世のことも忘られて
　　よもぎが島もかくやとぞ思ふ

不老水とある井のほとりにて藤の君、

　名におへる水をむすびてもろともに
　　おいせぬよをばかさねてしかな

と聞え給ふに、同じこゝろをとて、

　かくしつゝあそぶけふこそ名におへる
　　老ぬ淸水もくまゝほしけれ

此田舍家は、日さし入りて便りなし、何れにかと

人々もとむるに、藤の君音羽の瀧のほとりに東家はべりしがとてすゝみ給ふに、とも〴〵に參るに、君とゞまりていかにせまし、道踏たがへにしこゝちせらるゝをとて困じ給ふになど、さるおぼろげなる事をのたまふにぞ、道しるべの君にも似ずなど悲しう聞ゆるほどに、車つかさの事ありげに走り來るにぞ、東家もとめいでよとてやるに、ほどなく侍りつとて、先だつ方にいゆきて見れば、日もさしいらぬに、瀧の音響きて、眺いとよし、折敷に物數々もられたるを、こゝにて打ひらきならしたり、いと淸う流れおつる瀧のほとりに立寄りて、

　音たかし久しき世よりながれても
　　たきのしらいとみだれざりけり

　つく〴〵と音羽の瀧のしら糸を
　　くりかへしつゝむかしをぞ思ふ

藤の君も

　こゝろさへすゞしかりけり音たかき
　　音羽の瀧のきよきながれを

池のほとりの石橋を渡るほど、吹くとしもなき風にはら／＼と散かふ花、まことに肌寒からぬ宵のこゝちして、むかしの人の木の下かげはと、うたひけむ言の葉に思ひ合さるゝながめ似るものなし、

折ふしの風にみだるゝさくら花
　蝴蝶に似たり手にもとられず

夢かとも思ひまどひぬかへるさも
　忘れて花にあそぶこゝろを
藤の君

おもふどち花の木影に遊ぶ日は
　くれずもがなと祈らるゝかな

かゝる折しも、入相の鐘のひゞきたる、見はてぬ夢のさめたるやうに覺えて

花に見し胡蝶の夢もさめにけり
　入相つぐる鐘のひゞきに
藤の君

ちる花のながめにあかぬ夕まぐれ
　家路うながすかねひゞくなり

など、空を見いでたまへる氣色、彼源氏の君が

まつさともいかゞ聞くらんかた／＼に
　こゝろさわがす日ぐらしのこゑ

と打うめき給へりしとある折からには、聲ざまいたうたかへれど、物のねに家路の事も思ひやられし夕まぐれ、さすがに似かよひて、たゞならず聞ゆるもいとをかし、

西行堂の前もいつしか過ぎて、外もに出づ、こゝにも池の上淸げに、水鳥のうき居たるさま、見すごし難う、しばし立どまりてふと見あげたる、門の扁額に、後樂園と書しるされしも、かの舜水と聞ゆ、

後の世のひとの心もかくはかり
　たのしき園と名におふせけむ

心の友となむ名におふせける、後樂園の言の葉をおくり給はり、いとうれしう侍りければ、てにをはさへうちそろはねど　　松平充子

後もかく樂しきその〻言の葉を
　かずかきしるしうくるうれしさ

家庭の樂園

佛國　スーベストル作
淺岡一譯

（下）

さればといつてロベールが怠惰者に成つたといふ譯でもない、我か儘勝手を働くといふ譯でもない、つまり夫婦ともロベールが孝行者で在れといふことは念に懸けて居つたには相違ない、そしてまた老後に今日までの辛苦の埋め合せに、ひと花咲かせて貰ひたいといふ望も有つたに相違ない、母のゼネビエーブは指折り數へて、何日何時からは家に居つて落付て仕事をするであらうといふことを樂んで居つたらしく、父のミッシエルは可愛子を相手に仕事をするを樂んで居つたらしい、然るにロベールは落付て内に居ない、久しい前ウエルサエユの受負業者と協同して一仕事するから、當分内へは歸られ無いと言ひ出した、そこで夫婦の心では多年の訓誨も多年の希望も空しくなつたと考へた、併しロベールの方では前途の希望を滿たす爲に、即ち新しき位置を以て、他の同業者に讓らない丈の仕事をするには、先づ大事業の上に關係を持つ樣なことも仕なければならぬとの考を以て仕たことかも知れない、ゼネビエーブが自分の心に思ふ丈の理屈をならべて、果は泣の涙でロベールを家に居らせやうとて説諭したことが有るらしい、其時ロベールは母に抱き付いて母をなだめすかしつして慰めたが、抑留されてはたまらぬと思つたか、また飛び出して仕舞つたと聞いた、それから一年餘歸らない、殊に其歸る時をも言はない、兩親は毎月一度づゝ逢ふのみで、また直に分れるといふ譯で、其子の心が分らぬといふて心配して居るらしい、右の次第であるので、親のミッシエルは自分は神樣から賞めらるべき時に罪せられた、自分は經濟上手で仕事好きな子をほしいと思つたに、神は自分に慾の深い吝嗇な子をくだすつた、自分は悴を成長させた上では、自分の側に置いて自分の若い時を

を思ひ出して、且つ共に樂しまうと思つて居つた、女房は自分と違つて早く孫が見たいから、嫁を貰はうといふが、自分はそれはいかん、女房を持つと悴の荷が重くなつて苦しくなる、それよりは悴を自分の側に泄いて、彼の面白い歌を聞かして貰ふ方がましじや、悴は中々音樂好きだから、悴も喜ぶであらうといつて居つたが、それは夢で有つた、嗚呼つまらない羽が生ると、雛鳥は飛び出して親を顧みもしない、其内父も母も忘れて仕舞ふ、先生親といふ者は馬鹿々々しいものですと嘆息して、稍有つて彼はまた、昨日は悴が歸る積りで待つて居つたのです、是



非とも歸つて來て、私共夫婦と共に食事をしなければならぬ譯なのですが、歸つて來ません、モウ駄目です、悴めが何か企て丶何か一仕事仕出かす氣でせうが、私共夫婦は辛苦をする丈で年は寄る、此上は後世の願より外に仕方が無いです、如何したら好いことやら分らない、アノ馬鹿め、イヤ先生二十何年といふ間アノ恩知らずを敎育する爲に、骨を折り金を費し、父も母も好い思ひもせず苦んでばかり居つたのは何の爲でせう、先生御察しください、朋友との交際も絶ち、飲みたい酒も飲まずつまり親甲斐のある親と成つて子供を子供の樣に育

てたいといふ考ばかりなのでした、イヤ馬鹿な親で有つた、またそればかりではない、自分をば女房も悴も二人ながらひどい目に逢せた、女房が出來た子が出來たといふので、私の心に前途の希望といふものが出來た、そこで老實な心に成つて、一生懸命に働いた、先生私を一人の百姓だと思ひなさい、其百姓が自分の爲に麥を植えて、一生懸命で稼いで切角收穫時が來たと思ふと、其麥の穗が空で何の用も成さぬといふたら、可愛さうでは御座いませんかと、聲も屢々に成るまで、話し續けた、淒い樣な眼をして唇を震はして居る樣の氣の毒さ、何とも慰めやうも無つた、暫時二人の間に言葉がとぎれた、するとミッシエルは忘れた鐵槌が氣に成ると見えて、一寸といつて歸つて仕舞つた、

ミッシエルは可愛想な男じや、世の中の人が自分の德義を盡した丈けの報酬が無く、却て馬鹿を見たといふ樣なはめになると、其德義を盡したことを後悔するのは、これじやこんなことじやといふことを知つた、成程ミッシエルの身の上話しの樣なことに成ると人は、誰でもそんな考を起すものと見える、イヤ無理もない、

併し德義といふものは、言葉の上から見た樣な單一なものでない、人間の一生の上に重大な關係を以て居るものじや、德義を盡すのは無益じやといふことは無いばかりで無く、最大必要なことじや、德義を盡したからとて、其報酬が其人の身に思ふ通りに報つて來るものではないが、何の道報酬は來るに相違ない、併し報酬を思うて德義を行ふべきものでは無い、元來世の中の總ての事柄には道理といふものと其結果といふものが有る、德義を行ふ上に於ても、矢張此普通の法は外れない、サテ世の中に德義を行ふ人に不仕合なものが有る、實際經驗上相違ない事で有るが、經驗上其德義を行うた人は、世人からは必ず尊敬すべき人として重んぜられる、但し德義を行うて直接の報酬若くは目に見える報酬を望む人からこそ、德義を行ふことはつまらぬといふ觀念が起

るが、これは眞誠の徳義家の觀念では無い、畢竟我々の生涯は、徳義を行へば何の道思はざる褒美を受る樣に仕組んで有る、小說の樣なものじや、良心の平和、滿足または名譽抔いふものは、其徳義を行ふた人の眼に何にとも思はぬけれども、若し良心の平和なく自家の滿足することも無く名譽もなく、此世に在るとして考へて見たならば、如何であらう、例へば良心が始終痛苦を感じ、何事に就ても不滿足で耻ぢ入る樣なことばかり有り、または不評判で人から後指をさゝれる樣なことばかり有つたら如何であらう、斯ういふ所から見ると、徳義を行つた爲に一ッも此痛苦を感じないとすれば、徳義といふものは、實に貴い寶に好い此上もない御寶物ではあるまいか自分は一人でこんなことを考へて居つた所へ、ミッシエルが歸つて來た、直に仕事を始めた、矢張今日も其子のロベールは家に歸らぬらしい、

　ミッシエルは細工を仕ながら、彼の希望と彼の失望の悲み抔話して、獨り憤激し居る樣子で有つた、彼は繰り返へし〳〵同じことを話して、其不仕合を哀訴した、彼は其子のロベールの助力で以て、兎やせん角やせんと企たことを一々述て自分に話し、また嘆息しつゝ、私の大屋さんは三十年來の稼ぎで、大分金持に成つて、此頃田舍の別莊へ隱居しやうといふのですが、經濟上手な人ですが運も好いのですな

　私抔はそれとは裏表で運が惡くて、此家を讓り受るに就いては、二千フランを拂はねばならぬことに成つて居ますが、暫く待て戴かねばなりませぬ、ですから悴の奴が此へ歸つて呉れゝば私も大助かりといふもので、彼が居れば私の工塲を繁昌させることは譯が無いです、學術も出來ます、人並勝れて働きもあり、細工の上にも新發明の工夫とか、改良の意見とか相應の見込をも持つて居つて、中々傑い者です、私が兼て悴の圖案の内に階段の構造方を工夫して書いたものを見ましたが、久しい間の工夫で旨い都合に出來て有りました、それを成功させやうと思つて、ウエルサエユの請負師と結托したに相違無

いでです、此事も私が久しく心配して、若しやそんなことを仕はすまいか杯と案じて居ましたが、終に其爲に家に歸らないのです、私は親子の間でも彼奴の心持を聞くに遑が無いのです、なぜといふと、先生彼奴は全生活を此一事に込めて置くと申してもよい程に、改良とか發明とかいふ事に氣も心も奪はれて居つて、仕事氣違ひとでもいひたい樣な奴ですからな、

　とミッシエルは自慢やら怨みやら、取り交ぜて話した、自分は此話に就いてミッシエルが半分は其子を罪し、半分は其子を自慢すると思つた、斯う自慢する程であるから、彼の子の歸らぬので、猶更にミッシエルが痛苦を訴へるなと合點した、兎角する間に夕の六時に成つた、自分は面白い日記を書き終る時に近く成つた、嗚呼今日の數時間の内に、如何に種々のことを心に感じたことよ、ゼネビエーブとミッシエルとに關して、如何に喜怒哀樂の變化よ、自分は夕食の用意を仕て居る間にミッシエルは仕事を仕ながら、其子の話をして最早仕事も終り近く成つた、

　ット耳に留つたは人の急いで來る足音、ハテと思ふと室の戸が開いた、ゼネビエーブがロベールと共に現はれた、

　ミッシエルは驚きは驚いたが、左も嬉しさうに見えた、また忽ち其嬉しい顔を隱すが爲に、故らに憮然した風をした樣に思はれた、

ロベールは父の憮然したことには心付かぬが、其淡白無邪氣の樣が自分を驚かした程で、父の懷に飛び込む樣な風で抱き付いた、ゼネビエーブは何か言ひたさうな顔で有つたが、我慢して控へて居つたらしかつた、するとロベールは自分に向て左も嬉しいといふ風で挨拶したから、自分もこれに對して其無事安泰を祝し、且つ其來て吳れたことを謝した、これが濟むとミッシエルは昨日は貴樣が歸るかと思つて待つて居つたと、乾燥無味な相貌と音節とでいつた、御父さま何卒御容しください、セーンゼルマンに用

事が有つて參つた處が晩くなりまして歸れませんでした、私の尋ねた人が切角私を留めて御馳走して呉れましたので、とロベールが答へた、

ミツシエルは片手に鐵槌を持つて釘を打ちながら、ロベールの方を一寸と見て憤つた樣な聲で、それはさうであらう、人の家へ行つては其主人の意に從はねばならぬから、……併しロベール主人と共に鶉の肉を肉指の尖で丁寧に突くよりも睦まじい間柄で、庖丁で黒麵包を切りながら食ふ方が旨いといふ人も世の中には有るよ、

御父樣私も其方で御座いますと、愉快の面持もて答へ、また併し御父樣蠶豆を食ふには、先づ莢を取れといふ諺も御座います、それで前途の爲に私は大工場で働くのが必要だと思ひました、

フム貴樣の大工場で働くといふことは、アノ階段の構造案の實行かな、

御父樣、其階段のことは今は私の案とは申されません、ヲイヤモン君の案と申さねばならぬ譯になりました、と笑みながら答へた、

それはどういふ譯で、

私が發明を賣りましたから、

との一言を聞くと、削りかけて居つた木と道具を持つた儘[illegible]と突立た、そして眼を丸くして叫んだ、

何に賣つたッ、

はい私は自分の發明したことを、唯で人に與る程都合の好い懷を持ちませんから、

ミツシエルは木材も道具も投げ出して、怒りの聲で、貴樣は馬鹿物じや、自分の才氣で其名譽を揚る程の工夫を發明したのに、それを人に賣つて人の名譽にするとは、實に情ないつまらぬ奴じや、

あなたロベールが何か惡いことが有ると申されますか、とゼネビエーブが問うた、

するとミツシエルは激昂した風で、何に惡いことツ、お前の知つたことではない、お前は女じや、自分は彼奴にじや、イヤ彼奴も工業者の新發明を大事にすることは、兵隊の帽章を大切にすると同じこと

で、金錢の爲にそれを他人に渡す抔といふことは無い筈といふこと位は知り居るで有らうに……、イエ馬鹿もの……、若し自分が發明することが有れば、それを賣る位なら、寧そ眼玉を穿取て賣る、工業者の新發明を大事にすることは、自分の子と同樣にすべき筈じや、それを大切にし、それを成長て、世界中にそれを知らせる樣にすべきじや、それを賣る抔とは阿房の骨頂じや、

ロベールは少しく顏を赤くしたが、お父樣何故に私が新案を賣つたかといふことを御承知くださいましたら、御機嫌をお直しくださるでせうと思ひます、さう〳〵お前好くいふたと、最早默し兼ねたと見えて、ゼネビエーブがロベールに左袒した、

どうして〳〵とミッシエルが頭を振つて、ア、悴の不幸じや、それを賣つたも元はといへば我々の爲にしたものと、ゼネビエーブが重ねて言葉を挾んだが、ミッシエルは猶不滿足な顏で、ロベールとゼチピエーブを見詰め居つた、そこでロベールも詳にことの仔細を言はねばならぬはめに成つた、

お父樣久しく住み馴れた此家を大屋さんから讓り受け度と思つて、大屋さんに相談して見たら、二千フランの半額、一千フランは是非現金で貰はねば讓ることは出來ぬとの答でした、そこで私は其一千フランを私の仕事で儲けて、此家を手に入れて、お父樣やお母樣を御安心成さる樣に仕たいと、其以後といふものは心が此事ばかりにはまつて居ましたので御座います、畢竟ウエルサエユの受負師と結托することに成つたのも、此事の爲で御座いました、此受負師の工場で、私の新發明を實驗して見まして、其所で新發明の買手も出來ましたので御座います、其後金を受取て大屋さんへ拂つて、半金のみでは御座いません、二千フラン悉皆出しまして此家全體をお父樣とお母樣のものにして、此通り必要の鍵を殘らず持つて參りました、昨晚參つたのは此大屋さんの内で御座いまして、馳走になりましたのも矢張此大屋さんの内で御座いました、細工場も有ります、食堂も

在ります、客の間も有ります、寢間もあります、これを御覽くださいませと、鍵を父の前に出して、まめ〳〵しく説明した、樂むべき所は十分で惡くいふべき所は少しもない、殊に彼が父母に逆ざかつて居つたのは、孝行の爲で有つて、親の方でのみ個樣のこと丶も知らずに怨んだので有つた、慾の爲でもなく、我儘の爲でもなく、吝嗇の爲でもなく、全く父母を喜ばせたい、父母の爲にしたいとの孝心に外ならないので有つた、彼夫婦の善く子を育てた報酬は今日父母の手へ入つたので有つた、實に此孝子は親の爲に身を犧牲にしたので有つた、

此説明で今まで腹を立て丶居つたミッシエルも、穴が有つたら入りたい程耻しいやら嬉しいやらで、殆んど落涙する程で有つた、女房もロベールも大滿足で有つた、此話の團結の後、彼等は歸らうとした、併し自分はチャンと晩食の用意を仕居つて三人を留めた、

食事が長い時を費した、料理が此日に限つて特に旨かつた、これは愉快の心が料理を旨く食べさせたので有つたらう、自分も此位樂しさうな一家團欒の快樂を見たことは無つた、丸で親子三人の心は一ッで有つて、其利益、其感情、其相互の愛、實に洋々乎として融和せる趣は、畫にも筆にも現はし樣が無い程で有つて、これが人間の人間たる最上の美事じやと思はれた、力とか面目とかいふものも、此間から出て來る、親むとか愛するとか思ひ遣るとかいふことも、此親子兄弟の間でなければ眞の味は分らぬ、此一家は小さいものではあるが、此一家を手本に一國に及ぼして、一國の同胞を個樣に仕たいものじやさうすれば實に人の自らいふ通り神の子じや、自分は世の人に望む一家を結合する愛の鎖を失はざらんことを、此鎖を解かんには、風雨の中に麥束を解きて、其穗を拾收するべからざるが如く、團欒の樂みは得べからざるに至らん、猶望らくは、一家親睦の心を以て他人と交り、其親睦すること一家の如くならんことを、

桃さくら

男爵　千家尊福

若菜少

おほからぬ雪間の若菜からくして
　つむはなか／＼楽しかりけり

雲雀

家路にと急ぐ心をさらにまた
　空になしつる夕ひばりかな

暁鶯

鶯のこゑよりわくる春の夜の
　わかつきばかりしづけきはなし

山家梅

とふ人にうらやまれつるわが山の
　梅はけさこそさきそめにけり

社頭霞

やひら手の音も霞みてゆふしでの
　なびくばかりのおきかせもなし、

松間藤

ふく風にをり／＼みゆる山松の
　木のまの藤はいつさきにけむ

初夏の歌

文學博士　本居豊穎

溪に花見ゆ

谷間にも花咲く見ればうぐひすの
　ふる巣の春はやつれざりけり

呼ぶ鳥の聲をあやしみ尋來れば
　花なりけりな谷のしら雲

新樹風

山青く今朝こそそよげ白妙の
　なびきし花の雲のかへしを

餘花

うぐひすのかへるをまちし山櫻
　こゝろおそしと何おもふらむ

山村夏來

若葉さすわか山陰にうぐひすの
　かへるは夏の來るなりけり

首夏庭

若葉ふく風さへ夏に入りたちの
　よろしき庭とまづ通ふらん

初五月雨

さみだれむ後のこゝろは知らねども
　まづめづらしき月のうすぐも

寫眞術實驗談

井伊直方

寫眞に限らず、すべて物を學び、物を研究することになると、順序も經ず、方法も講せず、早く目的を達しやうとするが、それは甚だよくないことで、一定の方針を以て根氣よく勉强して、目的を達するやうにしたいものである、寫眞術に於ても、充分研究もせず、この器械がわるいの、此の乾板が惡いの、或は現像液がわるいのと、盛んに取かへて、いつも宙宇に迷うて居るやうな人があるが、甲の人が寫せる器械ならば、乙の人に寫せぬことはなく、甲の人が用ひて不都合のない乾板或は現像液ならば、乙の人もそれを用ひて不都合なことはない、そこで乾板にも感光度の遲速、膜の厚薄があつて、會社によつて相違があり、現像液もいろ〳〵種類もあり、處方も異つて居る、されど成るべく一定して置く方が便利であり、隨つて結果もよろしい、

景色の撮影

寫眞から云つても、繪畫の方から云つても、景色を寫すには、三つの要素がある、即ち近景、中景、遠景で、この三つの要素にしてその一を缺げば、その圖は落第したものである、そこで景色を見てまづ注目すべき主要物がある、これは塲合によつて近景にあり、又中景にある事もある、それが一の寫眞になければならぬ、その物によつて平凡にもなり、又

高尚にもなるのである、この外に活動物、即ち犬とか馬とか云ふものが加はることがある、併しこの活動物は、必しも必要ではない、なまじい無味の活動物は、却つて畫面を損する恐れがある、

畫面に於て避けねばならぬことがある、第一對照景と稱して中央に縱線を畫して左右の同じやうな形になれるもの即ち垂直水平を避けねばならぬ、第二物の並行すること、たとへば舟をあやつる棹は、背景の山の勾配と並行すると云ふ如きことで、就中並行線の幾重も重なるは宜しくない、次に注意を要するのは、斜に川などを横斷する場合には、前景がなければならぬ、そは遠近の差をつける爲である、すべて印畫を中斷する、即ち道路を正面に見るやうなことは、視る人に景を狹く感せしむるの嫌ある故、すこし斜にして屈曲のあるやうなのがよい、

前景の取方は、大き過ぎてもよくないが、あまり小さ過ぎては遠近を失ふやうになる、ことに前景をぼけないやうに焼點を合さねば見にくゝなる故カメラは常に人目の高さに立てるやうにしたい、その代り遠景は目で見てさへはつきりしないものであるから、少し位ぼけても差支ないのみならず、却てぼけたる方人に想像をえがゝしめ、人に畫の趣味を感せしむ、繪畫的寫眞の原理は玆に在る、それから前景は地平線と並行してはよくない、

中景、これは常に多く被寫體の在るところである、併し中景を畫面一ぱいにして、遠景の見えなくなるなどは極めてよろしくないことで、中景に立てる木の間から遠景が見えるといふやうな風にする、

以上述べたる遠景、中景、前景の大きさ及び角度換言せばレンズの焼點距離のやり方に就ては、大に印畫の出來榮に關係あるものである、夫から景色を寫すに、天然を注意して、色に迷はされぬやうにする、兎角色には迷はされ易いもので、假に紅葉をうつす、黑布の中へ頭を入れて見た時は、色そのまゝが寫つて居つて、得も云はれぬほど美しいが、これが仕上ると、赤く見えたものと、黑く見えたものが、

一つ色になつて、大に出來榮のしないなど丶云ふことがある、であるからピント硝子から見たま丶で、この圖は美しいなど丶極めてしまふと、大に失敗することがある、

自分がこの圖はよいと信じた場合は、以何なる手段をしても寫して見たいものである、この手段といふとは人々の考で、前から見てよいと云ふ人も、後から見てよいといふ人もある、その他曲線の配合は、その人々に任すより外はない、然し光線の方向には大に注意を要するのである、

初心のうちは、早く寫して見たいと云ふ考が先に立つ、そこに活動物でもあれば仕方がないが、景色が逃げる譯でもないから、充分注意して、目的物に飲まる丶やうなことなく、腰を落付けて、二重うつし或は現像して畵が出來ないなど丶いふやうなことのないやうにしたいものである、

ある熟練家は、乾板の用意を盛んにして、出掛けても一枚も寫さずに歸ることがある、その代りよき圖でもあれば、乾板を惜まず、種々に工夫して撮影する、それが初心のうちは、寫眞に出掛けた以上は、何でも寫さずには居られない、乾板のあらん限りは寫して歸るが、たゞ何でも寫せばよいと云ふ、即ち多寫主義の人は決して上手にならない、それからよい圖があれば、その日の天氣工合によつて寫度の違ふ事があるから、度をかへて二三枚位寫せば、まづ浮雲氣はない、

人像の撮影

これは經驗上、何うしても光線の取り方は、側面と正面と、上からとの三方からでなければ、充分な、見たやうな人物は撮れず、平つたいやうな物が出來上る、光線は直接でなく間接で、ケシ硝子を越し、その前に裂をあてるやうにする、それから背景は三尺以上離すやうにせねばならぬ、さうしないと影など寫ることがあるから、もう室外で撮影する時は、同じく日向ではよくない、大きな樹木の下、或は上を裂を以て日光を遮斷し、光線の來ない方に反射ス

クリーン（木の枠に銀紙又は青色の光澤紙を貼布して代用するも妨なし）を装置し光線の反射を以て、影を軟かくなすの必要がある、

玉は成るべく焼點距離の長い方がよい、さうしないと遠くに離れて大きく寫らない、又早くも寫らない、子供などは早く寫さねば動きたがるから、早くうつるやうにせねばならぬから、次に集合人物を撮る場合には鋭玉は成るべく焼點距離の長きものを用ひざれば、前列の人と後列の人とに焼點を合すに大に苦しみ、遂に不能に終ることがある、且つ人體の大小が一定しないから、あまり體の大きなのや小さいの、又色の白い黑いをさう目立たぬやうに、人物の配置をよくせねばならぬ、如何なる玉で撮つても、中より端は小さく寫るから、大きな身體の人は端に、痩せた人は中の方にしないと、たゞさへ大きい人がより以上大きくなり、痩せた人はいよ〳〵見すぼらしくなる、手を膝の上に置くとか、帽子を何うするとか云ふことは、その人々の嗜好に任す方がよい、

建物の撮影

博覽會へも近頃大分寫眞機を擔いで行くやうであるが、建物を寫すことはむつかしい、博覽會の建物は、繪葉書などにも寫されて居るが、上の狹つたやうな、曲つたやうな寫し方が多い、高い建物を寫すには、寫眞器械を仰向ける、これがよくない仕方で、寫眞器は水平に置き、玉を上下して位置を取らねばならぬ、それからしぼりは成るべくしぼる程明瞭に寫るのである、これは動かぬもので、度をかけるからシャッターを用うる事は出來ぬ、建物を寫す時は、活動物よりはその方が主で、そこに人が往來して、立止りさへせねば寫らない、建物の室内を寫す時は、ハレーションよけの乾板を用ひねばならぬ、又室外より室内の景を通じて撮影する時は室内でマグネシユームを燃けば、室内と室外と明暗の度を一定する事が出來る、從つて寫度も同一にて能き結果が得られる、且つ室内は影の多きもの故、小絞にて十分永き露出を要し、加之室内には床の飾付、其他裝飾品

着色の多きもの故、整色乾板を用ひるやうにしたいものである、

花季の二日

中川愛氷

四月十四日

すざましき風の音にて夜の幕は開く、墨を流したる如き雲は、空一面にひろがりて、花に祟りたる名殘なか〳〵收まらんとはせず、今にも車軸を流さんけはひ、物すごきばかりなるが、けふ博覽會内の女子風俗を撮影せん心構へも、物にならんやうなし、いかにせん方もなく、書齋に引こもりて、二たび時計の音を聞くほどに、晴を祈る歌をつくりしにはあらねど、空はいつしか景色をかへて、雨とはならぬ保證を示し顏なり、さればとてそこ〳〵に仕度をなし、我家を出でたるは午前九時なり、

折からの日曜とて博覽會場は人を以て埋まり、寫眞機など擔ぎ廻はる餘地ありとも見えず、されど折角の計畫を無にせんは、幸に晴れたる空に對してもすまずと、辛うじて女子風俗十二景を撰び得たり、

女子の服裝は、現時女學生の風俗を、前古比なき上乘のものと見るべく、たゞ袴の後姿をいま一工夫を要するのみなり、博覽館内の各店員は多くはこの女學生風なるが、それにてはあまり智惠のなき話と、更に意匠をこらしたるもの、さてこの姿を流行せしめんと思ふにもあらねど、少しにても變りたるは人の目にも映じ易く、これを一つに集めて見るも興なきにあらねば、視察したる圖を本誌卷首に插入することゝせり、その風俗の變れる特長を記すれば、

紋付に赤前垂したるもの(一)紋付に袴を穿きたるもの(二)筒袖に袴を穿きて胸掛をなしたるもの(三)友禪の振袖に袴を穿きたるもの(四)改良筒袖に袴を穿きたるもの(五)洋服に改良胸掛をなしたるもの(六)襷に揃の前垂をなしたるもの(七)片襷に揃の前垂をなしたるもの

(八)黒襟前垂の茶汲式なるもの(九)洋服を着けたるもの(十)支那風なるもの(十一)露國風なるもの(十二)等にて恐らくこれ以外に變りたる風俗はあらざるべし、これだけの風姿をつくるに、幾人かの頭腦を煩はしたるなるべく、風俗改良のむつかしきは推して知るべし、いづれも多くの客を引うけて、目も廻らんばかりなるを、數時間中に撮影したる工夫に至つては、天機洩らすべからず、

　午後三時予は司法記者の一員として、精養軒に開かれたる辯護士大會園遊會に招かれて行く、この日は松田法相以下各司法官も賓客として來會したれば、法曹界の名士雲の如くあつまり、鳩山博士の之を一團として同僚と呼びたるは時にとりて愛嬌この上なく、横田檢事長の辯護士にふりまきたる世辭の堅固しきと好對をなせり、餘興數番、神妙に見物せる髯顏には、權利義務を爭ふ風情更になく、各摸擬店に意外の晴を喜ぶ光景、日の傾けるも知らぬものゝ如し、やがて立食は始まり、一しきり一段の賑ひを呈せしが、やがて一人去り、二人去り、食場を出づるを待受けて見物するものまた少からず、さすがに物見高き東京なり、予も見らるゝ數に入りしか、覺束なし、この盛會を見るにつけても、予等婦人記者倶樂部の振はざるに汗顏たらざるを得ず、婦人記者倶樂部の振はざるは、女子教育の振はざる一證たなり、女子教育は振はざるに非ず、眞面目ならざるなり、三輪田眞佐子刀自の如き、小川直子刀自の如き人にして退隱する時あらんか、その人格を師と仰ぐべき後繼者いづれにか在る、さるにても法曹界に其人の多きことかな、

　四月十五日

　今日は一日の閑を得べき豫定にて、市川の梨花を見るべく、同地の福地清六氏に約あり、時は事と齟齬して小閑すら得ず、されど此朝頭甚だ重く、例に依つて早天床を出づれど筆を持つべき勇氣なし、如かず約を踏みて頭腦を一洗すべしと、これを友人渡邊黍一、公文剣仙兩君に謀る、渡りに舟とて、忽

ち談一決し、三錢電車の間に合ひたる機敏さは、我ながら感服せざるを得ず、兩國の停車場に至れば、これも待受けたらん如く、直に發車す、人生萬事斯の如くならんことを望むや切なり、本所停車場に至る高架鐵道、左右に櫛比せる屋根瓦を見るも興なきに非ず、右は家並の優れるを、左は齒の抜けたる如き中にも花などの咲けるを誇るが如し眼下一眸、強ち蟻の生活をも笑はれぬなり、東京を離るゝに隨つて、塵氣次第に去り、菜花蝶を送つて散り、南風の麥綠に薫する、菊仙畫伯の口吻より云へば、畫も云はれずと評すべし、頓て市川驛に着す、



直に清六氏を訪へば、老夫婦は云ふ、早天梨園に行けり、けふは中山は殊の外賑ふ、されど時刻は早し、緩々足を休め、晝飯にても終へて行かるべしと、款待あしきにあらねど、約を履みて來る我を待つものとは見えず予は意外に感じたれど、農家の多忙を妨げんことを恐れ、されば又こそとて同家を出で、道を轉じて同地の梨園を賞すべく、茱茶亭に憩ふ、

園は二段となり、上段には桃花漸く褪せて、多く賞するに足らねど、樹下には一面の菜花今を盛りにて、色彩の調和極めて、妙なるに、下段は梨花綿を

綴れる如く、樹下には小麥の青々として生ひたる、その美しさ譬へんに物なし、茶亭は桃花期にのみ設けられたるにて、この日を以て閉亭するなりとか、桃には遲れたれど、か丶る日に來客したる爲、他に客なく、同行三人廣き園內の中央に床几を敷きて、あたら好個の風景を獨占し、茶を啜り、文を談じ、鳥鳴いて晝いよ〳〵靜かに、暫く我あるを忘る、茶亭に一少女あり、名を問へば後藤さよと云ふ、應答頗る明瞭、些の邪氣なく、彼が東京に梨を鬻ぐ光景を敍するに至つては、その勞働を樂む狀態鞠仙畫伯を煩はさゞるを得ず、既に辭せんとする時、園の入口に一團の客あり、その一人桃花に短冊を結ぶ、心にくき事かなと、之を見れば彼はいよ〳〵得意なり、その句に曰く、

　市川の桃に添へたるきぬかつぎ

　予は度强のよきに感心したり、園を出で丶數丁、淸六氏は予等一行を尋ねて、眼を皿の如くせるに逢ふ、氏はよき處にて逢ひたり、今日の貪來は承知せるも、例によつて午後なるべしと思ひ、僅かの時間を梨園に貸したる不念さよとて、直ちに予等を促して氏の梨園にいざなひ、こ丶にて又數時間黃白にては得べからざる待遇を受けたり、この園はや丶高所にありて、東に眞間の大松予を招く如く、市川の歸帆は色彩に富める園畝の間を高く縫ひ、西は林立せる松間の桃梨、恰も紅白の幕を張れるが如く、好絕佳絕、興の盡くるを知らず、午後三時漸く愛を割いて歸途に就く、これにても近縣旅行なり、三十分の道程早くも兩國に歸着きぬ、

　それより本日招待を受けたる博覽會の宴會に出席す、まづ演戲場にて、餘興數番を演じたるが、新吾妻八景、作歌は極めて拙なれども、曲と振は流石に專門大家の手に成りたるものにて、頗る面白きものなりき、午後六時貴賓館にて立食の饗應あり、當日予等に贈られたる菊花の徽章は、定刻を過ぐるも會場に出入するを許され、既に閉館せんとしたる水族館に入るを許されたる如き、所謂お上の威光は大し

たものなり、特にこの夜は各舘に菊花をかざれる團體のみにて、第二會塲を占領したるは、前刻我等一行桃梨園を占領したると同じく、いさゝか得意ならざるを得ず、歸途觀月橋を渡れる時イルミネーションの價値更に一段を加へ、英雄には近くべからず、富士に登る山にあらざるを、今更ながら繰返されぬ、

陸奥みやげ

石榑千亦

たそがれの草川堤妻さへに、ちからおはせん船の綱ひく、

汽車を長み書にも倦きて知らぬ人の、知らぬ話に耳傾くる、

家毎にいさゝ小川の水をひきて、あやめ植えたりくさぶきの里、

海にはしる水を入れじと河口に、波かきなしておしよせ來る、

雨しぶくはしまのゝしまゆれにゆるゝ、船窓の中に見えかくれする、

松島の松雨紛の中に入りて、夕ぐれ寒き船のうへかな、

影くらき燈火のもと今にして、われ旅なりと思ひしりぬる、

眠らむに時はみぢかき汽車の中も、人いねし見ればいねまくぞ欲しき、

とのぐもる大河口の潮けぶり、船をおほへり恙あらすな、

大樫の櫂さへしはる河口の、波かきいづる人すくひ船、

漂ひし船に綱かけえい〳〵に、ひきぞよせくる波をしのぎて、

たゞ一つとまどひいでし蚊の聲の、耳にあまりて眠られぬかな、

こゝにふる雨は雪かも岩手山、雲よりもれて白くかゞやく、

桑畑の桑はふたゝび青くなりぬ、夏蠶かふべくなりにけらずや

田うゑすと列をつくれる小菅笠、みなあふむきて滊車を見送る、

村といはゞ村といはれむ草屋根の、四棟五棟桑の上に見ゆ、

さゝ濁る田川の水になであげて、束ねらぬ髮をあはれとぞ思ふ、

田の畔のくれなゐの花こかねの花、つみて子は待つ苗うゝるまを、

歸りましてほめたまふべき一言を、うれしと妻の田をすきかへす、

馬おひてすけどもすけど手弱女の、力をよわみ鋤のはあさき、

見れど〱はてもわかれぬ桑畑の、桑の中なりひな唄の聲、

君と二人つみて與ふる桑の葉に、かひこは安く繭ごもりすも、

くり舟の主人よいづら小屋の前に、ひきあげられて四手網かゝる、

岩角のかりそめ小屋にのぼるべく、水よりかけしかつら小はしご、

馬にのりて馬をひきし小女山、そひの川そひ道を徐にゆく、

花の夢今かさむらむ杉村の、色なき枝にうぐひすのなく、

落し日の名殘あせゆく杉村に、なほ鳴きしきる鶯のこゑ、

わが船のまはりいさゝか殘しおきて、狭霧になりぬ大わだの原、

わが船のたゞ目の前にきるが如き、岩島たてりたゞ目の前に、

きかぬ帆をさながらかけて釣舟は、雨の代が崎漕ぎなづむ見ゆ、

桑の木の幹のみ殘る畑の井に、胸乳あらはし水汲むは誰ぞ、

雜錄

有形と無形

文學博士　村上專精

一體吾々は、形のある事には至つて氣が附き易いが、形のない事には頓と氣がつかない、又理窟では知つて居つても、形のある方には心が傾き易いもので、形の無い事には心が傾かないのが、人間一般の習慣である、併しながら何事でも有形と申して形ある事柄に、無形即ち形のない事柄が附いて居る、乃で此二つの調子が工合よく揃つて行かないのは、眞正でないのである、

先づ形のある物と無い者とが寄合はなければならないのは、第一に吾々人間である、人と云ふものは如何なるものぞと質問して見れば、學問上の深遠なる説は姑く措いて、現はれた所から考へると、人間には形のある身體即ち肉體と、形のない精神即ち心と、此二つの寄合うた者が、吾々人間であると云はなければならぬ、然るに若し形ばかりあるから、是は人間であると云ふならば、これは造つた人間であると云はねばならん、其れで宇宙世界を通じて、有形の物質と、無形の精神と、此二つが揃はなければ完全なる一箇人と云ふ事は出來ない、ドンナ上流の方でも、卑賤な人でも、貧乏でも、金滿家でも、文明人でも、野蠻人でも、人間は一切有形無形の調和物である、

第二に有形無形の調和たる人間の食物に付いて考へて見ると、是にも亦有形の肉體に供がふ食物と、無形の精神に供がふ食物との區別がなければならん

これは釋迦如來が云はれた事である、其釋迦の出られた頃は、印度に九十五種の外道抔と申して、種々雜多の宗教が行はれて居つた、其多くの宗教の中には、人間が食へる者も食べずに餓死するのを、宗教の本色の樣に思うて居る者もあつたので、即ち苦は樂の種、樂は苦の種と云ふから、人間は何んでも苦まなければならんが、其苦の中で、食物を減ずる程苦しい事はないから、と云ふ所から、食物を減じ餓死するのを以て、人間の本分として居たのが、所謂苦行外道である、乃で釋迦は之を救はんが爲に、人なる者は宗教家でも無宗教家でも、一般に食物によつて生存するのだから、此の食物は極く必要である而して人は又有形の身體と、無形の精神とが寄合つて出來て居る者だから、食物にも有形のものと、無形の物との二た通りなければならん、と説教せられた、

其で佛教は此の食物を、段食(有形)觸食、意志食識食(無形)の四通りに分けて居る、先づ第一の段食とは、有形の物を云ふので、形のある物はどうしても一時に腹に入れることは出來ない、鳥渡湯を呑んでも一口々々飲込んで送らなければならぬから、此の名をつけたのであるが、此外人間は空氣を吸はねば生きて居られぬ、其故に是等も無形食物の一つに屬するのである、而して此空氣は吾々の精神を養ふものか、形を養ふものかと云へば、精神にも影響を與へるが、先づ多く形の方を養ふのであるが、兎に角人間の食物には能く注意しないと、害物と滋養分とがあるから、成るべく惡いものを除けて、宜い物を食する樣にしなければならぬ、

其れで吾々の身體を養ふには、段食が必要であり精神に營養を與へるには、無形の食物即ち聖賢及び佛陀の敎や、神の敎等が必要であるから、若し之を充分に與へないと、忽ち精神に不道德など丶云ふ病氣を起す、

人間に男女の二類があるに就ては、如何なるものを男子と呼び、如何なるものを女子と呼ぶかと云へば、是にも有形の男女と、無形の男女が別れて來な

ければならぬ道理がある、斯様な事は私が今工夫したのではなく、涅槃經を披いて見ると、此の事に就いてかく云つてある、佛教の方では佛性と云ふ事を申すので、釈迦何人ぞ、吾何人ぞ、世界の人間はドレ程野蠻でも、ドレ程賢くても恐るべき者はない、玉磨かざれば光出ず、人間も磨かないから野蠻だが、若し磨けばドンナ立派な者にもなれるのが其天性で



世界の人は斯様に結構な性質を、個人々々に備へて居るのである、一切衆生悉有佛性と説いて、之を發見けると共に、其佛性を發育して磨き彰す時は、假令身體は女子と雖も、其勇氣と器量は男子であり、若其佛性なるものを發見けるも、之を磨き彰す勇氣も器量もなければ、肉體は如何に立派なる男子でも皆女子であると云ふ事が佛教にある、西洋の事は姑く措き、之を東洋の風に應用して私が考へれば、體格上男女の區別は腕力の强いのが男子であり、腕力の弱いのが女子であつて、是は生理上止むを得ざる事である、乃ち戰爭をするとか國や城を攻取ると云ふ方になると、ドウしても女子は男子に讓らなければならぬ、所が精神上から男女を區別することになると、ドレ程體軀の力が弱くても、精神の力と根氣即ち意志の强いものは男子であ

り、どれ程身體が大きくて、二十貫目も三十貫目もある物を運搬し得る力があつても、自分の天性を磨く事も出來ず、仕様と思つた事を爲し遂げる事も出來ない者は、假令其身體は男子でも、精神は女子である、

右の如く大勇氣があつて、一身を抛つても事を爲し遂げる者は男子で、之と反對に精神の力即ち意志の弱い者は無形の女子であると云ふのが、釋迦の說經を應用した話であるから、敎育も家庭から初め、遂に其れを成就するに至らしむるのが、婦人の事業で、而も其精神は男子と云ふべきものである、

男女孰れに就いて申すも醜美の區別が出來て居る併し其醜美と云ふのは比較である、之にも亦有形と無形とがあることを考へなければならぬ、然るに只容貌ばかりの醜美を見て精神上の方を忘れてはならないが、人間の弊であるから、男子でも女子でも兎に角外面ばかりに、心を注いで居る、乃で如何なるものが精神上の醜美であるか、

世の中の人間は兎角心の美人にならうと云ふ事を忘れ、容貌の美人になる方に屈託して居るが、それは大なる間違ひである、容貌の美なるは天然だから更へる事は出來ないが、心は自分の考へ次第でドウでもなるから、精神の美を磨かせるのが宗敎ばかりではない、敎育の本旨である、

前述の如く女子の品位を高くするには、容貌の美を競爭するよりも、精神の美を固くする樣に注意しなければならん、婦人方が容貌の美を競爭する中は決して女子の價値は上らない、所で若し其れが改まれば、單り其の價値が上るのみならず、國家の爲にもなり、社會改良の基にもなるから、心の美を養う事に力めたいものである、

次に身體の外部を被ふ衣服に就いての醜美にも、有形無形とに別たなければならぬと思ふ、斯う申すと妙に附會る樣であるが、有形の衣服の醜美は云ふ迄もなく、世俗一般の者が之を爭つて居る、けれどもそれは只ホンの外部を被ふ衣服だから、其樣な事

は忘れて了ひ、無形の衣服に就て競爭して貰ひたい、女子は男子に比較すると、衣服の考へが深い樣であるが、有形の物よりも、無形の衣服に就て競爭する事を望むので、何でも世の中の者は揃つて行かなければ、はづかしいと思ふ情、是は人間に取り大切な心の衣服である、元來衣服の目的は、衛生上にも大層關係して居るが、併し裸體では他から見て不體裁だから、外見のよい樣に仕樣と云ふ點にも在る、乃で有形の衣服を飾ると共に、無形の衣服、即ち慙愧の念もなければならぬ、固より衣服は寒暑を防ぐ事を始として、世界に於ける人間の段階を表すに必要な者で、宗教家は宗教家、軍人は軍人、女子は女子と各其格を保つと云ふ樣に、種々の方面に使はれて居る、それと同樣に人間が社會の秩序を紊さず、各其品位を保ち、人として人たらしむるに必要なる者は慙愧の情である、然るに若し此の慙愧の情がなかつたならば、人間は宛然豚の比類になつて了ふ、如何なる家にでも、必ず親子兄弟夫婦の階段の差別がある、僅か一軒の家ですらそれであるから、況い社會の上に階級があるのは當然である、社會は不平均である、人間が集つて家族をなす、然るに若し其れが皆同じ心になつたら、一家は保つことは出來まい、譬へば家屋にしても柱も要り、敷居、鴨居も要り、床板も要ると云ふ樣に、種々雜多な材木があつて、各自の職を守るから、其不平均な所で、一つの家屋が整然と立つて居るのである、人間もそれと同じ事で、兩親は兩親、若い者は若い者、男子は男子、女子は女子と、各々資格を有つて居るから、一家族が立つてゆき、社會全體も旨く治まるので、若し之が壞れて了へば、モウ何うも仕方はない、然らば各自其分限を守つて行けるのは如何なる譯であるかと云ふに、是は慙愧の衣服を心に被て居るからで、若し此慙愧羞恥の情がなかつたならば、家も社會も滅茶苦茶で、殆んど豚の生活の樣になつて了ふ、即ち父子親あり、君臣義あり、長幼序あり、朋友信ありと云ふ、其れを保つて行かれるのは、只此の羞恥の

情一つで、之を有つのが人間の天賦である、犬猫の中には人間にも勝る程怜悧な物があつて、よく人言を聴き分けるとか、使を上手にするとか、斯様な能があつても、決して彼等に羞恥の情は見えまい、人の前だから謹むと云ふ事はない、何か食物でもあると、直ぐ其れを取らずに居る事があるのは、人の前だから叱られ様かと思つて控えるので、耻かしいのではない、所が人間ばかりは然うではない、まだ教育を受けない前、即ち學校にも行かぬさきから、一種の耻かしいと云ふ情を有つて居る、少し言葉でも云へる様な子供に、他所の人が見て居るから、と云へば飲んで居る乳も止める様なもので、アレは即ち慙愧である、所が或場合には人間が斯情を失つて、ドンナニ他から笑はれても、悪人と誹られても何とも思はない、二犯三犯罪を犯し監獄に往つても、徴役に遣られても平氣で居るのは、折角持つて生れた羞耻の衣服を脱ぎ棄て、裸體になつて了つたのである、

斯の通りですから、人間はどうも慙愧の衣服を厚く重ねて着なければならぬ、斯の情が強くなれば、心の美は進まず、開け放した話であるが、人間の心は兎角汚いが耻かしいと云ふ情があるから、爲たい事も云ひたい事も控えて居るので、是は自分に對して謹まなければならぬが、女子だから嗜まうとか思ふのは慙愧である、若し人間が内部の本心から立派になれば之に超した好い事はないが、迚もさうは行かないから、切めては外形丈でも謹むので、即ち心に慙愧の衣服を着なければならぬ、

孟子も亦耻づるは勇に近し、と云つて居る、人間は耻かしいと思へば奮發心が起き道徳とか品行とかと斯點から發るのである、然らば其慙愧羞恥を養成するには、ドウ仕たら宜いかと云ふに、斯情の引立方は種々あるが、先づ成るべく立派な人と交際し、成べく立派な書を讀み、成べく平素立派な話を聴くと同時に、成べく立派な聖人君子を、吾々の精神の朋友に仕なければならぬ、然うすれば自然と慙愧の

情が起つて來る、人間は妙な者で、身丈の高い人の側に行けば自分の身丈の低いのを感じ、それで平素の見聞を初めとして、己より立派な人に接する事と今一つは自分一個と云ふ考へを止め、何でも我することは、全世界の人が掌を指す如くに見て居ると思ふ事が肝要である、人間が惡事をする時には、全世界の人を無視し、吾一人と思はなければ出來ない、右の如くであるから、慙愧の情を起すには、世界を目開きにして、吾が擧動を鏡に照らすが如く、多くの人が視て居る、假令人間が視ないでも、因果の道理が視て居る、神が視て居る、壁に耳あり、德利に口ありと思はなければならぬ、（文責在記者）

閑窓自戒

荒濱ゆう子

一

同じ谷間の水にして、渇ける旅人の之を汲めば、こゝに甘露の味あり、一菜の粗食も、飢うる者之を食しなば、山海の珍味と毫もえらぶ所なし、いたましき嚴冬の烈寒に堪へてこそ、始めて陽春のいかばかり美妙にして快樂なるかを知るべけれ、一日よく刻苦勞働するものにして、始めて夜半の安眠の如何ばかり愉快なるかを知る、實に辛苦の涙と憔悴の憂とは、やがて快樂混々の泉となるなり、誠に辛苦の涙を味はず、疲勞の味を知らざるものには、すべて世の快樂と興味とは隱蔽せらる、彼快樂の家にありとも、自ら其味を悟らず依然として不平を懷き、不滿を訴へてやまず、さながら聾者が抑揚流轉の音樂をきくとも、その美妙なる音聲は耳朶をうたず、盲者が名勝絶景を採るとも、たえて奥妙の風趣を悟るなきが如けん、それ世界は、あまたの全人類が勉勵耕耘して種子を蒔くべき、無邊の田圃なり、多くの涙と勞苦とをもとめてあまたの種子を下すものは多くの悦ばしき快樂の束をからん、

二

平和快樂てふ色香ふかき花は、善てふ根の培養より開くものなり、心常に善を思ひ德をつみなば、期せずして此の美花は身に咲かん、心の樂まず平かならぬを、果敢なき世の娛樂もて醫さんとするこそ愚なれ、眼膜花月の影を映し、耳口美韻珍味にふれたればとて、など心の病かたなく癒ゆるべきかは、かく益なき事にあたら時を移さんより、一善をなすを急ぐに若かず、

三

世上あまたの娛樂、何ぞ限りあらん、されど、根なきに咲く花、それ幾時をか保つべき、憖に之を摘みて、枯衰の悲哀を買はんより、自ら汗を流して、永久不枯の快を造れ、なべて快樂てふものは自ら世の表に備れるものにはあらじ、吾之を造るなり、造らざればなし、快樂なしとて、かこつ吾が心こそ愚なれ、

四

思へば徒事をのみ悲しみ、空事をのみ憂へしが、自ら顧みれば、赧然として、轉た己が暗愚なるをはづるのみ、そも內に省みて疚しからずんば、はた何をか恐れ、何をか憂へん、たとひ世人の吾をすつとも、捨てらるべき謂れなかりせば、天豈に吾をすてんや、さもあらばあれ、不淨汚敗の世、變幻不足の世、何ものかよく依倚の價かある、迷霧・蔽烟をうちはらひて、よしなき虛事の煩悶をせざれ、只自省もて正義の軌道をふみまよはぬやうにつとめよや、

五

毀譽褒貶とは、色みえてうつろいやすき人の心の、誠なき唇を排して出づる虛しき呼吸なり、ほめらるゝとて嬉しからず、誹らるゝとて悲しからんや、

六

ほめらるゝを慕ひ、誹らるゝことを忌む、これすべての人情の常なり、されど、こは小人の心にて、至人豈にこの範圍にあらん、それほむるもの、そしるもの、またいづれか僞ならざる、昔『吾をほむるは、我短を知らざるなり』といひけん聖人ありしとかや、

まこと己を知るものはげにかゝるべからん、さるをほめらるゝに鼻をうごめかし、破顔をたゝへて自惚を知らず、また誹にあつては、いたみ悲しむなどこそ、實に愚かしき業なれ、誠に德至りなば、譽も、誹も、吾に於て何かあらん、

七

人に親切をつくし、或はものを與へ助くるなどせんに、報を願ふ心あるべからず、吾よく接せば、彼も吾によからん、吾與へば、愛慕吾に至らん抔、之をなすに先ちて報を思はゞ、是れ心の商人なり、たとひ美善の擧行なりとて、豈嘉するに足らんや、凡てものに報酬あるは、自然の則なり、願はずとも至りぬべし、只之をなすには、道によりて爲すべし、

八

山上にありては山容を知らず、漁場にありては魚臭を知らず、己を知り、その缺點を悟ること、それ已にかたし、これ只、人の直言と諫言とによりて、知り且つ正すべし、悦びて之を容るゝを雅量といふ豈に得まほしきことならずや、

九

人と交はるには、人をもて、己が美醜をうつす鏡となすべし、人吾に不正ならば、之を吾が形とも見て、直に己を正しくせよ、人吾に無禮ならば、省みて自らを恭々しくせよ、誰か温顔に向ひて粗暴の擧動するものあらん、誰か敬言に對して、劍舌を振ふものあらんや、これぞ實に和平と克己との階段にぞありける、

應接時間

山田素衷

時間を以て起き、時間を以て寐ね、時間を以て働き、時間を以て休むと云ふ規律ある西洋の風習は誠に羨望に堪へざる次第なり、若し他の長所は取るべきものとせば、此等は最も先づ執つて以て我が所有となすべきものなるべし、然るに實際に於て我が社

會はまだ〳〵其域に達せざるの遠きは誠に殘念なる事どもならずや、

然し世の活劇場裡に投じて業務にたづさはる人は其人に於ても家庭に於ても、割合に時間立ちて自から規律も備はれるを見る、左れど尙ほ一歩を進めて其實際の樣子を見る時は、己れ自ら時間を定め、規律を立てゝ之を利用すると云ふにあらずして、我却つて時間に追ひ立てられて使はるゝ事宛から奴僕の如き狀態なきにあらず、試にかゝる家を訪問し見よ主人と謂はず、妻女と謂はず、其雇人に至るまで少しも落着きて用談を果すはなく、左顧右眄彼に就き此に走り、且語り且起ち、殆ど訪問者をして茫然として據る所なきに苦ましむる往々なりとす、其如何に齷齪たる狀の見え透きて見苦しきことぞ、畢竟するに自ら時間を立つるにあらずして、却つて時間に驅使せらるゝの弊に出ずるものなり、

時間の規律なきは固より宜しからず、然れども時間に追ひ使はるゝも亦宜しとせず、想ふに今の世間は極端と極端とにあるが如し、規律なきは其不規律の極端に居り、規律ありと見ゆるは亦其規律の極端に在りて遑々として毫も餘裕あるなし、夫れ時間を徒食すると過食するとは其靈形に及ぼす病弊は相同じきものなり、前者は怠慢より生ずる諸種の疾病を釀し、後者は過勞より生ずる病に陷るにあり、前者に就いては吾人今言はず、唯後者に向つては一言の勸告なきを得ざるを覺ゆ、

日曜日制度を確定する事は實に社會改良の一大根本なりと雖も、之も今論及せざるべし、少くとも吾人は應接の時間を設くる事を以て今日の急務となさゞるを得ず、日常業務上の用談は多忙なる今日簡にして要あるを尙しとすべし、然れども人は決してパンの事のみにて生くるものにあらず、取引以外別に人情の世界なかるべからざるなり、假りに人はパンの事のみにて生くるとするも、用件には十分にして言ひ盡し得るもあり、一時間を要するもあるが故に時と場合に依りて之に應ずるの餘地を備へ置

かざるべからず、然るに何事も一山百文的に即談即了を以て專一とするに於ては、人間の交際之ほど無味なるはなかるべし、況んや親戚朋友等の交際に至るまで、此流義を以てせんには人間何處にか樂を求め得べき、又如何にしてか世を保ち得べき、人間社會の中心は固と其交際に依りて保たるゝものなり、若し交際にして絶へん乎、社會は其中心點を失つて四離五裂終に全からざる猶は天體の引力平衡を失はゞ破滅すると等しきなり、少くとも交際日に疎にして我れ我たり、人、人たるの狀態とならば、何を以てか家庭の和樂、社會の進歩、人類の幸福、世界の平和など期して待つを得べきぞ、一切唯滅亡あるのみ、

故に多忙なる人は多忙なる丈け一日中に應接の時間を設けざるべからず、少くとも一週日中に適宜の日を定めて應接の時となすを要す、斯くの如く定め置かば訪ふものも無駄なる足勞をなすことなく、訪はるゝものも不時の暇潰しを爲すことなく、用談も相方十分に其意を盡し得て、後にて間違などの生ずる憂も少きに至り、且交際の情味も遺憾なく酌交し得て、辛き世にも花咲く世界あるを覺ゆべし、斯かる餘裕を保ちてこそ我は時間を守ると云ふべけれ、然らずんば規律あるが如く見えて其實は其奴隷たるなり、

斯くの如く一日若くは一週中に適當の應接時間を設くる事は、固より其家の業務にも由り、主人たる人の都合にも由ることなりと雖も、亦一家の主婦たる人々の心得方にも大に與かることなりとす、通常如何なる多忙の家にありても、男子の頗る忙はしきに係はらず、婦人には割合に閑暇多きなり、若し其割合に多き閑暇を男子の勞に加へたらんには、それだけ一家に餘裕を生ずべき筈なり、吾人は固より婦人をして男子同樣の勞力に服せしむるの意にはあらず、唯婦人相應の事務を負ふて多少なりとも男子の勞を補ひ、斯くて主人として客に接して十分用務を辨ずるの遑あらしめんこと是なり、多忙なりと言ふ人、願はくば必せよ、

武子女王殿下の御謝辭

學習院女學部にては四月四日卒業式を擧行せり、當日皇太子妃殿下より御使として、本多東宮侍從を差遣され、常宮、周宮兩內親王殿下にも御臨場あらせられ、參列者は牧野文相同夫人、德川公同夫人、千家府知事夫人、近衞公母堂、木戶侯夫人、鍋島侯德川伯同夫人、杉樞密顧問官、藤波主馬頭山口圖書頭其他生徒父兄等にして、午前十時一同式場に着席、學生一同、皇后陛下御製の唱歌『金剛石』『水は器』を合唱したる後、下田女學部長は、昨年四月并に本年四月卒業生に對し、證書授與の旨を報告し、院長乃木大將は北白川宮武子女王殿下に、御卒業證書を捧呈し、後ち昨年の卒業生五十五名、本年の卒業生五十八名、及別科修了生一名に證書を授與し、次に小學科五年級御修了の北白川宮擴子女王殿下、同二年級御修了の伏見宮恭子女王殿下に御證書を捧呈し、次に小學科の證書を授與し、畢て乃木院長は謹嚴なる口調を以て、式辭を朗讀し、次に下田女學部長の告辭あり、次に北白川宮武子女王殿下は、左の謝辭を三十九年四月卒業生總代として、御朗讀遊ばされたり、

いはまくも恐けれども、我皇后の宮の筑波峯のかげよりも深き大御惠もて、この學びの園を開きたまひ、春をまちえて匂ひ出づる梅の、花もあり實もある人となれかしと、我等をさとしたまひぬれば、諸々の道の師も、恐多き御心を心として、永き年月倦ミず挑ます、教へ導きまゐらする惠によりて、我等去年の春中學科の業を卒へ、更に專修科に入り、いよいよ學びの道深く分け入らんとつとむるに、今日しも此嚴かなる式を擧げられて、中學科卒業の證書をたまひぬ、我等の喜びはたいかなる言葉もてかのへ盡さん、濱の眞砂の數はよむとも、思ふ心はつきじ、只我等今より後も、猶恐多き御かげをたのみ奉りて、いよいよますます學び草、つみそへつゝ、吳竹の世にも出でなば姫松の、みどり深く千代のほまれもたてゝしがなど、ひそかに心に誓へり、さらばかしこきみさとし言にもたかひまつらず、師の深きなさけにもそむかざるべし、拙き一言をもて今のよろこびを聞えあぐるになむ、

明治四十年四月四日

北白川武子

次に卒業生總代兒玉仲子の謝辭あり、最後に學生一同は唱歌『秋の宮居』を合唱し了りて、式場を退散したるは、十一時なりが、當日卒業證書を授けられたるは、百十四名にして、來賓は式後生徒の製作品並に成蹟品を觀覽し正午退散せり

蜘蛛の觀察

雲濤山人

花笑ひ鳥囀るの候となり、郊外に逍遙し、天然の美に接して、眼を樂ましめ、足は疲れて、さて一休みとすみれ、たんぽは咲き亂れたる堤に腰をおろす時、黑色の八足せる節足動物が、先を競つて逃げるを見ましよう、これはふくろぐもと申しまして、所謂蜘蛛の子を散らすが如しと云ふのは、このふくろぐもの逃ぐる樣を申したのでしやうが、これは巣を造らず、漂泊してあるく蛛蜘であります、次に夏の夕方など涼しき庭に出で、樹木などを眺むれば、松の枝より梅の枝にと、忙はしげに一生懸命で巣を造つて居ふ蜘蛛をみとめますが、三番叟の帽子に似たる所から、三番叟蜘蛛と申しまして、美しき縞があります、これは巣を造る蜘蛛の一種であります、眞正蜘蛛類中ではこの二種、即ち巣を造らず漂泊性のものと、巣を造り獲物あれかしと待ち構ふるものとが、尤も普通、目に觸るゝものでありませう、

一體蜘蛛と申しますは、形の醜き毒蟲と人々に忌まれますが、博物學的の趣味を屬して觀察致しますれば、頗る面白い事實が澤山あります、今巣を張る方の蜘蛛に付きて、二三の事實を述べましやう、

◎巣の張り方　蜘蛛の樣な小さき蟲が、如何にして四尺も五尺も離れたる枝から枝へ、連絡を取るかと申しますれば、場合にもより、又種類によりて異ろでしやうが、尤も普通は先づ、蜘蛛自身が一方の枝に、長き糸によりて釣り下がり、尾端の紡績器から數多の糸を續ぎ出し、飄々と風に吹かして居る中に其中の一本は他の枝に引きかゝることは容易なことである、さればこの一本を傳つて、こゝに兩枝間に連絡を得、愈々巣を造り初めるのであります、先づ第一には、方射狀に縱の絲を張ります、第二には中心部から遠心的に、粗末な足場として横糸を張り、足場を外周まで張つて了れば、第三として最外周より求心的に、中心の方に眞の横系を、丁寧に幾何學

的に張り、足場に用ゐたる糸は、漸々と口に集めて丸め、中心にきて放棄してしまふのであります、斯くの如く美はしき蜘蛛の巣が出來ますが、西洋の應接室などの天井は、蜘蛛の巣の模樣を以て飾らるゝのが往々あると聞きますが、無意味の模樣に比して頗る妙味があると申すことです、

◎糸の觀察　巣糸を能く注意して見ますれば、何所も同じ糸にて出來て居るわけではなく、二樣の糸から出來て居ります、即ち方射狀に張られたる糸は、一樣の大きさをなしたもので、少しも附着がありませぬ、一匹の蠅を捕へて縱糸に觸れても、少しも附着せず、之に反して横糸は如何と見れば美はしく光つたる、無數の粘液の球が、一直線に連なつて、恰も念珠の如くなつてをるが、この粘球が附着力を有して居るから、先きの蠅を横糸に觸れば、忽ち附着するのであります、要するに縱糸は、横糸を支ふるの用あるばかりで、捕蟲の作用は、横糸によりて完くせらるゝのであります、

◎巣中の蜘蛛の位置　完全に巣を張り了りたる蜘蛛は、巣の中心に居りて八本の足を二本づゝ揃へ、恰もX狀をなし、頭を地の方に向けて、靜に獲物あるを待つのである、或種のものでは、中心部の附邊に、太き短かき白糸の束の如きものを三四本備へ、以て已れの體の所在を晦ますものもあります、

◎紡績器　蜘蛛の尾端には、六個の紡績突起と稱するものがあつて、各紡績突起は恰も篩の如く、數多の小孔を有して、この小孔を通過して粘液が分泌せられ、空氣に觸れて後、糸となります、

◎蜘蛛の特種　蜘蛛の雄雌は一見して殆ど區別がつきます、雄は雌より身が甚だ小さく、觸鬚の先端が棍棒狀に膨大しをるが、これは交接の用をなすのであります、雌は雄より體が大きく、觸鬚が膨大してゐないから、雄とは區別が出來ます、蜘蛛は、雄と雌と、極めて仲の惡き動物で、決して同じ巣に住むなどのことはありませぬ、雄雌のみならず、親と子、仲間にも少しも群居を好むなどの性なく、出會は戰

闘を初めるものであります、極端なる孤獨主義であります、それだから交尾の期に於ても、容易に相近くことは出來ず、近づきたる雄は、雌の顎に殺さるゝことが往々あります、斯の如く極端なる孤獨生活をなすの動物に於ても、子孫繁殖と云ふ點に於ては本能性として有して居るものと見えまして、前に一寸申したふくろぐもの如きは、卵塊を入れた袋を尾端に附着したるまゝ、所々に漂泊し歩くものであります、

靖國神社に合祀さるゝ看護婦（口繪參看）

（婦人の合祀は今度が初め）

三十七八年戰役の際、日本赤十字社より戰地に向けて派遣したる救護班員の總數は、四千八百五十四名に達し、凱旋後は生存者に對して夫々行賞の事ありたるが、此派遣員中不幸にして病の爲に斃れたるもの百七名を數ふるに至れるが、この中醫長一名、醫員三名、調劑員一名、書記一名、看護人長四名、看護人卅四名、輸送人十名、病院船乘組運轉士一名及び看護婦長二名、看護婦十八名合せて七十五名は全く公務に基因せる疾病の爲めに死沒せるものとして、特旨に依り本月執行の靖國神社臨時大祭例祭の前に合祀さるゝことゝなりしが、婦人の合祀は靖國神社創立以來今回が初てなれば、こゝに改めて此の榮譽の御召にあづかれる、人々の氏名を列記せん、

▲靜岡縣富士郡大宮町百八十一番地看護婦長土屋つぎ子（二八死亡の時の年なり以下同じ）▲栃木縣上都賀郡西大蘆村大字草久看護婦長大貫つめ子（三七）▲千葉縣安房郡國府谷村鱸けい（四〇）▲神奈川縣中郡大磯町堀江たか子（三八）▲府下豐多摩郡千駄谷村字千駄谷栗原きん子（二六）▲埼玉縣南埼玉郡岩槻町大字岩槻大熊よし子（二五）▲府下南多摩郡南村字成瀬堀江とよ子（三〇）▲三重縣安濃郡新町大字八町和田みつ子（四二）▲新潟縣中頸城郡有田村大字春日新田若山みと子（二七）▲石川縣金澤市上石引町河崎廷子（二八）▲佐賀縣佐賀郡久保田村大字德萬大島さと子（二六）▲福岡縣山門郡瀨高町大字下庄田中すゞ子（二八）▲奈良縣吉野郡上北山村大字小橡岩本さみ子（二六）▲山梨縣甲府市二十人町加藤ふじ子（二六）▲北海道後志國歌棄郡歌棄村大字有戸村濱產千場せい子（二五）▲北海道石狩國札幌郡篠路村字山口一柳つか子（二二）▲岡山縣御津郡鹿田村字大供三宅けい子（三二）▲三重縣一志郡七栗村大字庄田前田むら子（二五）▲神田區末廣町十七番地大塚虎子（二四）▲和歌山縣西牟婁郡富二橋村大字關野川知野やす子（二二）

以上二十名の中鱸氏以下はいづれも看護婦にして、病院船、病院等に勤務中、職に斃れたる人なるが、尚此の外に男女八名の合祀不合格者あり、これは平和克復後に一等症にて病沒したるものなりと云へり

目白の慈善市

四月十三日より三日間女子大學内に開催されしバザーは、十一日の卒業式に臨んだ序に瞥と見たが、却々に振つたものがある、朝歇んだ雨が降り出して來て、ゴロ〱雷が鳴る、バラ〱と音がすると思へば雹であつた、斯んな定らぬ天氣なので、折角準備したものまで中止したらしい、雨はます〱降り頻るので、案内係の女學生が、天幕の中に傘を抱へて待つて居る導かれて入つたのは、正門の直ぐ左手にある第一賣店である、第一號室の入口には、雛が陳列されて居る十軒店のとは違つて、皆値が安い外國人の人形、雛人形の寢臺及卓子、レース糸の糸卷で作つた椅子、南京豆の鳥、ハンモツク絹纒製飾物の犬、弓矢などすべて雛の道具であるが經木眞田で編んだ盆だといふのが雛のものとしては大きかつた、階上は袋物部で千代田袋、オペラ、三角形金具附手さげ、九重カバン、ハート形リボンギヤダー、伸縮自在寫眞入、刺繍畫つまみ細工寫眞掛、その他數百種のものが室の四壁と中央に陳列されてあるが、何れも校内櫻楓會の考案にかゝるもので、出來の好いのがある、其隣室も同樣のもので變つたものは、クツシヨンと刺繍の扁額であつた、階下の室へ入るの陶器部がある、圖案は大學部外全體の圖案になつて、燒は名古屋で藥は學校でかけたのだといふが、多くは珈琲茶碗・皿、丼、乳入等である、之も却々に好く出來て綺麗ではあるが、色は紫が多くつて其上千篇一律であるやうに見のは僻目ばかりであるまい、宮樣が御成になるからといふので休憩室で、約二十分も休憩して居たが、御成にならないので、造花部に入つた牡丹、櫻、山吹、茶花、葵、糸菊、黄菊、紫苑、たんぽんスヰートピー、百葉牡丹、野菊、パンジーなどがあつたが櫻の花の大き過ぎたのは目障であつたが、葉の色合は概して好く出來て居た、之れで幼稚園校舍の第一賣店は見終つたので、高等女學校舍内の第二賣店に入つた、第七、八號の兩室は毛糸編物部で腹かけ、シヤツ、涎かけ、足袋、辨當袋、テーブルかけの類で割合に見榮がしなかつた、廊下傳ひに行くと、ブツク部には寫眞ブツク、繪葉書葉書ブツク、手帳、短册、衝立、ふくさ、刺繍畫等があるレース部にはハンカチーフ臺かけ、皿しき、カラー、肩かけなどがある、其所を見て大學部國文科教室へ行くと、下は家庭部と食之部で、坪井博士の諸人種婦人の服から、梶田氏考案改良服、學校考案の裁縫臺兼テーブル、同寢臺(簞笥、卓子兼用)同小兒用椅子、洗濯道具などがある階上には教育部、社會部があつて、維新以前に於ける婦人の著作物や、婦人に關する統計、婦人問題の解釋などがある、其他應用化學製作品玩具、園藝、出版部等もあつて趣味のある有益なものが多い(讃寶子)



東京博覧會

今こゝに東京博覧會を叙するは、五萬三分の一位の感なき能はずである、されど開會期まだ三ヶ月あり、未だ一覧を經ざる人の東道ともなるべく、實地見聞せることに就て、順序を立てゝ記述し、いさゝかその便を計ると同時に、本年に於ける一大事業を紀念せんため、この一小欄を設けた次第である、

博覧會の景氣

いつの頃この思ひ立あり、いかに進行して開會の運びとなりしかは知らねど、聞く所によれば瓢簞から駒が出た如く、俄に思付たるは事實で、三月二十日開會の日に、少くも博覧會と銘打つた會場に、まだ出品が出揃はぬと云ふ有様であつた、何にしろ博覧會と云ふのであるから、幾多の意匠と幾多の經費は上野の山に運搬されて、都府中更に一都府を現出したる如き有様である、會場は三ヶ所に分れ、第一はすべて春向にて櫻花によく、第二は夏向にて蓮池を賞すべく、第三は延期ともならば秋向にて、月を觀るに適し、更に延期すれば各會場を一團としたる雪景色、必ず見遁すべからざるものがあらう、何にしろ戰後の博覧會であるから、東京の人はもとより、地方からも續々見物に出掛けて、いつの着京列車も腰掛ける餘地さへなき有様で、これ等の客に電車は景氣を添えて花飾する、地方の珍客を東京に冷遇せしめざるやうにとて、萬朝報、國民新聞の如きは、假裝隊を出して、盛んに客商賣の家を警戒したるが自社に於てすら見違へられて、出社の木戸をつかれ

たる珍談もあり、電車會社にても新に電車案內者を要所々々に派出したるが、大切の案內より東京案內といふ刊行物を賣付けるに急なる滑稽もあり、行く所として博覽會の噂ならざるはなく、東京に住んで博覽會を覧ざるものは人にあらざる如き景況である

出品の分類

博覽會の出品は、第一部敎育學藝、第二、三部美術圖案、第四部農業園藝、第五部林產狩獵、第六部水產、第八、九部化學工業、第十、十一部製作工業、第十二、十三部染織刺繡、第十四部採鑛、第十五、十六部機械、第十七部建築土木、第十八部經濟の各部（第七部はなく、第十九部は審查外）に分つて、それ〲審查官をおき、各專門の大家を部長とし、曾禰男爵總裁として、審查の結果、第一號館には第一、第八、第十一、第十二、第十三、第十四部、第二號館には第十、第十一の一、第十三の一、第四、第五、第十七、第十八部、第三號館には第十九、及陸海軍及義勇艦隊の出品といふ如く、それ〲排列したのである、審查官に就て、その語る所を聞くに、

人工的調和

第一部長文部省普通學務局長白仁武氏は曰く、近來我邦諸般の文物が整備して來たのは、誠に喜ばしいことゝ思ふが、政治上の集權はもとより、經濟上のセントラリゼーションも、東京に赴いてきた事は今回の東京博覽會が最初の設計よりは、三倍も規模の大きくなつて、是を內國勸業博覽會と云ふも左程恥かしからぬものとなつたのでも解る、又貧富懸隔は歐米各國に於ても、時勢の進運に伴うて免れ難い勢ひである樣である、だが是を人工的に調和する途がないでもあるまい、それで殖產貿易の如き、經濟的活動を、一府一都に集中させるのは、社會國家の上より見て甚だ取らざるところで、よろしく財力も是を各地方の要地に分散さしたいと考へる、

審查の二大要綱

第十五、第十六部長文部省實業學務局長眞野文二氏は曰く、日進月歩の此世の中であるから、いろ〲

嶄新な發明品も出る樣で、例へば汽車の進行中、郵便物を差入れる機械などもあるが、凡べて精巧なる機械類の如きは、其構造を解剖的に試驗鑑査するのであるから、隨分骨の折れる責任の仕事である、素より審査上の大方針は、審査總長の指示するところに據るべきは勿論、又勸業博覽會の主旨に基づき學理的の甲乙、實用的の優劣を勘考するのは、審査上の二大要綱である、



珍物も無價値

第五部長山林技師村田重治氏は曰く、世の中には博覽會といへば、何か珍無類な奇物でも出す所と考へて居る人が尠くないやうであるが、それは大なる誤解で、既に博覽會に勸業の二字が冠せられて有る以上は、その出品物の製出が、將來一つの產業として充分發達すべき物でなければならぬことは敢て論を俟ないのである、即ち材木にして見れば、材木其物の性質ばかりで無く、夫と同時に經濟的考慮も亦充分斟酌せねばならぬので、例へば本願寺に用ひた大木と云ふ樣なものも、大きいと云ふ點に於ては、如何にも珍らしいが、斯かる大木が二度出來る迄には、五百年も千年も經なければならぬ、斯樣な出品は勸業の點より見れば何等の價

も無く全く零である、之に反して培養の方法に依つて、良材が出來たとか、苦心の結果漸く販路を弘めた者とか、又外國へ輸出して、充分割に合ふ者とかは、總て勸業の意味にも添ひ、又大に撰拔する價値ある物と云はなければならぬ、

災禍が工夫の材料

第十七部長農商務省特許局長妻木賴黄氏は曰く我國は歐米諸國と異り、地震と暴風雨と火事とが非常に多いので、何の建築家も皆頭を惱まして居る、歐洲でも伊太利邊は、多少他と異つた建方をして居るが、それでも餘り大地震が少いと見えて、また頗る不完全を免れない、雨も歐米では大抵眞直に降るが、日本では雨といふとすぐ風が加はつて横に降り掛るを常として居る、又火事にして昨年桑港の大火は例外として、我國では九分通りは木造なので煉化造にしろ、石造にしろ、殆んど周圍に澤山焚木を積んで置くやうなのですから、出火の度數も多く又擴がり易いのである、この三つの點は特に我建築家の大宿題で、工風に工風を凝して居るから、今日でも歐米とは少し異つた發達をし、又將來は餘程優つた發達をするやうに思はれる、

染織の理學的應用

第十二、第十三部長東京帝國大學名譽教授高松豐吉氏は曰く、審査の方針に就ては、公平なる心を以て事に當ると云ふの外はないが、一ヶ年一億三千餘萬圓の産額を有する我染織業の發達に就て、這般の如き機會に於て世人の注意を喚起したいと思ふ、斯業の改良に關しては、染物の化學的應用及び機具の理學的發明が最も肝要である、幸に我國に高等工業學校及工業試驗所等に於て是等有益なる研究發明があり、又各府縣に於ても染織學校の設あらざる處なしと云ふ譯であるから、我當業者は此等の研究の結果を應用し、又外國より精巧なる機具を輸入して、機械的工業組織となして、旺んに外國向織物の製品に努力せられたいものである、

看版と實際

第六部長水產講習所長松原新之助氏は曰く、此前の內國博覽會に於ける鰹節審査の結果の如きは、吾人の注意すべきもので、從來最上品として其名天下に隱れなかつた土佐節が、審査の上で靜岡地方の產に一籌を輸したる爲、土佐節の需用は著しく退減して、其後暫くの間は、靜岡節の賣行頗るよく、一時鰹節は靜岡に限るとさへ持囃された例もあり、概觀するに出品人は競うて最上品を出すに苦心する結果、全班に於ては其價値最良ならざるものも、出品物として最優等の賞に當るものを生ずるは、免れ難きところで、審査の困難なる所以もそこにある、

美術の價値

第二、三部長東京美術學校長正木直彦氏は曰く、他の工業品なれば貿易奬勵の爲、品質の良否と製產額の多寡を以て等位をきめる事はあるが、美術部品では、それが時代の嗜好に投じやうが投じまいが、或は作品が有用であらうが無用であらうが、そんな事は顧慮するに足らぬ、只技術を見るのみで、絶體價によりて決するのである、

優劣の標準

第十四部長東京帝國大學工科大學長渡邊渡氏は曰く、第一に鑛山の經營狀態、採掘方法の良否、の稽査を經て後、初めて他の一般製品に於ける如く、貨物の良否を審査し、彼是を斟酌して優劣を決する、

智識の啓發

第八、九部長工業試驗所技師高山甚太郎氏は曰く、各地の農工業上の製產物を秩序的に陳列して、之が精粗優劣を審査し以て改良發達を圖り、出品者も亦自他の出品を比較して、之が改良進步の計畫をなし、同時に其出品を汎く費消者に紹介して、之が需用を求め、博覽會をよく利用するを得ば、必ず將來の効果が收め得られる、又觀覽者も能く之を利用すれば、各自の智識を啓發するの大効果がある、要は殖產工業の發展に利する道に協はねばならぬ、

好事魔多し

審査は以上の如く、それ〲專門大家の手によつ

て審査されたから、まづ遺憾なき筈であるが、美術品などは大分苦情が起つて、落選展覧會などいふものも起れば、田添幸子女史の如きは、落選說を平民新聞から、帝國ホテル、遂に婦人博覧會へ擔ぎ廻つて居るなど云ふ八ッ當りもあり、第一會場は建築粗漏にて二三回の雨漏に幾多の貴重品を臺なしにし、東京女藝學校の刺繍の札を見ると、三月廿三日降雨の際甚しく雨漏の爲め全部濕潤し、變色及汚損せるゝなり、など、書いてある、或人は評して曰く、今回の博覧會の金牌は桐油紙であらうと、好事兎角魔の多きものである、

入場頻々

されど人氣はこんなことに頓着なく、三月廿日盛んなる開會式があつて、その翌日一萬六千八人の入場を始め、其次は三萬七千人とその數次第に加はり、花の盛りの四月九日十日には六七萬の多數に上り、更に十五日には十二萬四千百七十一人を算するに至つた、獨逸帽と、金線に紅線を着け肩章を付せる黑帽に革帶を締めた守衛の忙がしさを見て、同事務所に行けば、その入場劵の數を勘定せる女事務員の呑氣なる、予は面白き對照と思ふた、

一日の經費

さて書後れたが、東京博覧會々長千家尊福男副會長は尾崎行雄中野武營の兩氏で、兎にも角にも大設計であるから、なか〳〵一日などでは見盡せるものではない、念を入るれば際限はないが、各會場一日づゝの割合にて、三日巡覧せば、まづ一わたり狀況を知ることが出來るであらう、そこで費用はいかほどかゝるといへば、消極的に行けば一日十錢、日曜大祭日にて十五錢の入場料だけであるが、それに水族館十錢、觀覧車廿錢、演藝場廿錢、娛樂場十錢、不思議館十錢、中食に壽司蕎麥一人前八錢位のものもあり、普通辨當又汽車辨當ならば十五錢位、飲料は喫茶店、珈琲店が十錢位であるから、概算して一日一圓位あればよろしい、併し目を動かす方より口を動かす人が多いと見えて、場内は飲食店で目を突く有樣で、

外人などは大吃驚を呈して居る、

第一會場

上野公園竹の臺より新公園櫻が岡に渉る一帶の地を占め、此面積三萬千三百七十坪、入口が第一號館前の正門、帝國博物館の北門、屛風坂の中程なる車坂門、一號館右側の協門の四ヶ所なるが、竹の臺より正門に入り、第一號、その後に動物舍、蔬菜館、それより二號館、四號館を經て日本橋模型を渡り、演藝場、第三號館、美術館といふ風に巡覽するが順序であらう、こゝに一話柄として記するは、この會場第一に、普通觀覽者として入場したる人である、その先陣は丸山永畝といふ畵家で、氏が一意先輩畵家の出品せる繪畵が見たさに、根よく正門に立つて開場を待受けたとのことである、この正門を仰いで、尤も東京人士の感慨を惹くのは、徳川慶喜公の健筆に成れる東 京勸 業博覽會の七文字である、 正門を入れば直ぐ

第一號館

館内の出品點數二萬五千で、家庭教育、幼稚園、小學校、盲啞學校の初歩教育をはじめ、實業専門の各種實業學校の製品、圖書館の設計管理法、各種學校の標本、器具、模型、醫療機械、度量衡、顯微鏡、測量器、寫眞、幻燈、活字、印刷器械、遊戲品等を館の左右袖に分別し、右方には緋天鵞絨に黄色の羽二重もて、教育學藝又は器械標本等の文字を現はし、花形の枠を取り、眞紅の紐もて吊し、小西寫眞店の大寫眞機械、島津製作の理化學機械、審美書院の座敷風陳列所よりまづ人目を惹き、殊に文部省の諸比較表の前にある、商船學校の練習船大成丸の模型は見物で、長八尺巾二尺二三寸、製作精密を極め、新式舵運轉器の雛形を添え、それを電氣にて運轉して居るなどは、なか〳〵恐入つた細工である、その外吉澤の活動寫眞機械、兎角の評はあれど、東京玩具雛人形組合より出品したるは、話の種に見て置く

も損はないことである、而して最も面白く見られたるは、高等工業學校の出品にて、絹布綿布並に毛布の原料より製品に至るまでの工程を實物を以て、順序好く説明したる、又羽二重綿布、絹手巾、浴布等の實物に一々其年々の輸出額を示せる札を附したる、又金巾更紗、毛織物、モスリン等に其年々の輸出額を示せる札を附したるなど、最も嶄新の工夫と見受けた、それより幹道に立ち戻れば、米山と云ふ看版を掛け出せる博物標本、寶石、大蛇、猿公、大鷲、山猫など口を開け、手を伸じ、魚を攫みたるが如き身顫ひの出る獸類の模型を陳列し、又は實物のアルコール漬を取出して見せたるが如きあまりよい心持ではない、左袖は博覽會中の工業館とも云ふべきもので、七寶玻瑠陶磁器漆器等より、金屬製品革製品並に化粧品、其他の小間物類を網羅し、雜然として一大勸工塲たるの觀を呈して居るが、數多き出品中には、流石に博覽會の名に背かざる出品も見受けられ陳列品其の物が既に美しきに、出品人が陳列に多少の意匠を凝らしたることゝて見るから華やかに、又金屬製品の陳列部にては、東京輸出金屬品組合の出品中には珍らしき、人物動物の巨大なる鑄物、若くは貴金屬製の美術品なども少なからず、是等は工業部出品中の呼物の一であらう、其他東京陶磁同盟會の諸製作品、玻瑠器組合の青色斑入の大花形、硝子製鯉の瀧上り、東京輸出金屬器同業組合の輸出向の置物、靜岡漆器組合の淺間山大殿景の大額面などはいづれも立派な品々である、一號館を出て中庭を左に

第二號館

に至る、面積千二百四十八坪で、農會所屬組合大部分を占め、三ヶ所の入口に一は種子物にて造れる門、三ヶ所は蜀黍の殼其他にして造りし門を構へ、館内には各種の看版を中央に吊下げ、電氣仕掛にて十二支の造り物を廻轉せしむるなど嶄新の趣向である、その出品目錄を見ると　米千百七十六點、麥、穗

雜穀、藍、種子、茶、養具五百點、標本五百六十點、淸酒、麥酒、葡萄酒、炭酸水、醤油、漬物、罐詰、蒲鉾、半平、砂糖、和洋菓子に無數左右の架上に整然として陳列せられ、此部にて最も觀覽者の注意を引くは、神田の材木商齋藤某の出品せる客間の模型と云ふも、其大さを本間其儘に採り、向つて正面に各一間の床、並に違棚を設け、床柱、田茂の磨柱、床地は欅、床椽は黑柿の六寸物、床鴨地床落し掛は桑、床天井は神代杉、違棚は本紫檀と云ふの趣向にて柱、敷居、鴨居は總て杉の柾を以てし、天井障子の腰板等を薩摩杉、黑部杉などにて作りたるもので、材料に特別の贅を盡したりといふにあらねど、大體の結構何となく床しい所がある、其直ぐ後に陳列されたる北海炭鑛滊船會社の經營に係る雨龍、栗山兩山林に因める樹林　明治三十四年以來右山林に逐年植附けたる落葉松が、當年に至る迄如何に成育せる發育の狀況を實物を以て示せるを初めとして、檞松、蝦夷松、ハンノキ、トロ、イタヤ等の現に北海道に繁殖する數十種の樹木の標本に、其樹名年齡効用等を示したるもの、又は橇、ガンジキ、藁靴、鋸、鶴嘴、皮剣鎌など同道の樵夫が雪中に伐木作業をなすに必要なる一切の道具並に溪流を利用し、伐木を山中より流出する際に使用さるゝ堤の構造を模型を以て示したるは、寒國に於ける林業經營の一般を說明して餘蘊なきものである、其他造花部にては五色の花を盛れる花籠の美くしさは、婦人連の稱贊を博すべく、紙製品中には、少年少女の手遊たるべき寫眞ブック、繪葉書入杯より扇子、團扇、金屏風に至るまで、極めて賑やかに陳列され、竹木製品類中には簞笥類其他の家内裝具品最も多く、鞄、靴等の皮革製品經木、麥藁眞田、メリヤス等の工藝品等も見えた、猶本館の名物としては、中央の塔中に飾れる御木本眞珠店の出品十萬圓の眞珠軍配團扇、細川流盆景の達人林梅圃の意匠に成りし眞珠盆景と、平尾某氏出品の黃金鮨である、此鮨は海苔、玉子、おぼろ等漸く四五個入の折詰二圓、笑はれてもあまり廉いとは云は

れぬ、それより同館の後へ出づれば

蔬菜園

がある、丁度第二號館内農産物陳列部の後で、日本風の四阿式に建てられて居るといへば立派であるが、さうでもない、併しこれを市中の八百屋として出せば面白からぬでもない、先づ入ると中央に草の植込があつて、漆喰細工の羊が二頭ゐる、其處には竹の子、獨活、慈姑、百合、キャベツ等が植込まれて小松菜が咲て居る、蔬菜を奇麗に器に入れて、一々正札がついて居るが、甘藷の太いのが十本で七錢、里芋が四五十個あつて五錢、雲州密柑の上物が十個で十錢、五個で三十五錢の林檎は子供は持たれぬほどである、其他季節物、走り物有らゆる野菜の所品があつて、臺所經濟に關係する奥樣連は足をとゞめて評價し合つて居るが、我々の目から見ても中々廉で、これが土一升金一升といひたいが、それ以上の場所を占領して引合ふのであらふかと思うて、女看守に茲の品は直ぐ賣るかと聞くと、未だ審査前じや

から賣らないといふ、そこで審査が濟む頃には、萎びたり腐つたりするであらうと云へば、相手もまけぬ氣になつて其節は良いのと取替て差上る筈ですと云ふから、それなれば今買ふ約束したいからと懐中を探る、と云ふのは審査が濟む頃になれば、却つて價に比較してます／＼廉いからと思ふたのである、すると其手續も未だ定つてゐませんと云ふ、それでは何の爲に正札が付けてあるのか解らぬ、併しこれは遠からず即賣するやうに成るであらう、お役所向の仕事は兎角かういふ事は有勝である、買はないとなれば價の高いのは苦にならず、高きものはないかと見ると、それも隨分ある、葱の大束は六十錢のもあれば二圓のもある、兩方とも根が白くて葉が靑い、何處に一圓四十錢の差があるか分らない、バナヽの鈴成が五圓など云ふのもある、高いかと云へばこれは頗る廉ぢやと賞賛する高襟紳士もある、其他面白い形をして、食べるのやら食べないのや解らないやうな蔬果も大分ある、そこを出るとそろ／＼食

物が目につく、この二號館裏は、

新食傷新道

と云うても宜からう、汁粉もあり、團子屋もあり、蕎麥屋もあり、蒲燒屋もあり、牛肉屋もある、そのうち名物紀の松鮨と云ふのがある、七圓の鮨が出來るとの大評判、煙に捲かれし連中の混雜大方ならず四十番の札を貰つてまだ十番も濟まないといふ景氣それでも閉館までは待たせず、お待遠樣と運び來るを見れば、小鯛とサヨリの押鮨で一人前廿五錢、江戸鮨の風味がよくないから、態々神戸より新鮮なる魚類を取寄せ、手腕を見せるとかいふ能書はチト大袈裟なやうである、人の澤山出る所は得て斯う云ふ店が有勝のもの、この人出を停車場前に見立て、靜岡の汽車辨當、隨分思切つて人を馬鹿にしたもの、觀戰旅行からの思ひ付であらう、前に靜岡停車場といふ札をかゝげて、プラットホームに汽車の着したる心、こゝに車窓の扉を排して客も列車内に入る心算にて店に入れば、數名の賣子傍の盤臺を胸の所に掛け、『エー正宗ビール』『靜岡名物鯛飯』などゝ停車場内賣子の假聲をつかふと、客は車窓より手を伸べて好みの物を注文する中、軈て發車合圖の鈴は鳴ると云ふ仕掛け、隨分風變りの飲食店であるが、夫が却つて小供の氣に入り、親たちは無理に引込まれる有樣である、それより二號館へ戻ると、一號館と曲尺なりに抱へた中庭に出る、

中庭

には噴水塔あり、直徑六十尺の水盤中に、六角形の塔を樹て、塔の上には、バーカス神の立像を据ゑ五段の階段には、硝子版を張詰め變色電燈を用ゐて居る、この中庭を逍遙して居ると、通辯巡査が左胸部に英文の徽章を附けて、洋人に應對するを見受けるが、毎日會場には八名出張するとのことである、又某椅子車製造所では同車發賣廣告のため、十數輛を場内に置き、カーキー色の洋服に赤帽を被れる人夫が、後押を爲し、場内一周四錢にて客を乘せ居たるが、車は織物張皮張の椅子の下へ、乳母車

の如き三輛の車輪を付けたるものである、この場內で無料のものは、音樂堂の奏樂を聞くべき中將湯の廣告椅子と、汚い便所と、ホーム館と、新聞縱覽所で見せる新聞と、湯である、其外に無料のものは何もない、この中庭に

考古陳列所

がある、六角堂の四阿造りの瀟洒たる建物で、八角形の陳列棚には理科大學所藏、府下南多摩郡東光寺內にて發見されたる埴輪土偶が飾られ、その下の方には二條公爵所藏の府下荏原郡大井村より發見されたる祝部土器、其他何人も一度は是非とも見て置かねばならぬ珍らしき祖先の遺物を、坪井理學博士自身が手を下して、見事に陳列され、陳列品へは一々說明書を附したるが別に見易き所に『此處に陳列してあるのは、東京府管內で發見された太古の遺物でありまして、此度私が千家東京府知事から囑托を受けて案を立て、特志家諸氏の補助に依つて蒐集整理し得たものであります、此しく太古の遺物と云ふ中にも明に二ツの別が認められます、甲、曲玉、管玉及其等と共に發見させるもの『我々日本種族祖先の遺物、今を距ること千數百年前である』と云ふ如き模範的說明書が附いて居る、次に

第三號館

四號館は一號館の東館に隣り、中庭を隔て二號館に對して居る、東京市の出品部に煉化擬の門を構へ、公園式の製作をつくつて仕切り、館內には筑波、薩摩、豐の諸艦、第一號潜水艇旅順港等の模型並に浮標水雷の沈設を示したる模型等を陳列せるが殊に旅順港の模型は、我海軍の決死隊が、同港口閉塞の目的にて沈設せしめたる閉塞船の位置を示したることゝて、最も觀者の注意を引く、其他駒込病院の模型は病人の寢臺に毛布の敷かれたる所まであり淨水場等の模型は淀橋貯水場、玉川水源地までを示して居る、館外には、軍艦用大砲數種を排列し、小銃彈、拳銃、喇叭、劍等にて海軍出品の文字を現し、

東京砲兵工廠出品の機關砲の周圍と海軍出品の徑九十糎の探海電燈の前には、人多く集まれるが、陸海軍共に特に下士官を派して、懇篤に使用の方法を説明して居る、

奏樂堂

四號館を出ると、噴水塔を左に見て奏樂堂がある、時々永井軍樂長などの名手出張して、各種の曲を奏して居る、この周圍を取まける人を見つゝ、聽樂の最も好位置を占めて居るのは、第四號館と奏樂堂の中間に立てる、白堊の六角塔なる、日本麥酒會社のビーヤホールである、

模擬日本橋附近

奏樂堂を辭して東に行くと、右に瀟洒なる洋風建築の精養軒に梅園汁粉店があり、左に金釜正宗店に特設出品飲食店があり、この飲食店にはなか／＼珍らしい献立が日々出來る、或一日の献立に椀盛は越前名產蟹の上野櫻、志州名產はまゆり靑豆、岐阜名產養老の葛引、燒肴は丹後の名產鰆の味噌漬、付合五目鉢寄、香の物は浪花漬と名古屋の守口大根、御飯付にて一人前五十錢といふのである、この價の廉にして物の珍なる所が、博覽會の價値であらうと、やがて來る膳部を見ると、椀は普通の鷄卵豆腐に靑豆五六粒、越前の蟹はそぼろと化け、養老の葛引も頓と見當らず、鰆の味噌漬はつめたき海老のフライと代り、香の物は奈良漬三切に澤庵二切と云ふ有樣である、特設店を左に見てすゝむと、有名なる模擬日本橋で、その北には千住材木商の出品筏流しの模造がある、土手の下から生い冠さつたる樹の蔭へ小砂利を敷きつめた滔々たる大河の見立、これへ諸材木を押して、藤蔓で筏を組んだかたち、檜皮葺の小屋へ菅笠を掛けて筏師の俤をも忍ばせたるものがある、日本橋を渡ると、右に魚善の天麩羅茶漬といふ評判の安直と迅速店あり、その隣りの空中觀覽車は、試運轉の時一車の倒になりし爲、其筋に干渉されたりと云ふけちがつき、容易に物になりさうにもない、煎茶三錢にて

外に辨當の仕出しを爲し、總てが外見拔の實辨的に出來上れる喫茶店もあり、安直蕎麥を以て有名なる丸三うどん、車夫馬丁の口にのみと思ひしに、これを博覽會場に見んとは意外の感がある、

不思議館

新杵、更科の裏手を材木問屋組合の土藏の方へ進むと、この不思議館がある、其廣告が面白い『種々なる造花を以て裝飾したる場の左右に、幾十點の電燈が燦爛と輝き、花に映じ、花は又一段の光彩を放つ時、嚠喨たる音樂と共に、朦朧たる一怪物場の中央に懸り有るか無きかと凝視する內に、漸次人の顏となり鼻、口、耳、目等を現して、果は其人が物を言ふ樣に成り、談話をなし居る內に、漸々影が薄くなりて、眼球から木の枝を生じ、唇は木の葉と化し、耳朶は蕾に變じ、不知不識の間に、此人の顏は一の大花瓶となり、蕾漸く開けば、一の大牡丹花と變じ、花落ち葉枯るゝや、人間の骸骨と化し、枯骨肉を生じて人間になり、又漸々鳥籠となり、籠の內

黃鳥囀りて飛廻る』といふ文句である、その右に

演藝場

がある、屏風坂と第二號館に接し、奧行三十間、間口十五間、木造丹塗純日本式建築で、總人員千五百人、乃至二千人を收容し得られ、棧敷の外に腰掛を置き、曲目の一としては素岳作の面白からぬ長唄を賤業婦に依つて演ぜられるのである、その後に

絕佳なる遠望

演藝館の裏に植物溫室がある、酒井伯の蘭科植物四十一種をはじめ、種々の珍花がある、この所は博覽會場中第一の高臺で、遠く富士筑波に對し、頗る好風景である、この高臺つゞきに福井珈琲店がある、店內の風俗大に掬すべきものがある、そこを少し離れて東鄕亭といふ茶屋的の茶屋がある、その終點が鹽瀨菓子店である、館內汁粉店中の粹で、下戶軍の兵站部である、店の入口に立三尺橫一尺計りの建札がある、それに、此の釜は大小二個あり、共に豐太閤が北越の陣中にて使用せられし湯釜なり、此

の度遠境より轉送し來りて、弊店内に据附け、以て來賓の淸鑑を乞ひ、兼ねて其湯を用ひて粗茗を煎じ好古の雅興に供せんとす、とゑらい事を書いたものである、その横手に

美術館

がある、入口正面の突あたりに、新海竹太郎氏彫刻の決心といふ題にて常陸山大の人物があり、拳を握り下唇を嚙んで居る、それに對して霞といふ題目で、其實美しい裸體婦人が巖上の或物を見とれて居る大理石像がある、左の方に入ると靑山苔石氏の木象眼の大作がある、その後より右にかけて、東西の繪畫がある、東洋畫八百六十點の出品中三百二十五點、洋畫は二百四十點の中百點の陳列を許されたのである、東洋畫では望月金鳳の鶴、川端玉章の富士、荒木寛畝の孔雀、高島北海の水墨山水、川合玉堂の二日月、寺崎廣業の秋の夕暮、松本楓湖の長年奉帝、尾竹竹坡の釋迦、上原古年の利根川、戶田玉秀の漁郎の晩景、根本雪蓬の孔雀、西洋畫では小林千古の誘惑、小杉未醒の釋迦、小林萬吾の靜御前、滿谷國四郎の微恙、岡田三郎助の美人、中澤弘光の海、中村不折の裸體美人、靑木繁の神話等が、最も評判される作品である、而して善惡は別問題である、さて垂涎三尺たらしむるものは、美術館第一の大物、京都飯田新七出品に係る、天鵞絨友仙窓掛模樣雪月花の三幅對で題目は、ベニスの月、ロツキーの雪、吉野花、しかも此の價二千五百圓、これを掲げらるゝ家屋を持たるゝ人にとりては、極めて廉なる裝飾品である、その隣りに演藝場と挾まつて、

第三號館

がある、陳列延長七百五十間、出品點數二千五百點、令夫人令孃方には、目の藥になるか毒になるか知れない、陳列百般の設備善を盡し、上下四方の裝飾美を盡し、諸事萬端一點の申分なく、各館中恐らく該館の如く人の足を止むるものはあるまい、さて

館内に入りて先づ右方を望めば、意匠に意匠を凝らしたる千種萬様の陳列棚に、木綿絹織など綾に飾付けられ、燃え出づるが如き緋縮緬の花模様を初め、雪を欺くホワイトシャツの行列、其他百花爛熳たる庭園かと怪しまるゝリボン、花帽子等の陳列棚あるかと思へば、左方には桐生織物會社の出陳に係る見立細工あり、絹糸を巻たる小環を手にしたる御殿女中の側に、支那人らしき母子を現はし、足袋商組合が白足袋黑足袋を程好く取交せて、見事なる花簪の上に、蜻蛉や蝴蝶の如く結びたるリボンを飛ばしたる、面白き趣向がある、それより中央の幹道を歩めば、三越呉服店の陳列棚たる八角堂には、七組の花見小袖、凡て縮緬づくめにて仕立上げ、眼の醒めんばかり綺麗に見受け、その左手にありて、目もさむるばかりなるは、今川橋松屋の人形である、印度の婦人に西洋婦人(是は和服)が和服を着せて居る傍に日本婦人が羽織を持つて居り、横手にて支那の少女(これも日本服)が印度少年の眞黑なるに洋服を着せて居る、左手には朝鮮の少女が、之も子供が同じく日本服を着て居る圖取である、今一つ見逃すことの出來ぬは、白木屋呉服店にて、二人の婦人に立派な衣裳を着せ、生きた人形を作つて居ることである、

三號館横町

に美術館横町を兼ねたる、即ちこの兩館に向ひて、凌雲院東側に、次郎公壽司といふのがある、日本一の稲荷鮨である、十軒店の本店は土一升の土地に根城を構へて、十何人の職人を使ひ、彼岸中は徹夜せぬ日のなき程である、鮨は鐵砲巻を交せて一人前八錢、その角に有名なる芝の太々餅の出店がある、屋形を破風造りに神明を利かせたるは思付で、腰掛清らかに、千木箱の煙草盆、きびらの座蒲團なかく〳〵である、餅は一盆五錢である、美術館寄に活花陳列館がある、總數三百點、三日又は五日に挿しかへるとの事であるが、石州流、天眞古流、美笑流、遠州流、日吉古流、池の坊龍生派、利休流、古遠州流等でのたくり花が多い、

食塲街道

それより凌雲院の西、第一號館の間に、飲食店の有名なのが大分ある、食物博覧會とも云ひたげである、雲を拔く櫻正宗の大壜看版の底に、鹿島の正宗ホールがあり、喫茶店は改良を銘して、旭製茶商會の瀟洒たる構造、自然木へ造花の藤を纒ませ、紫白妍を競ひてダラリと客の頭へ下る、牛乳入りの茶が一パイにビスケットの五ッ六ッの一人前十錢、露國風喫茶店は一人前一圓と五十錢の料理二通あり、給仕の女は赤い衣服に赤い帽子を戴き、ボロシチ、ヒロクなど云ふ妙な名前の料理を注文に應じて運ぶそれから平野屋といふ上方料理、献立に芋棒、梅椀、祇園豆腐などいふのがある、芋棒とは如何なるものかと尋ぬれば、里芋の大きなのを甘煮にし、夫に棒鱈の柔煮を添へたれば、芋棒と呼ぶなりとは宛で洒落である、その他大又の鯛めし三十錢も高くはなく毛拔ずし、若葉ずし、東海道名物阿邊川餅、梅園の汁粉、さう〳〵數へても食べられるものではない、それより脇門へ出口に

第五號館

がある、入口より左側は統監府其他より珍らしき朝鮮の出品をなす筈であるが、未だ着荷せざれば、陳列棚も無く、至極殺風景である、右側は即ち水產局の出品で、壁間に海老茶のメレンスを張り、美麗なる水彩畵にて畵かれたる汽船打網船漁業の圖、同捕鯨の模樣等數種の海事的繪畵を掲げ、又世界材木貿易圖及び輸出入表等、斯界に多大の參考となるべきものを掲げて居る、

第二會場

不忍池の周圍及馬見所跡で、此面積一萬二千餘坪、東照宮石段下に正門あり、不忍の西に觀月橋畔に觀月門がある、試に觀月橋に立つて左方を眺むれば、瀲波春風に戲る池の端は、淡水色の勾欄を浮ぶる臺灣館と、菱形の一屋三菱出品所とに挾まれたる、外

國館の大厦斜めに相對する宏壯なる機械館を中心として左右より特設館相擁して簇立せるは奇觀、實に筆紙の及ぶべからざるものがある、正門を入れば、左に池に沿うて

臺灣館

臺灣總督府の出品館で、右側は紅白の幕を以て蔽ひ、左側のみ通行を許して居る、其建築は總て臺灣風に築き、階上には賣店及喫茶店を設け、館内右側の陳列棚は、何れも材料粗惡なるも、其體裁には注意を拂ひたるが如く見え、就中糖業協會の陳列棚は臺灣特產の通草を以て、體裁好く造へたるところ面白く、觀覽者の尤も眼を惹くものは入口の樟腦を以て築きたる高さ七尺餘の塔である、其他米、大豆、砂糖、茶等の農產物及猄皮、鹿皮、猿久皮、水鹿皮、山猫皮、鹿角等其他凡ての狩獵品並に各種の林產物等も、位置よく陳列されて居る、階上は喫茶店となり、十錢にてバナヽ入りの菓子二個と茶一碗を供し評判の臺灣娘阿月、阿招、阿金の三人、たゞ椅子によるのみで、而も客を呼ぶ方便として居るのである この階上より辨天祠を見渡す景色、絶佳絶妙である、それの右にライオン館あり、その隣に

教育水族館

がある、魚槽の配置は、淺草のと稍趣を異にして、中央に池を造り、周圍に大小五十二の水槽を設けて全國の淡鹽水族を蒐集し、給水設備は、重要なる鹽水は遠く品川沖より取り、階上裝置の元槽に堪へて二個のモーターを据ゑ、一馬力の電力を以て魚槽に分配し、豫備としては又二個の唧筒を設置してある 平たき鰈が糸のきれし凧の如く、フハリ〳〵と泳ぐ樣や、甲蟹が綿帽子冠りし嫁御前の頭のみ這ひ動くが如き樣や、賴光の退治したりといふ大蛛も斯くやと思ふ計りのたか蟹が、長き八本の脚を廣げて箱の中央に覇を誇るが如く、孰れも女小供の喜ぶ所なるべきが、先づ第一の呼物は膃肭臍の海驢であらう、

膃肭臍が人珍らしげに岩上に踞し、時に其居所を爭うて嚙み合うて居る、海驢の牡は小高き岩上に天を仰ぎ、牝は底き處にコク／＼と居眠り、牡は時々犬の吠ゆるが如き怪しき聲を張り水中に潜る所など頗る珍奇である、其他水牛、種々の金魚、珍らしき貝類、水鳥の卵、殊に同館が天下に呼號して人の好奇心を挑發したる人魚は、其大さは小牛程あり、尾は二つに切れ、左右に水搔あり、皮膚は鯨の如く齒は馬に似て、顏は豚に似て居る、人には少しも似て居らぬ

大厦高樓

池を抱へたる庭園に、日本瓦斯館、水族館に隣りて立ち、池の正面に外國館巍然として立つて居る、次に三菱出品館、その次に機械館、いづれも未だ出品濟とならぬので、たゞ素通り同樣に見て通るのが多い、外國館にはメンデルソン兄弟會社及高田商會の諸機械、天賞堂の外國製品、十字屋の樂器等の陳列があり、列品中横濱九十三番館ウヰルコスキー商會出品の指環時計は、時計としては世界最小のもの、直徑一分五厘である、尙貴婦人用ブルーチに附せる時計も、頗る精功のものであるといふことである、二階は貴賓の休憩所に充てゝある、機械館には幾多の器械を据付け、動力もて實地運轉し、報知社の如き、こゝで博覽會報知新聞を印刷し、普く入場者に頒つて居る、この前角の池の端に、一人前茶代五錢といふ輕便の喫茶店がある、茶よりは先づ周圍の風景が御馳走である、

食物隨行

何處までも食品は隨行して、陳列館は出揃はずとも、なか／＼景氣を添へて居る、外國館の後手はそれで、キリンビール、罐詰試食會、畜產會牛乳店等、表構と同じく數は少いが、大きな店が七八軒並んで居る、こゝで食傷隨意である、

第三會場

博物館、圖書館前にて、場内に長さ八間半、幅四

間餘、深さ五尺五寸の遊泳場及陸上運動場がある、同館は重に學生向が入場し、場内に羽根突あり、縱楷運動とて縱に長き梯子を天井より吊して、人は猿の如くこれに驅け上り、四肢の運動を敏活ならしめ又それと同じやうなる横楷運動、陸上ボートなどがあつて、小供達の得意想ふべきである、其他ストライキングバックとて圓盤下に一本の綱を下に引き、眼の高さに一大球を吊し、人をして打擊せしむるのである、打擊者は手に革袋を嵌め、腕を眞直に延してウン〳〵と突く、次は据付の自轉車二臺、之に乘つてヘタルを滅多矢鱈に踏む、据付なれば落ちる心配なきに、ハンドルの方は又御留守にても大事ないこれは足の運動を完全にして、體の屈曲を禦ぐの功があり、普通の自轉車よりもたしかに運動的の考案が備はつて居る、その上にメートルがあつて二臺競爭の結果甲何里乙何里といふ事がチャンとメートルの表面に現はれる、

上野山上

貴賓館は演藝場に對峙したる高臺にあり、山下踏切前に向つて、これに凌雲橋が架つて居る、同館は其名の如くで普通觀覽者は絕體的に覗くことさへ許されぬことになつて居る、夫に就て種々の奇談がある、元來同館は館外の建築物とて、東京府にては博覽會以外のものなりとし、守衞に向ひて協贊會員の徽章を佩用せるもの丶外は、如何なる人にても入場せしむべからずと命じた、守衞は仔細畏まつて、嚴然見張をして居つた所へ、千家東京府知事が、開會式の翌日所用あつて此處を入らうとすると、守衞は千家氏が徽章をつけて居なかつた爲に、乃公は千家ぢやと云つても、遂に入るを得ざつたとの事である、此館は玄關を入つて左は事務室、右は休憩室、其奥が貴賓室で、一個の卓子に數脚の椅子がある、其又奥の一室も同樣で、四方は黒染緣の硝子戸、欄間には天鵞絨製花卉の額を掛け、硝子越しには下谷

淺草、千住、本所の眺望を集め、廊下を隔てたる此方は貴賓婦人室及び化粧室があつて、化粧室には洗面所、化粧品を備へ、金屏風の後には便器あり、欄間に鵞鳥の額を掲げ、更に奥まりたる大廣間は會員の休憩室で、數個の卓子に椅子、卓子には乾菓子を盛つた盆を載せてある、

世界周遊館は、工學士大熊義隆氏の設計で、間口十五間、軒高四十尺、塔高七十尺、總坪數二百坪、技師中尾光次郎氏、繪畫監督者が、黒田清輝氏、筆者が氏と西村勝次郎、北連藏、中澤弘光の諸氏である、先づ横濱を出立し、印度コロンボ日中の景、埃及のピラミッド、スフキンクスの夜景、伊太利のベニスの繁華、瑞西のゼチバ湖畔、アルプス山の壯景、露國ペトクブルクの雪景、ナイヤガラの巨瀑、再び返りて獨逸のエルブ河の鐵橋、和蘭の田舍の旭光、佛國巴里の佳人のダンス、英國倫敦雨後の夜景等で世界の大公園ゼチバ湖畔に赴く美人の欄干によりて立てる圖は最もよろしい、

輕便鮨、と云ふは神田三崎町の末廣鮨にて、公園の茶亭、觀月亭、花山亭、無極亭、三宜亭、韻松亭黄金亭、櫻木亭、東花亭、良元堂其他の腰掛茶屋へ鮨を出し、模範便所は竹の臺新公園にあり、アルボース消毒便所、婦人化粧室がある、男三錢、女五錢で、アルボース石鹸を景品に出すとのことであるが、或紳士夫人、令孃、下女等都合六名にて、第二會場の見物中、紳士は急に思出したる如く、夫人に向つて、今日は皆の小便料三十八錢を支出したよ、と苦笑したのを見受けた、

不忍池畔

觀月橋は今更說明する迄もなく、不忍辨天社前に架したる新橋で、長さ百間の長橋、其中央に立ちて眺むれば、北に第二會場の各館あり、南に池の端仲町の各商店あり、白き旗、紅き旗、靑き旗、黒き家、相映じ、相亂れて池水の綠に落つる狀美しとも目ざましとも譬へん方なく、況して東臺の櫻花滿開の候

には、更に一段の美を添えたが、やがて開く蓮池に微風の薫する時は、橋の袂はなか〱立憂かるべく思はるゝのである、

各縣の賣店は、茅町方面に金鯱鉾屋上に輝く名古屋の賣店を中心として、一道、十七縣の賣店思ひ〱の裝飾を凝らして軒を並べ、先づ左より數ふれば、小笠原島の賣店は周圍に庭を設けて芭蕉を植ゑ、建物の庇巾廣くして熱帶地方の特色見え、隣は秋田縣の賣店で青きペンキ塗なるは蕗の色に形取りたるものか、岩手縣の南部鐵瓶、青森縣の賣店、宮城縣の埋木細工人目を引き、富山縣、石川縣は九谷燒を主とし、名古屋賣店、岐阜縣は塗物と傘、靜岡縣も塗物で、山梨の水晶水氣溢れ、茨城縣の赤塗家屋、大坂の粟おこし、群馬縣の織物、堺の貝細工、京都の賣店の塗色はお持前の濃厚、北海道の昆布とアイヌ細工等である、此周圍は入塲料を要する譯でなければ、日曜の夜の如はイルミチーションの見物にて、蓮池に人の觀月橋が架けられる有樣である、

女看守の服裝觀

終日館内に立つくして、來觀者に見つ見られつする女看守の一人は、來觀の中流以上の婦人及女學生の服裝について批評する所があつたが、流石は婦人でよく注意したものである、左にその說を受賣して見やう、

上流婦人の服裝、盛裝したる上流婦人中最も多く見受くる着物の地質は、紋御召、無地御召、縞お召、山繭お召等で、一樂織や風通は大分減少した傾きがある、而して其模樣は、江戸褄模樣、千代田模樣變り小紋等なるが、稍年たけたる人には、變り小紋が未だに多く、又色合は十六七歲より廿二三歲までは桔梗色、勝色、古代紫等多數を占め、二十四五より三十位までの婦人は、藍鼠、お納戸、鳩羽鼠、又三十歲以上は鐵色、寂鐵、藍氣鼠等すべて藍色が、流行の中心らしく、一時全盛を極めしオリーブ、代赭等を着する人は至つて少くなつた、

令嬢の服裝最も多きは山繭お召で、十二三より十六位までの少女は、千代田模樣の胸の邊までボカしたるが流行るらしく、色は瑠璃色、水色等すべて派手なるが多く、又妙齢の人は大抵江戸褄模樣に限られし如く、中には山繭お召の地質を利用して、大形の模樣を染出したるもあり色合は桔梗、勝色、次に紫といふ順序である、



羽織の地質と色合、地質は上中流を論ぜず、大方小紋縮緬、紋羽二重、紋綸子、山繭お召、黑縮緬等にて縞ものは十中の二分位しかなく、色合は四十以上の婦人ならば、寂鐵お召か黑縮緬の紋付に限られ、三十前後の人は藍鼠若くは葡萄鼠、次に多きは小豆色である、又新夫人及び令嬢らしきは、紋綸子の古代紫か桔梗色が十中の七部を占め、更に十三四歲の少女は紫紺、瑠璃色等の友禪縮緬が最も多きやうである、

女學生の服裝多くの女學生の中には、桔梗色羽二重の羽織に、大柄な瀧縞お召の製衣などして居る向も見受くれど、昨今は羽織なしの袴をつけたるが最も多く、着物は大島紬、結城紬、銘仙といふ順序、袴は頗る贅澤になり、絹カシミヤ等を穿ける女生は殆どなく、少しハイカラがる者は概ね鹽瀨を着けて居る、

ボカシ紋の流行、小紋縮緬の羽織に紋を付ける事は、相變らず流行し居れど、昨今お召に異樣なる縫紋をせし羽織を着たる花柳社會の婦人がボツ〳〵入場する故、一寸珍らしきもので其一人に問へば、ソは暈し紋とて、在來の縫紋と、反對に紋を地質で現はし、其周圍を蛇腹縫にして、朧月夜の月影の如くぼかしたのであるが、目下新橋邊には大流行を極めて居る、又凡ての女の紋の大きさは、一寸より九分位が普通である、

帶と半襟、昨今は季節柄の然らしむる故か、襦珍、緞子縮緬等よりも寧ろ鹽瀬の帶を〆め來るが多く、其色合は濃茶、白茶、金茶が第一にて、次は勝色及び藍色であるが、茶色の好みは山の手の人に多く、藍は花柳社會の新流行らしく、又半襟の色は紅梅、牡丹色、オレンヂ等で、妙齡の女に多く、二十歳以上の婦人には、紫紺、葡萄色、勝色等中年增は藍鼠に限らるゝが如く、且つ一時流行せし元祿式、ヌーボー式模樣は、何時の間に廢れしものか、今は殆んど見受けない、

以上はなか〳〵素人の觀察ではないやうに思はれる、まさか三越の仕立おろしでもあるまい（愛氷生草稿）

婦人博覽會

和田垣法學博士は面白い人である、女子商業學校の校長に擔がれ、今回もこの婦人博覽會に擔がれて其主腦といふことに表面なつて居られる、要するに我等の先達となつて、婦人の事業に力を致されることは感謝に堪へない、

この博覽會で、本家本元の東京博覽會と同じく、あまり大規模なものにする考でもなかつたやうであるが、この計畫が世間に洩れると、大分新聞などで騷ぎ立てたので、だん〳〵計畫が大きくなり、會場は五二會を借受けやう、會長には岩倉公爵夫人を賴まうと云ふ騷であつたのが、夫も噂のみとなつて、芝公園内の舊東京勸工場が改造せられて會場となり、

四月十四日午前十時開館式を擧行するやうになつた
會場は一號館、二號館に繪畫部といふのがある
一號館は參考部には、女子裁縫高等學院出品の古代女子服裝の雛形、下村呉服店出品の衣裳類、電信、加賀千代其他女流名家の書畫其他二三十點、階上には各内親王各女王殿下の御親筆等を拜掲する由であるが、記者の觀たる時は、まだ陳列せられなかつた出品済にあらずして開館するのは流行と見える、
二號館の實演部は、東京博覽會の機械館の向ふを張つたもので、森本女塾の綿細工、高山技藝教授所の摘細工、寺西の九重編物造花、藤本の刺繡、田中の經木眞田帽子、シンガーミシン會社のミシン縫、天野の端切繍人等の實作あり、例の跡見玉枝女史も獨特の燒繪の製作を實演せらるゝに、同じく閨秀畫家跡見花蹊、野口小蘋兩女史が場内にて毎日數十瓶づゝ各花の生花をなし、縱覽に供するといふのであるから、婦人は一度は此館に入るべきものであらうと思ふ、こゝに一の話柄がある、四月十七日實演場の果實部にて、盛裝したる婦人三四名、それ〳〵手藝を實演して居る所へ、一人の婦人に伴はれて來つた五歲ばかりの子供が、模造の葡萄棚を見て、アレ欲しい〳〵とせがみ、母親はあれは拵へ物であるからと云聞かせても聞けばこそ、大駄々をこねたるには實演者も氣の毒に思ふたとの事である、
美術部には例の田添幸枝女史の油繪が大分得意げに掲げられてある、演藝部はまだ見ねど、婦人の演藝があるとのことである、こんな事まで本家博覽會の眞似をするにも及ぶまい、
新聞縱覽所もあり、觀月亭其他數軒の飲食店もあり、別に勸工場式の賣店もあり、東京博覽會を觀る人は、この婦人博覽會をも一覽して話の種にすべく、殊に婦人にとりては、專門だけに本家より此方に見るべきものがある、
會期は六月三十日迄で、時間は毎日午前八時より午後五時頃、入劵場は大人十錢、小兒五錢にて、日曜大祭日でも同じことである、（豫見道人）



言語の注意

大阪　吉田静子

世の人たれも、相逢う時には、默止する事なし、かならず言を出す、故に言は第一意思を顯す重要のものなれば、之を用ゐるべきところにおいて、用ゐるべし、若し是を愼まず、意に任せて言ふときは、必ず過を來すなり、されば、賢者は、言を愼むを以て重要の務となす、さるを世の人は、之を輕々しく用ゐて、世間の浮說、あるひは他人の批評を爲す、斯くして無益に、貴重なる時を消失するは、實に大なるあやまちにして、且つ罪なることなり、故に過は多く口より招く者にて、一度口より吐きたる事は、とりけす事能はず遂には一生の傷ともなるなり、注意すべき事ならずや、萬事人に勝りて、人に尊敬せらるゝ人も、一言の爲に信用を失ひ、遂にうとんぜらるゝは、世に其類ひ多かり、又物學びする者も、他人の一日に成し遂げ得る所をも、日を倍して爲す事あり、是は無益の談話に心を傾けて、學びの道に意を用ゐざるものなり、故に書を讀み、藝を學ぶは、みな天賦の善良なるところを養ふものにて、長じて過失の少からんことをつとむるなれば志を立て、放心せず、つかのまも、務めはげむべし、言を以て、其こゝろのおくも見ゆるものなれば、輕卒に、用ゐるべからず、雜談なせる中は、互に無益とは知らずして、自ら其弊におちいるものなれば、苟も今の世に生れて、正直の者とならんとするものは、宜しく言を愼むべきなり、

貴族院議員 文學士 男爵 千秋季隆君選

和歌兼題 更 衣

天

ぬぎかへてたゝむ袂に山かせの
いつ吹いれし花の一ひら

宮城 大槻慶子

地

ぬきかへし今朝のけしきも心地よし
吹れてや見む葉ざくらの風

横須賀 柏原みな子

人

ぬきすてゝたゝむ小袖の懐かしや
春のかた見の花の香のして

相州 松下勇子

選外秀逸

〇〇　東京 比田井もと子

夏のきてけふぬきかへしから衣

心もかろくなりにけるかな

〇〇　甲府 名取正代子

ぬきかへてかろきたもとに吹風の
すが／＼しさを何にたとへむ

〇〇　東京 高橋珍子

ぬきかへてたゝむころもの袂より
春なつかしきすみれやまぶき

〇〇　兵庫 足立わさ子

花の香を惜みながらに着かふれど
蟬の羽袖も涼しかりけり

、〇　東京 小島榮子

花染のなれしにかへししらかさねきなれぬ夏のそてそさむけき

、、〇　東京 益子逸子

花のかにふかく染てしこゝろさへうつりかはれる夏ころもかな

、〇　陸前 末永喜惠子

野に山にさくらがりして花にそむそでの別れぞをしまれにける

、〇　陸前 大槻初音子

ぬぎかふる袖の別をゝしむかなはなにふれたるかたみおもへば

、、〇　千葉 中川千鶴子

うちしほれ袂にのこるさくらばな春のかたみとぬぎうかりけり

〇　常陸 堀光子

昨日まではるの名殘のをしまれてかへうかりける蟬のはころも

韻文

なつかしき山吹色のころもさへぬきかふるへきなつはきにけり
、○　東京　高野元子

こゝろして移り香とめし釉なればころもかへうき心地こそすれ
、○　大阪　木村春江子

ゆく春の名ごりをしみて若葉かけ今日ぬきかへる花ころもかな
、、○　越後　松永しげ子

きならせし花いろころも今さらにぬきてこひしき春をしそ思ふ
、○　東京　小林芳子

やま〳〵は霞に花をかさぬれどわが身はかろしころもがへして
、、、　岩代　菅野和子

衣かへ花のかたみをたちかれてたち居わづゝふひともあるかな
○　兵庫　足立ゑい子

山ふきのころもの色に夏みえてたもとすゞしくはやなりにけり
○　埼玉　横田政子

今はまた衣がへするときの來ていとおもはるゝはゝのみめぐみ
、、、　東京　牧淑子

立かへし夏のころものしらかさねかさねても猶そてそさむけき
○　東京　松本まつ子

衣かへて嵯峨のわかばに遊びけりちぎらぬ友とそてをつらねて
、○　岩代　岸野常子

ぬきかへし夏の衣はかろけれどなれしたもとのなほをしまるゝ
、、○　北海道　牧君子

佐保姫のかすみの衣ぬきかへてたもとすゞしきなつはきにけり
○　埼玉　横田やな子

夏きぬとけさぬきかふるたもとよりあやしくおつる花の一ひら
、、○　甲府　風間千代子

やま姫もはなの小釉をぬきすてぬいてやおくれす夏ころも着む
○　鹿兒島　松原岑子

知らぬ間に身がろくなりぬ四方山も綠したゝるころもがへして
、、○　東京　平塚白百合

裁ちかへて去年のまゝなる夏衣身に合ふとしとなりにけるかな
、○　東京　林艶子

ぬぎかへて我から春を捨てし身の牡丹ちる夜をしづこゝろなき
、、、　土佐　廣江子

きならしゝ花色ごろもぬぎかへて色もすゞしき今日にもある哉
、○　和歌山　植木撫子

ぬきかふるころもの色に夏みえてうらすゞしくも時めきにけり
○　埼玉　横田秋子

いつしかと暮行く春ををしむかな今朝ぬきかふる袖のわかれに
○　三重　米奥とめ子

なれ〳〵し匂へるころもぬぎかへて若葉すゞしき夏は來にけり
、、、　和歌山　村田濟子

ぬきかふるうすきたもとに花ころも過にし春をしのふけふかな
○　東京　中山よし子

ならひとてけふぬぎかふる夏ころもひとへに春のをしくも有かな
、、○　東京　原三幸子

青葉ふくかせも涼しきこのあさにかへしころもの心地よきかな
○　神奈川　鈴木まつ子

足ひきの山ほとゝぎすなかされはいつまてかへぬ花のさころも
○　奈良　栗山たか子

夏ころもかへてもさむき朝風にはるのかたみやしたにきなまし
、○　東京　吉岡龜子

夏きぬと花そめころもぬきすてゝそてもみとりにかふる涼しさ
○　東京　島村作子

人こゝろうつりかはれるよのなみにかへたる夏の白かされかな
○　東京　五十嵐游子

けふよりは花のころもをぬき捨てゝ釉のひとへに風をまたまし
、○　兵庫　田淵ふじ子

、、〇　熊本　吉住艶子

花にねふる蝶のあげ羽を袖たゝみ今日よりかへんせみのうす衣

〇　神戸　今西操子

ぬきかへてさらに名殘そなしまゝる花そめぎぬの別れと思へは

〇　清國　富成梓子

ちり殘る花やうらむとなつころも
ふりはへかれし岡のへのみち

、〇　秋田　古瀬りく子

人みなのうはへなかさるよの中に
うつれはかはる夏ころもかな

〇　常陸　岡田蔦子

なか／＼に更うき春の小袖より
何時ゝ花見のはなのひとひら

〇　下野　井上尙子

衣かへてみはかろけれとなこりをし
花の香こもる袖のあらねば

〇　東京　林環子

去年も着しものとは知れと今更に
めつらしと見る麻ころもかな

、、、　稲井　岩橋花子

去にし春の名殘をしさも忘られて
かへしころもの袖なつかしき

〇　名古屋、木下靜子

きのふまて友とたのみし花そめの
袖のわかれのをしくもあるか

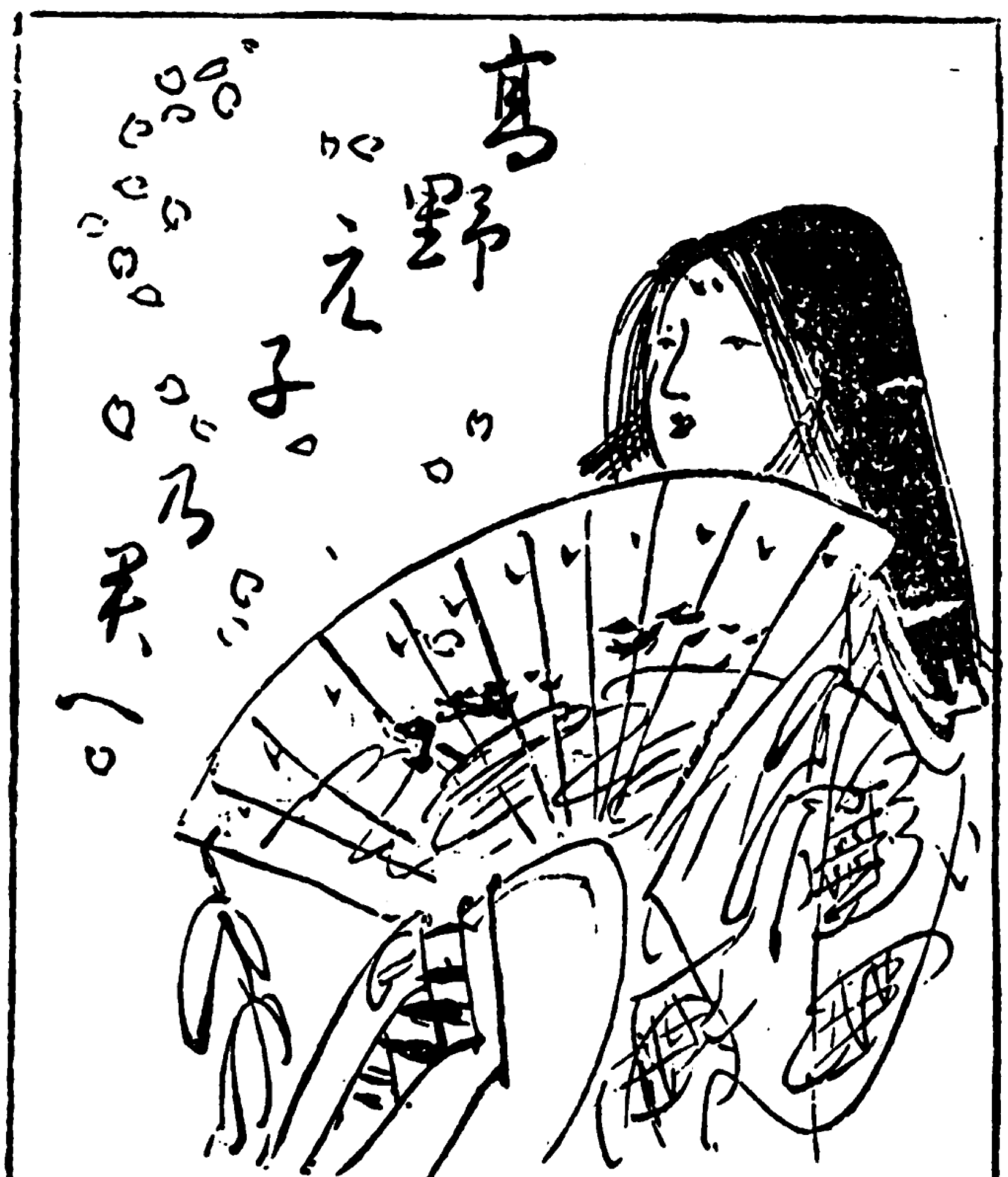
、〇　岩代　吉田千佐登子

山さとも花のたもとをぬきすてゝ青葉すゞしき夏ころもかな

、〇　奈良　菅俊子

めづらしと子らはよろこびさわぐなりけふぬきかふる蟬の羽衣

[illegible]　友



和歌敍題

小野小町

天

東京　高野元子

よにふりし春のなかめにうつろひし
花のすがたやいかにかをりし

地

清國　富成梓子

うき草のうきとないひそ言の葉の
はなにこゝろのいろはみえけり

人

横須賀　柏原みな子

しめ／＼とぬるゝも知らでたゝずめり
小町の塚の雨のたそがれ

選外秀逸

○○　東京　高橋珍子
誘ふ水に身をまかせすは浮草の
うきたる名をもなかさゝりけむ

○○　東京　牧淑子
花のいろはうつりにけりないたづらに
小町の袖やなみだなるらむ

、、○　新潟　岩本芳子
しげりあふ尾花のうちにまじりても色はかはらぬをみなへし哉

、○　東京　島村作子
花の色はうつりぬれども言の葉のにほひは千代も變らざりけり

○　東京　小島榮子
末のよに猶こそかをれながめしてうつりし花のきみがすがたは

○　東京　西村直子
逢がたき人をも見むとさよころもかへして君はゆめやたのみし

○　秋田　細矢はる子
老果てしすがたながらも言の葉の花のいろかはかはらざらまし

、、○　東京　比田井もと子
よにかほるその言の葉に今もなほちりにし花のをしまるゝかな

○　東京　吉岡龜子
浮艸のうきよのなかにすみわひてさそはんみつをまちし君かな

、、○　奈良　栗山たか子
あたし名を後の世までも殘しおきてあはれいにけん浮草やたれ

、、○　秋田　島田せつ子
ことのはに祈るまことは雲ゐにもかよひてふりしゆふだちの雨

、○　東京　原三幸子
花の色はながめせしまにうつろへとうつろはでよに匂ふ言のは

、○　東京　中山よし子
いたつらに遷りゆけとも花の色のかくはしき名はよに匂ふらむ

○　石狩　佐藤英子
うつろひし花の姿をなげきつゝひとりわびしくはてしきみかな

、、、　和歌山　村田清子
ためしなき平あん朝のそのかみに史かざりにしはなのうたひと

○　三重　米奥とめ子
花の色をなげきし君が言の葉はいまもうつらで世にかほるなり

、○　和歌山　植木撫子
天が下くまなくてらすすがたさへ歌さへよゝのかゞみなりけり

、、、　東京　花柳女史
いたづらに色香ををしむ春ならずわが身も詩歌の人にしあれば

、○　鹿児島　松原岑子
いたづらにうつろひてより花の色はうつろふものと思ひ知りけむ

○　北海道　牧君子
こゝのへの雲ふかゝりし其むかし思ひ出てゝは如何にかなしき

○　神奈川　中島茂子
花のいろに匂へるきみが言のはの千よのすゑまでかくはしき哉

、○　兵庫　足立あさ子
かれてより移ろふ花と知りし身もかゝるまでとは思はざらまし

○　兵庫　足立ゑい子
おとろへて身をうき草にたとへても人のちかひはすでに枯けり

、、、　磐城　鈴木喜久子
いにしへの操のほどぞしのばるゝ小町やはなのすがたなるらん

、○　神戸　今西操子

たくひなき花のすがたも飛鳥山散りてはおなしながめなりけり
〇　熊本　吉住艶子

限りある花のすがたをたのみてし君がをはりそあはれなりける
、、、　東京　五十嵐清子

唐ころもかへしてねけんそのかみをしのふもかなし君の言の葉
〇　相州　松下勇子

みめのみか心も君に似たるべきをみなのいまはなき世なるかも
、〇　東京　河合清子

花と見し君がすがたのうつろふはいかにわひしきながめ成けむ
、〇　甲府　名取正代子

色はよしうつろひぬともうつろはぬ言葉の 花そ世にゝほひける
、〇　甲府　風間千代子

言の葉はふかく匂ひて今もなほよにはやさるゝ君にもあるかな
、、、　岩代　菅野和子

散る花はまた来ん春をたのめとも人のさかりは二度めぐりこず
、〇　東京　小林芳子

花のいろも花のすがたもうつろひてくさ葉にそよく小野の秋風
、〇　越後　松永しげ子

語りつゝ人のこゝろにいかばかりあでとや見えし君がみすがた
〇　常陸　堀光子

ことのはにかゝやく露は花のいろうつりゆく世も變らさりけり
〇　千葉　中川千鶴子

露をいとひ風になびかぬ女郎花ひともと小野に咲きほこりけり
、〇　土佐　秋月廣江子

うつろふを常のわが世に千代かけてにほふもゆかし花の言の葉
、〇　陸前　疊原つる子

花の色うつりゆけどもかくはしき世に言のはのにほひのこれり
、、〇　宮城　大槻慶子

うつろはて千代も八千代も匂ふらんながめせしまの花の言の葉
、、〇　大阪　木村春江子

花の色ははかなくちれど敷しまのかくはしき名そ今ものこれる
、〇　陸前　大槻初音子

わが顔もやつれにけりと玉くしげむかふかゞみにかこちける哉
〇　福井　岩橋花子

いみじくも姿の花のいろかをはいく代つたふる小野のたをやめ
、、、　磐城　木幡きよ子

年ふれど今もをとめのかけみせて花こそひとのかゞみなりけれ
、〇　東京　土田八重子

およびなき雲井の春をゆめみてし小町の果こそもの憂かりける
、、〇　東京　林艶子

常磐なる松のみどりをよそにして花のすがたをなとたのみけむ
〇　東京　林穣子

花の色うつらふからはさそふ水あらはといふもかひなかりけり
、、〇　下野　井上倫子

くちはてぬ君が言のは花の色はうつりにけれと千代もかくはし
、、〇　常陸　岡田眞子

花の色はうつろひぬとも言の葉に妙なるはなを咲かせてしかな
、〇　秋田　古瀬りく子

よそおひし小のゝをすしき霜かれて露のしら玉みるかけもなし
〇　下總　高木美代子

のほろてふつくばの山のさくら花小町世にふりて色まさりけり
〇　長野　北澤千枝子

いまもなほ清きかをりは御園生の花よりたかききみがことの葉

和歌兼題　六月（梅雨・螢）　七月（池蓮・納涼）　八月（初秋露・常磐御前）

短文

天賞

菜の花　東京　土田八重子

畔道をそふて廻れる雪げの澤の緩き流れに、誰がつれなくも折りて捨つらむ、菜の花一枝・胡蝶宿せしまゝに下りゆく。さはらぬ程の春風は彼の小さく美しき筏の主の、夢さまさじとや守るが如く靜に〳〵送り行きぬ、

地賞

鶯の聲　岩代　岸野常子

「花咲く春の暁を早とく起きて見よかしと、なく鶯も心して人の夢をぞ醒しける、ホーホケキョ……」と聲張り上て歌ふた途端に、花を隔てた向ひの櫻、山で一聲朗らかな鶯の聲！道理で私の聲の反響としては、餘りによすぎると思ひました。

人賞

鬼怒川　下野　非上倚子

水蒼々、奇岩突出する間を、花の吹雪に送られて矢よりも早く流れくる筏の勇しさ、束のまに筏士の歌も聞えず、姿も目にわかぬ迄に成し、鬼怒の急流、折しも舟呼ぶ聲、答ふる聲、春雨けぶる鬼怒の渡し場、橋上の我さながらゆめの境にあるらむ心地しぬ。

○○春の夕　越後　大石ます子

春の夕、弦月は西の空にほのめき、黄がゝりし野邊は、おぼろに、狂ひつかれし蝶も暗のうちに迷ひ、白銀なす水のさゝやく畔、優しき草花小さき目を閉ぢて、流れにうなだるゝ

○○長閑　東京　神田けい子

春日暖にして、農家の庭には筵を敷きてまゝごとせる少女あり。垣の菜花にむつるゝ蝶追ふ小猫あり。家の内には機杼の響せわしきに引かへ、水車は緩く廻り、はね釣瓶は音なくして、牛羊牧場に眠れり。前なる道を馬曳きて行く農夫の鄙歌節面白う、漸く遠く漸く細く、遂に霞の中に消えて行

く。

、、○君いかに　　　　札幌　杉山清子

菜の花里に君を送り、別れ路にかへり見つ、かの柳の芽む頃、再び逢はん、と聲顫へたるに、心嬉しと笑はれしは一年の昔となりぬ、花は散り、柳はしげり、燕軒に訪れぬ、燕は之いて又還れり、されどされど君は如何に仕給ひけん、花いたづらにかをり、柳徒らに亂れぬ、思ひよる懷かしき彼方の峯に、雲深く風寒し。

、、○夕くれ　　　　東京　平塚白百合子

日は紫の山に落ちて夕霞む野の孤家、窓からほの〲と湖煙が遠寺の鐘は田の面を次へ〲と渡つてくる、背戸の田から蛙はアララ！コロロ！となき出す、と鍬かたげて歸りくる田吾作、高く鄙歌をうたひながら、窓の障子に颯と妻の笑顔があらはれた

、、○青葉城下を過ぎて　　　　東京　高橋たか子

今し藏王山の頂を離れたる一痕の弦月は夢より淡く、朧ろに霞む青葉城址、昔乍らに僅かに殘れる敗壘苔むして、寥々たる老松の影を宿しつ、杜漸く深き處政宗を祀れる小祠のみいと神寂びたり、元和、慶長の昔、剛勇無雙を唄はれし奥州武士の花たる若殿原の眞紅に燃ゆる鎧の袖を聯ねて、百千の駒繋ぎし瑞鳳殿の幻影、今いずくにぞある、師の君の宣へる桑田碧海の比喩、いまぞ思知られていと果敢なし、城東師團司令部の邊、誰が吹きなすか、悲壯の喇叭の響たえ〴〵なるが、寂寞たる天地に谺して消えて行く、あはれ人は其の響なむとか聞くらむ

、○歸途　　　　韓國　原野みき子

母君の藥を取に行て、歸る道、背戸の小川の前に來てつと立ち留つた、噫零落の我が身、はてしも知らず流れて行く此の小川の水、何と云ふ哀な對照であらうか、折柄夕暮の鐘は、陰々と我思を破つて傳て來た、家には病ます母君の一人淋しくも我を待ちます事でと、思はず走せ出した、

、○籠鶯　　　　上野　吉田靜子

うら〲かすむ春日和、かげさへ淡き竹藪の、揃せし花梅色褪せし、少さやかなる鳥籠に今絶えなんの憂き聲に啼く鶯の一聲や、

無限の恨みは含まれぬ、薫する梅や香に酔ひて、彼の枝、此の枝ととび交ひし梅の園生の楽しさに、憧憬唱ひし其の時を偲ひて、啼くや、籠の中、つめたかろらん鶯の涙に、吹くとしもなきそよ風に、あはれ可憐の鶯や、命とたのみし紅梅は、柱の下に悠々と眠る小猫の背に散りぬ、あとにいとしの籠の主、愛らしの目を濡はしゝ、涙も今はかれはてゝ鳴く聲さへも絶えだえぬ、

〇鹽の音　越後　松永しげ子

すなどりの夫が家に休めば、磯邊には妻の姿こそ見えれ、柴ふ童の数あまた且拾ひ、跳居して歌うたふ、霞かすむ沖には眠れる如き白帆三つ四つ、春の日かげ暖く、天地平和に満つ、櫻貝美しき水底にまろぶが如き鹽の音、そも神のすさびか………。

〇春の川　信濃　足立てる子

菜の花にたはむれて蝶二つ、或は上に、あるひは下に、互に睦まじく飛びかふ折、二歳ばかりの愛らしき小供、おぼろげなる足つきにて、よろ〳〵と走り寄るよと見ゆる間に、あはや小石につまづきて、おしりの皮もむけよと思ふほどに、テッチリとしりもち、大聲上げて泣くかと思ひの外、直ぐ起上り、又も蝶を目がけて走らんとす、此時蝶は早や向ふの花にうつりて………。

〇春の野邊　和歌山　島田千代子

廣々としたる野邊の景色の、心ゆくまで晴々として、空には一點の雲もなく、そよ吹く風に柳の糸もゆら〳〵と心地よげに靡く様小さき流に丸木橋、絢にかけたる様なる中に、桃花の今を盛と咲き出でけるもいとをかしく、これぞ眞の天然の畫趣とこそ思はるれ、

〇庭の櫻　和歌山　植木撫子

一雨毎に暖くなる此の頃。今朝しも、庭に出づるに、櫻も、はや、蕾少なくなり、げに、袖寒からぬ、雪の降りかゝれるがやうなり、あゝ、よき眺めなる哉、たゞひとりにては、花も、甲斐なしや、いで、親しきかぎり、打集ひ、いさゝかものせんとて、いそき、筆とりて、友の許に、

〇摘草　紀伊　とく子

春の日和の、いと暖かなるまゝ、妹うちつれて、摘草に出でぬ。行手には、黄金の花、今や盛りにて、小蝶はひら〳〵と舞ひ、青き麥畑それに續きて、野邊の錦をあやなせり。道傍には、艶なるすみれ、愛らしきひめうづ、やさしき蓮花、雄々しきたんぽゝ、など咲きほこりて、何れより手にせんと、惑はしむ。彼方此方に摘みまはる内、いつしか三つ四つの花束も成りぬ。いざ歸らましと、緋桃咲く下に佇めば、雲雀の歌、いと楽しげにぞ聞ゆる。

〇野邊の遊び　東京　濱野ひで子

東風ゆるく袂をはらひ、椿の花片二ひら三ひら、折しもあれや、うらわかき乙女子三四人、元祿袖にかひ〳〵しく、花たば片手にかたり行く様の愛らしさ、畫にもかゝまほしくてなむ、時その時、いづこよりか飛び來し蝶々、紅のリボンと、黒髪にへん〳〵、

〇追懐　東京　牧淑子

綴物を止ると、何處からか笛の音が聞ゆる、おゝそうよ、あれは去年なくなつた姉様のお好な亡友の譜、今はどこに是を御聞か、椿や閑でよく私と二人吹いたものだ　曲はをへた、窓を開くと、露深い朧月夜、玉椿ほろ〳〵と散る

〇渡船場の朝　埼玉　元田ひで子

朝がすみうすう空をおほひ、東天は刻一刻と白みわたりて、さす

日の光次第に爛爛たり、

折から南風に、白帆を任せて、船うたなつかしく漕ぎ來る舟子ありけり、ふと目をかなたにそらせば、こゝ幾十年となく、往來の人々を送迎へて、誰知らぬ人なき渡し舟は、今し向ひの岸をはなれて、近づくまゝに櫓聲漸く高まりぬ、乘れる客はと打ち見やれば、年うらわかく元氣みち〳〵たる一人の牛乳配達にこそありしか、

○思ひで　　土佐　廣江子

三々五々歌ひ行く少女のやさしき節に、我も昔の戀しきまゝ、古き寫繪とりいでぬ、對のりぼんに、對の帶、年さへ同じ圖子、椿子の君の微笑、さながらに嬉しかりし思ひ出は、泉と湧けど、あゝ別れしより十年の月日は、夢とすぎて、今は何處といはん方もなし、

○友人に櫻花を送る文　　島根　川本瀧世

田舍住居の事とて、野邊近く櫻花もいやましに咲き、時を笑顏に人待つ風情を、一人眺めんもなさけなきわざに候へば、一枝を手折り進め參らせ候間、御眺めにもなし下され度候かしこ、

○花束　　和歌山　島田千代子

誰が野遊びの戯れにやあらん、いとゞゆかしき八千草の露にぬれにし色香めでたく、赤に白にとり〴〵に摘み束ねたりし此花束、誰におくらん心にや、露の色香の滴るながめを、

○死　　岩代　菅野和子

奔馬を鎭むる秘訣は、四足を引捕ふなりといひしも身長六尺の大男、渾名を小辨慶と呼んでをつたが、胃癌を患つて死んだ、人々は「病には克てなかつた」かと老教師の死より惜まれた。

、○春夢　　木村春江子

君やこし、我や行きけむ、知っはと咲き續く花の陰に、相語らふは君と我なり、相見ぬ茲四年、君一句我一句、別情綿々としてつきず、梢の櫻はら〳〵とこぼれて我袖をうてば、蝶は君がリボンに宿りぬ、かぐはしき風そよ〳〵吹き來て、身の輕き心地すれば君も我もいつしか蝶と化してひら〳〵とみ空に、

、、、櫻花　　和歌山　村田清子

夕榮の色さめはてゝ、灰色したる雲の波、南をさしてよせかへる夕ぐれ、幽かにかよひ來りて、細くまたながく餘韻をひき、かなたなる山の峰をこゑて、遙にきえ入る遠寺の鐘をきゝつゝ、我は一輪二輪さきそめし櫻木のもとに、かぎりなき深き〳〵き思ひにしづみぬ、あはればかなきは浮世の習ひかな、わが親愛なりし兄上よ、今やいづこの空にあくがれ給ふぞ、君が白きみ骨となり給ひて歸り來まさんとは、それよその兄上はいぬる年の末つ方、二龍山の砲壘に譽れある戰死をとげられし、その葬式をいと莊嚴に行はれしは、去年の今頃なりし、兄上のめで給ひしは櫻花よ、その花、今又さきぬ、しかも昔の同じき色にほころびぬ、されど……

…………

新體詩

地賞

野遊　　越後　岩本芳子

空をさへぎる雲もなく　黑かみゝだす風もなく
小川の水はうたひつゝ　人待ちがほに山も笑む

高き姿を師とあふぎ　清き流れを友として
心をあらひ身をきたえ　遊暮さん今日の一日を

人　賞

み墓の前にて　大阪　木村春江子

柳櫻をこきまぜし　都の春をよそにして
今歸り來ぬ古里に　別れし後の物がたり
せんと思ひし君亡くて　花の香深き奥都城に
一人して泣く春の暮

椿花ちる春雨の　窓より望む西の空
雲の彼方の君戀ひて　袖しほりしも幾度ぞ
吹き行く風と身を代て　いそしみ給ふ我友の
玉なす汗を拭はんと　風にことゝふ夏の頃
月影清き秋の夜は　つはさならふる雁がねに
君が便をきかはやと　露けき野邊をさまよひぬ
落葉をたゝく木枯に　ねさめ勝なる冬の夜半
現にのこる俤に　猶しも君のしのばるゝ
四年の別ながけれど　互にかよふ玉章に
かたみの髮を慰さめつ　千代の契をちかひしを
學びの業のしげくして　音つれ絶えし此日頃

三十日に足らぬつかのまに　石となりたる我友に
泣きつかんとは思ひきや
路に手折りし花一枝　其花よりも猶赤き
我心根をくめや君
花の香誘ふ春風の　ひゞきは君かさゝやきか
さゝげし花に置く露は　君かみ靈の涙かも
ありし其よの俤の　宛らうかぶまほろしに
露けき袖のまたぬれて　あゝ去かたき奥都城や
夕暮つくる鐘の音に　今はとばかりぬかづきて
み前はなれし我なれど　今一度とみかへれば
涙に曇るいしぶみに　香氣の烟立ちそひて
おぼろ〳〵と暮て行く

○○信濃河畔　越後　大石ます子

河そひ三里風ゆるく　白帆のかげも美しき
春のけはひのふけ行て　見よや吹きくる風青し
廣き野原に草青く　かなたこなたに小丘あり
朝に夕に唄ひゆく　馬子のひな歌心地よし
神のたくみし天と地　さとき繪師にも及ぶまし

詩にはくらき姿なれば　うたはむ術にわなあらず
信濃河畔應たえて　嘲りもなく諸共に
平和の姿におほはれて　幸ある夢やめぐるらむ

○○漁船　兵庫　足立ゑい子

風もたのまぬ黒船の。　煙りは雲と立まがひ。
海原かすみ來の間に。　あと白浪と成にけり。

、、○懷舊　土佐　秋月廣江子

花爛熳の色ふかく　春酣のあさぼらけ
喜び多き身の幸を　歌ひし友や今何處
歌の庭のあたゝかく　思ふ事なき心には
浮世を渡る風をだは　知らで過ぎしも夢なれや
彌生の末をもろともに　あかしの書をいだきて
學の門を出しより　まゝならぬ世を悟りにき
かくて興行き幾歳か　昔のまゝの春くれど
西に東にちりぢりと　かへらぬ友をいかにせむ
思ひにやせし我も亦　磯邊にひとり泣くみなり
あはれ戀しき友どちと　手をとる時のもしあらば

、、○露い螢火　東京　平塚白百合

あゝうつくしの白露や　春野のいまし暮んとき
ゆかりの色にさき出し　菫のはなにそとやどり
さてもゆかしの香ににほふ
今宵も廣き秋の野に　一夜ひとよにほそりゆく
小虫の小咽喉うるほして　きよき御神のめぐみたば

さゝやき倣ふ白つゆよ

、、○瀧の賦　札幌　杉山清子

見ゐも雄々しや白龍の　色こき淵におどる時
泡は萬朶の花と咲き　音響に谷になり渡る
耶恐こゝに影もなく　山靜かなりまひろどき
俗塵遠く隔りて　幽鳥頭上の枝になく
あゝ神さびし汝が姿　清流岩にせかれては
千古變らぬ歌のこゑ　玉裕瑚の影消し
さらば此水瀬の子が　夢の惑ひに掬ぶ時
汚れの腕は戦慄きて　それや恐怖に飛やらじ
あゝいつはりのおき世に　罪と汚れのみ?ろ世に
これは映たる肌さゐて　瀧の姿ぞ尊しや

、○田舍の春　東京　牧淑子

菜の花つゞく田舍道　縫ひて流るゝいさゝ川
よろこびの聲ひゞかん　平和をうたふふしなかし
いかなる舞や夢むらん　白き胡蝶の菜の花に
靜にねむる長閑さは　花の都に住む人の
夢にだに見ぬけしきなり

、○隅田の春　兵庫　足立あさ子

名に流れたる角田川　花の香添へて行水に
何をれふるぞ都鳥　濁すむ御代の言問はむ

○夕榮　韓國　原野みき子

靄まれし乙女子の　歌の音遠く消え行けば
菜の花くれて山の端を　天の絵匠美くしき
赤黄紫とりどりに　越え來る雲のつゞきけり

、○人の心　磐城　鈴木もか子

永遠にかへらぬ君なれど
共にうたひし俤を
さびしき我に言とはせ
黒髪ながく別るれば
たゞ冷然と御座すかな

〇追懐　信濃　足立てる子

時しも春の末つかた
櫻も半ば散りうせて
夕ぐれさびし鐘の音は
さしも無情を告ぐる如
親しの君と手をとりて
清き月下の紅葉坂
そぞろ歩ける其ときは
希望の光り胸にみち
樂しき理想にあこがれつ
未來の幸を祈りしを
あはれ果敢なや死の神は
殘れる人の悲みを
しらぬ顔にぞ折からの
散るや櫻ともろ共に
遠き旅へといざなひし
昨日の夢と思ひしに
早や一とせを過せしが
長き旅路のみ疲れな

〇牧の子

吹きくる風は暖かく

人の心はいはげなや
靈の旗手に浮ばせて
はれさる眉目のうるほひに
人のかざしはつれなくて



あゝなつかしの我が君は
いづくの空にて癒されん

下野　井上倚子

牧場は三度緑しぬ

ふして窓より春のよの
廣き牧場の夕まくれ
ころぶ小牛の柔かき
手綱はなちてつれなくも
牧場を去れば廣き世に

おぼろの月を三度みぬ
口笛ふきて宵くさに
夢おどろかす罪はわれ
己が天地とさだまれる
つとめなき身が昔はそも

〇來天の春　横須賀　松下花童

死骸の衣裳手さぐれは
來天の春須笑子どの
見よりとある走り書
中には色の褪せ乍ら
香までは失せぬ菫草
鉛筆の跡淋々と
辭世を遺べし心意氣

和歌

天賞　常陸　岡田萬子

蛙

地賞

やまぶきの影もせかるゝ杣川の
水くさ増してかはづ鳴くなり

落花　　岩代　岸野常子

嫁おくる一むれすぎて風もなき
　　おぼろつき夜にさくらちるなり

人賞

同　　東京　高橋珍子

なくち子に乳ふくませておもはすも
　　又寐してけりはるさめの朝

〇落花　　横須賀　柏原みな子
灯けしてしばし見返るそでの上にやみにちりくる花さくらかな

〇同　　攝津　波多野秋子
かけろふのもゆる春日に七つ六つ蝶にまかひてさくらちるなり

〇同　　越後　大石ます子
散る花をあふぎにうけてうつくしの君舞ひましぬ春のうらゝ日

〇同　　東京　二村枝子
さくら花ながるゝ河をせきしめてしばし暮れゆく春をとめまし

〇同　　島根　川本瀧世子
若菜つむをと女の袖ににほふかな風にちりくるはなのしらゆき

〇同　　東京　小野寺うめ子
山さくらみねのあらしにさそはれてたにまの松にかゝる白ゆき

〇同　　原野みき子
うつくしきゆふばえのそら眺めつゝ文よむまどに花散りみだる

〇同　　埼玉　元田ひで子
乙女子が今日をはれとぞかざりけむ衣のそでにはなぞ散りける

〇深山の花　　宮崎　黒本信子
とふ人もなき山路にもはなさきてなほ世の春はかはらざりけり

〇殘花　　奈良　栗山たか子
ちりのこる靑葉かくれのさくら花春みしよりもあはれなりけり

〇同　　神奈川　鈴木まつ子
なか〳〵にみあかぬまゝに櫻花のころあたりないでやとはなん

〇卯花　　福井　岩橋花子
うすくこく夏のいろなる綠にもそまで咲きそふかきのうのはな

〇禁中更衣　　東京　島村作子
なつきぬと大宮人もかふるらんいろ香ゆかしきはなぞめのそで

〇菖蒲　　小椋　牧君子
年ごとに變らぬ御代のためしとて五月のあやめ刈りてふくらむ

〇夏花　　東京　西村直子
もろこしのたれやこぼれて咲きぬらむ竹のはやしの虎のをのはな

〇同　　東京　河合清子
夏引の手ひきの糸のながきひに見れどもあかずをだまきのはな

〇同　　東京　金子逸子
袖ふりてこてふもあそぶ山はたけ風もかをりてちさのはなちる

〇同　　東京　松本まつ子
雨晴てあつさもよほすやま畑のゆふひににほふかたかこのはな

〇同　　東京　松本まつ子
雨晴てあつさもとほす山はたのゆふひにほふかたかこのなな

〇同　　東京　高野元子
もろこしのねわけの竹のゆかりにて色よくにほふ虎のをのはな

〇八幡の濱觀月會にてよめる　　埼玉　横田やな子
琴ふえの音もさやかなるたかどのゝおばしまちかく月をみる哉

〇雪中梅　　兵庫　稻田早苗子
朝日かけさすやかた枝の雪とけてしつくもにほふうめの花かな

〇春雪　　陸前　大槻初音子

ふるうちはめに積ーたる程もなくはれてあとなき雪のあわゆき

、、○霞中鶯　　三重　米突とめ子

梅が香は吹くはる風にかをり來てかすみの奥にうぐひすのなく

、○餘　　兵庫　田淵ふじ子

なつかしきともに遊らん畦つたひうはらか中につみしさはらひ

○菫　　兵庫　高橋町子

谷川にいともゆかしく咲くすみれ友と手折りてかざしにやせん

、、○春　風　　宮城　大槻慶子

花にいとふ末はしられどふきそめてまづのどけさは春の山かぜ

、、○雲　雀　　東京　土田八重子

麥の芽と丈くらべするうなゐらにおとるましとや雲雀立つらむ

○同　　兵庫　足立ゑい子

おのれよりたかく雲井にあがれとや雲雀の親も子をおもふらむ

○桃　　札幌　杉山清子

日うら〳〵桃のはな咲く垣のうちひめぎみたちて翁めしたまふ

○野　遊　　兵庫　高橋町子

はるの野につくしたんぽゝすれ花友とつとひてつむぞうれしき

○野　遊　　東京　白井春子

花すみれ摘みにと春の野にいでゝ小蝶おひつゝ今日もくらしつ

、○春　眺　　兵庫　足立あさ子

行けど〳〵かぎりなきまでおもしろし若草野邊の春のけしきは

、○名所春花　　東京　神田けい子

照る月のひかり微かに夜は更けてくさらにくもるみよし野の山

、、○春　雨　　東京　平塚白百合

渡しよぶ翁のかけもおぼろにてぬるゝともなくはるのあめふる

○花　　和歌山　村田清子

日うら〳〵さくら花ちる垣のもとに唱歌をうたふ乙女やさしき

○花時心不靜　　埼玉　横田政子

野にゆかん山に河邊に老が身のしつこゝろなきはなさかりかな

、○山　花　　東京　小野寺うめ子

白雲のかゝるとみしは山のはのかすみへたつる花にそありける

、、○同　　秋田　鈴金すゑ子

雲とみえ雪ともみえてとほやまのかすみや花のにほひなるらむ

○夕　花　　常陸　堀光子

ふたつみつもつるゝ蝶の愛らしさゆふ日にはゆる花の木かけに

○見ぬ花　　東京　牧淑子

いとまあらば尋ねてやみん音にのみ聞しよし野の花のさかりを

、○蛙　　鹿兒島　松原岑子

しめやかに春さめそゝぐ小山田のなはしろ水にかはづ鳴くなり

、○山　吹　　磐城　木幡きよ子

たき川のきよき流れにいろ添へて影さへにほふやまぶきのはな

、、○暮春曉月　　新潟　岩本芳子

行くはるのわかれや月もをしむらんありあけ方の影のくもれる

、○晩　鐘　　大阪　木村春江子

春はなはあはれぞふかき咲きつゞく花にひゞきてかすむ鐘の音

、、○折にふれて　　磐城　鈴木もか子

あふれたるこゝろに暮れて掛けし衣忘れしよひや春さめのふる

、○同　　下野　井上倫子

くものすに花の香こめし羽ごろもな傷めて失せし胡蝶はかなき

○同　　神戸　今西操子

乙女子の道のしをりのひめかゝみ世にある限り愛でんとぞ思ふ

、、、同　　東京　濱野ひで子

年々にやまとこゝろと咲きにほふさくら花にもわれはならなん

、、○大石ます子の君へ　　越後　松永しげ子

み顔しらぬ君におはせどもろともにふみわけ入らん敷しまの道

、、、電氣燈　　岩代　菅野和子

ひと時にこゑなくともるともし火はひらくるみ代の光なりけり

、、、運動會　　信濃　足立てる子

春がすみ木の間をもれてちらほらと見ゆる日の旗男ましきかな

○水邊の松　小樽 牧 君子

住の江の岸邊に生ふるひめ小まつみどり色こくいく代經ぬらむ

○披齊遂昔　埼玉 横田 秋子

いにしへのかしこき文のあとみればやがて心もみがゝれにけり

ゝ○外國の友に　宇都宮 加藤 菊子

現身は八重の波路をへだつともよしみなかへそよろづ世までも

ゝ○夫を失ひし友に　土佐 秋月 廣江子

鶯はしきみまみをとはにくもらしゝ浮世のさがのにくゝもある哉

俳句

天賞

蠶飼

よき嫁の來て今年より蠶飼かな　東京 岩撫 ゆき子

地賞

日永

蜑の子か砂に文字かく日永かな　横須賀 佐藤 君子

人賞

春水

春の水に浮かして見たり繪具皿　東京 渡邊 しん子

紅梅一枝　東京 岩撫 ゆき子

ゝゝ○紅梅の藁屋は荒れて寂し

ゝゝ○紅梅にいさゝか貧をかざりけり

○寂とせし山寺の門や落椿

○長閑さの限りや花に舞ふ胡蝶

ゝゝ○下京や小雨のあとの朧月

○旅宿に寝ざめて聞くや歸る雁

○二つ三つ堅田を指して歸雁哉

ゝゝ○紅梅の椽に肩打つ孝女かな

ゝゝ○春雨や今日も早稲田に文士劇

○春風に吹かれて眠むる火男　東京 岡田 いと子

○都府樓の礎石數ふ日永哉

ゝ○化片の畑に冷たし春の月　東京 渡邊 しん子

○山にあり野にあり春の人心

ゝ○世に早きものは噂よはつ櫻

ゝゝゝ桃咲いて魚もよろこぶ汀哉　神戸 操子

ゝゝゝ魚の世界こゝにも同春の月

ゝゝゝ文机に春待つ詩囊并べけり　東京 篠塚 學子

ゝゝ面白き春のたろみや雪一ト日

ゝゝゝ白酒の口あたりよし桃の花

ゝゝ○十年の花の日記や夢おほし　土佐 廣 江子

○春雨の佗しきまでは若い哉

ゝゝ花のいろ辱れられたり菊根分　新潟 岩本 芳子

○何方から句に讀込まん花の山

雜詠

、、、鍬入た田もをちこちや初蛙

○桃の花雛の衣縫ふ日なりけり　　美濃　馬淵はや子

○紅唐紙の切屑散るや桃の花

○舞衣も脱かで假寐や春の宵

○初櫻心ときめく日なりけり

○名物は火事よ喧嘩よはつ櫻

、、○花ごゝろ千里の駒を買し夢

、○病む君に花の坐褥を送り兜

、、、御社の櫻散りけりくれの春　　朝鮮　原野美貴子

、、、小机に水仙かをるはるの宵

、、、陽炎や畫一面の加茂河原　　東京　土岐ゆき子

、、、琵琶欲に土筆踏み行く男の子哉

、、、鱠料るつまの手並や汐干狩

、、、絵馬堂に人四五人や春淺き　　磐城　鈴木喜久子

、、、猫ゝ厠の家根のくさのいろ

○鶯のなく枝うめの二輪かな

、、、白雲も遊ぶやうなり花の山　　兵庫　足立ゑい子

○雲か花か夫かあらぬか初櫻

○花にさへ雲のかゝるや家櫻　　兵庫　足立あさ子

○濡衣は酒に着せけり春の宵

、、、糸遊の引伸しけり春の丈け

○花の香や霞の網を洩れて来る

、、、鶯は竹にもどりて春の行く

、、、春風や里に下り行馬士の唄　　横須賀　柏原みな子

○師は在らで昔戀しき柳かな

○湯の宿や若葉に注ぐ朝の雨

○春の灯に物思ふ人の美しき

○朧夜の物問はれけり京訛り　　岩代　岸野常子

○無住寺や椿の落つる夜の音

○朧夜を按送る群のすさに兜

○白瀧に影曳く崖のつゝじ哉

○杖を擧て一日櫻に遊びけり

、、、床几の下女起しけり三の鐘　　東京　高橋珍子

、、、八時よといはれて起る春の朝

、、○幼子の下駄流れけり春の川

、、、絵を描む手こそ欲けれ花の頃　　越後　松永しげ子

、、、桃一枝買ひて夢も覚しけり

○雛様の畑につけたり桃の花

、、、雪解けて水音高し春のかは　　信濃　足立てる子

、、、幼な子が無念に摘むや春の花

、、、白犬もよごれて歸る燒野哉　　和歌山　島田千代子

、、、雉の子も現に見ゆる燒野哉

○菜の花や蝶々二ツ隠れけり　　大阪　木村春江子

○花束は籠に満ちけり暮の鐘

○陽炎の燃へ立つ石に賦し兜　　東京　岸常子

○傘の下かさの上行く燕かな

、、、燈籠を舟で廻るや春のうみ　　大阪　船津澄江子

、、、菜の花や漁笛一聲瀬東走る

、、、眺めつゝ霞に暮るゝ旅の空　　磐城　木幡きよ子

○鐘の音に霞をたどる山路哉

、、、永き日を花に忘るゝ夕へ哉

○育ちたる古巣たづれて燕哉　　東京　土田八重子

、○散りて又梢にかへる蝶の花

、○三日月の影より落る雲雀哉

○鶯の老い音や更に珍らしき

○惓れさにゆすつて見たり落椿　　札幌　杉山清子

、○はるの夜や耳に紅さす京女

○春淺き浮世小路の寒さかな　　横須賀　佐藤君子

ヽ○若殿の筑前琵琶や春のつき
○春寒を作事部屋にて焚火哉
○窓あけて落花見て居る女哉
○朧夜に二人の影の行衛かな
ヽヽ○春雨や三輪の茶屋出る市女笠

東京　杉江光子

○夕づゝや欄に渡るやまの鐘
○宮島の釣燈籠やおぼろつき
○わか草や鶏あそぶ椽のさき
○藁屋根は小鼓つゝきや春の雨
ヽ○炭を切るをんな美し春の雨

東京　中川ゑい子

ヽ○茶煙の淡く立つゝなり花の寺
ヽ○春の夜や古文書を見る經机
ヽ○玄關によき下駄並ぶ柳かな
ヽヽヽ文壇に花咲かせけり桃の村

下總　高木美代子

ヽヽヽ絶壁にふり懸りたる藤の花
ヽヽヽ貴公子の館や近き櫻川

横須賀　松下以星子

○姥櫻優さしき人のすさひ哉
○急に身の輕るくなりたる袷哉
ヽヽヽ菜の花や畝に眠る子何の夢

横須賀　藤野雪子

ヽヽヽ道問うや梅の籬落の村はづれ
○荒寺の柳に暮るゝ雨のおと
ヽ○紅梅や硯をあらふ上根岸
○うたゝ寝の覺れは花の初便
ヽヽヽ春風や茅屋まはらに川柳し

東京　高野みち子

ヽヽ紅梅に白花咲かせし春の霜
○春風にその名も薫る飯盛山

横須賀　田村静子

ヽ○春の野は蝶も疲れて暮れに鳧
ヽ○春の風花見る人をなぶり行く
ヽ○春の夜を伯母と語てふかし鳧

○河内路や菜花に人暮れ行きぬ
ヽヽ仰ぎ見る故郷の空やかへる雁

東京　木村つや子

○盃に花散り込むや花の宴
ヽ○子鼠の何か引き行くはるの宵
○二つ三つ紀の山越えて歸雁哉
ヽ○菜の花に蝶顯なや夢に入る

横須賀　渡邊雪子

ヽ○はるの野に景色拾うて女繪師
○はるの雨花にわひけり小町塚
○草香る瀧紅梅やをんな繪師
○村十戸他に鳥なし夕雲雀
ヽ○うぐひすの立臼覗く米三粒
○紅裳のぬれて戻るや春の雨

横須賀　高橋つれ子

ヽヽヽ暫らくは花のつかれや眠る蝶
ヽヽ○花實の忘れものらし門の蝶
ヽヽ物思ふ夜とはなりけり朧月
○能舞臺花ちりかゝる日暮哉
○山吹や野田の玉川水きよき
○春雨やをんな相手の三世相
ヽ○蝶一つ二つ花屋の裏をもて
ヽヽヽ桃咲いて村長京へ上りけり

横須賀　吉田染子

○陽炎の立つ畿はるか蜃氣樓
ヽヽヽ九重の櫻ひらきし日和かな
ヽヽヽ春の夜に人形と共に寝た子哉
○春の宵蘭燈淡き延寮館
ヽヽ半身は兵火に失せし樓かな

東京　獅子井きよ子

ヽ○花散るや老僧樹下に詩を想ふ
ヽ○春に倦みて亦碁に飽し日永哉
ヽヽ○飯くろき山の旅籠や春の旅
ヽヽヽ小銃の烟のすゑや雉子の聲

東京　中川ゑい子

○文臺に讀み上げの句や梅薫る

女鑑投稿規定

和歌兼題二、兼題外和歌、新體詩、短文、俳句、小說、隨筆、日記、及家事に關することは何にても投稿を歡迎す、

投稿は每月十日着迄の分にて締切る。字體は成るべく鮮明に願ひたし、

賞品は天賞一圓、地賞五十錢、人賞三十錢、特に優逸なる作品に對しては、それ以上五圓以下の賞金を呈すまた入選の作にて特に佳作と認むるものには綿繡を挿入し、錦上更に花を添ふべし

◎從來の投書にて歌文の側に姓名を記入せざりしものにて、掲載するを得ざるもの少からず、以來封皮には兎に角に、原稿の側には一々姓名を記入せられたきものである、實を申せば、大に見るに足るべき投書の、止むを得ず机底に納めて居るのがあるので、猶每々記載する如く投稿は成るべく半紙にせられたく、或は考へられた積りで、短冊の如き形をしたるものなどは、却つて取扱に困る。

定價

一冊	前金貳拾錢
三冊	前金五拾七錢
六冊	前金壹圓拾錢
拾貳冊	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁三十二行	金八圓
一頁六十四行	金拾貳圓
表紙一頁	金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割增の事）◎前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし◎領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし◎爲替受取人は東京市京橋區築地二丁目貳拾壹番地國光社と御認めありたし◎振込局は東京築地郵便局へ◎御照會の件は返信料御送附あるべし

明治四十年四月廿八日印刷
明治四十年五月一日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社國光社
右代表者　東京市京橋區築地二丁目二十番地　[illegible]本忠次郎
印刷人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　河本龜之助

發行所　株式會社國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）

國光社發行

◉女學校用教科書

文部省檢定濟

阿多廣介
園田竹熊 先生編纂

●女子補習讀本

菊判和綴美本

正價 上二十五錢 下三十錢 送料 各四錢

本書は高等小學校卒業後更に補習科を修むる女子及び修業年限二ヶ年の高等女學校技藝專修科生の使用に供せん爲め編纂せられたるものにして力めて國定の小學讀本に連絡を求め其材料は家事、家政、女工等を始め實業に關する事項。國家公衆に對する必要なる心得、美文和歌等の趣味を涵養するに足るべきものを撰擇したれば實用的並に文學的興味を兼有せる完全の讀本として學校は勿論家庭に於ても必須のものなり

川村理助先生著

●高等女學校用 生理衞生新教科書

全（文部省檢定濟） 正價 五十錢 送料 六錢

東京府第一高等女學校敎諭 市川源三先生著

●高等女學校用 教育學教科書

全（同） 正價 五十錢 送料 六錢

市川源三、利根川與作兩先生共著

●高等女學校用 國史教科書

全二冊（同） 正價 各五十錢 送料 各六錢

川村理助先生著

●高等女學用 動物學新教科書

全（同） 正價 五十錢 送料 六錢

川村理助先生著

●高等女學校用 植物學新教科書

全（同） 正價 五十錢 送料 六錢

國光社發行

東京美術學校長　正木直彦先生序文
同　校教授　島田佳矣
同校卒業生　野口駿尾　兩先生共著

女子技藝 編物模樣圖按

全五冊　石版極彩色　大和綴美本

正價　●松の巻　金四拾錢　櫻の巻　▲藤巻各金五拾錢
●蘭の巻　●梅の巻　各金五拾五錢　送料各金四錢

本書は毛糸、絹糸、木綿糸等にて書模樣を編み或は刺繍するに必要なる圖案即ち下繪を集めたるものなり　從來此種の書籍歐米各國にて出版されしものなれども其意匠圖案の樣式風味は直ちに之を我が工藝に適應する事能はざるのみならず價格の點に於て不廉にして一般に普及すること能はず●本書は著者が專門獨特の意匠を以て多年歐米の圖案を研究參考し前項の欠點を補ひしものなり●編物は貴賤都鄙の別なく本邦女子適當の手藝にして漸次發展しつゝありて將來大に海外輸出の望ありと雖も從來の意匠圖案は幼稚拙劣を免かれず

●本書著作の順序は片假名、平假名、歐文字等の簡易なるものに始まり横模樣、連續模樣、角模樣、圓模樣、隅模樣、單獨模樣等の順序を經て漸次高尚優美なる繪畫的下繪に進み花卉、虫、魚、風景、人物を蒐集したり●本書は獨り斯道修學者の好教科書なるのみならず技藝家の好參考書にして亦た麥稈細工織物等各種技藝の參考書たるの價値を有す

女鑑

明治四十年五月一日發行　毎月一回一日發行　第拾七年第五號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可



東京築地株式會社國光社印刷